

773

56

773-156



1200501600145

傳トスリ・ツヅラフ

著 ブッカ・スウリュ
譯 瀧 野 高

×

複写

京 東
房 書 出 河



471

26/11

傳ト



著 譯
高 野



房 書 出 河



序にかへて

リストの文獻として所謂「想ひ出を綴つた」程度のもは實に莫大な數を示してゐる。そしてそれらの中には確かに用心して使用されねばならぬやうなものもあるが、又人間リスト、藝術家リストに關する不變の價値をもつ比較的短い論文（例へば、ルイス、ロイス、コジマ・ワグナーの如き）もある。然し吾々がリストの如き偉大なる藝術家の傳記として、ただ通り一遍の要求を満足せしむるやうなものを求めるのは意味のないことと云ふべきである。最初のリスト傳の作者リナ・ラマンはそのリストの生涯の第一章、少年時代と名手時代（一八一―一八四七）に於て（この巨匠自身の手傳ひを受けて）傳記的な問題を殆ど全部明らかにした。然し一八四七年以後のことに就ては、彼女の著述は完全に役に立たない。といふのはその部分には實に見事な樂曲分析で填められ、傳記上の事は書かれても居らず、ウィットゲンシュタイン侯爵夫人の影響を受けたことが甚だしく歪んだ形で記されてゐるからである。またこの藝術家の生涯の最も重要な時期、即ちワイマールに於ける音樂的全盛期と「新ドイツ派」の成行きのことについては殆ど顧られてゐないからである。

私は一九〇九年に出た私の大きなリストに關する著書に於て、様々の奇妙な光を放ちつつ多様に動

いたリストの生涯を、殆ど整理し難い程の多くの材料から、或る大きな姿にまで作り上げることが先づ敢てやつてみようとした。その時私が特に規準としたことは、何にも拘泥せず、眞實を書くといふことであつた。それ故リストの生涯を實際こんな風であつたかも知れないといふやうに書いたり、或は今日の多くの人々が恐らく期待するやうに、即ち友人の手から、或は話上手に傳へられた傳記風のものから、何にも考慮を拂はずに、不當にも保存されたやうな出鱈目な榮え輝くリストの生涯を書くことを断念したのである。そして私は神の如く崇められた理想の姿を書くことを止めて、彼の本性にある貴族的な心によつて明るく照り輝いてはゐても、又一面、彼に付き纏うてゐた人間としての弱さや人間らしさを如何ともすることが出来なくて、浮世を漂泊ひ歩いてゐたやうな一人の人間の姿を、肉と血とから作り上げようとした。この人間としての弱さについて何にも言はなかつたり、或は全くこれを除いたりすることは、私には馬鹿らしく思はれる。といふのは、いくら偉大な天才でも結局はやはり、一人の人間に過ぎないものであり、そして人間としてのみ吾々に理解もされ、共鳴もされ得るからである。

リストの傳記の最も困難な點は、彼の内面的なものが作られて行く姿と、輝かしい外面的なものが出来て行く有様とが一緒になるところにあるのである。本書に於て私は傳記的なものに重點を置き、個々の作品を詳しく述べたり、分析をするやうなことは問題とせず、リストの作品に於ける特に個性

的な、そして新しい問題を取り上げることだけに限つた。かくて私は次のやうな二つの事を考へさせられた。即ちリストの音楽史上の優れた意義は、彼の作品そのものの永久的な價値に存するよりも、寧ろ一層、開拓者として及び先覺者として、彼が後世に及ぼした影響の中に存するのである。そしてこの事は唯時代の姿を充分に知ることによつてのみ分るのである。第二は作曲家リストの公正にして普遍妥當的な評價を下すには、黨派争ひの止んだかに見える今日でも、尙大きな困難に衝き當るであらうといふことである。即ち人々が後で私のリスト傳にある足りない所を補はうとすれば、それは出来るかも知れないが、以上の困難はどう考へても残されてゆくことであらう。

この新版は初版とは色々な點で異つてゐる。幾多の誤謬は訂正され、そして敘述は、その間に新しく確定された材料や私の撰に成る（なほ未發表の數百の手紙も含めて）材料に基いて擴められてゐる。敘述をしてゆくの妨げになつて、餘り面白くないやうなことになる勝ちな、前の版で初めて公にした無数の書類や手紙は、今度は全部省くことにした。そしてそれはただ拔萃の程度で文中に編み込まれてゐる。又本書を一層緊張した文體のものとし、且つこれを楽しみやすい讀物とするために、凡ゆる學問的な註釋（出典、脚註、参考書目等々）を擧げることにはしなかつた。それ故初版は全く少い部數ではあるが、今でも尙發賣されてゐる。當書の最後の章に對しては、尤も、或る關係者から疑問を投げかけられたことがあるが（然し何もそれに對する反證を示さうとするわけでもなかつた）。

凡てそこに問題となつた事柄について何回も良心的に吟味した末、眞理といふ點からは何も徹底的な改變をしなくてもよかつた。

最後に私は、市立図書館長ヨハネス・バトカ(プレスブルグ)、アルトール・フリードハイム(ミュンヘン)、エメリヒ・カストネル(ウイーンのワグナー図書館)諸氏に、此の新版を作るに當つても獻身的な御協力を賜つたことに對して、衷心より感謝の意を表する次第である。

一九一一年十月一日

ベルリン、ウエストエンドにて

ユリウス・カップ

譯者序言

ルネッサンス以來、近世音樂史は、音樂といふ藝術を通じて、人間の本质及び人間の目標の解明に向つて進んで來た。即ち文化史一般の課題と全く同様の課題を、音樂史も背負つて來たものと言つてよいであらう。

バロック音樂の完成者たるゼバステイアン・バハに始まる人間的なるものの解釋は、ベートーヴェンに至つてその深奥に徹し、そこに一應の解決を見出し得た如き觀があつたのであるが、その後の世界史的轉變推移と共に、複雑多岐なる人生の諸相がここに展開し、従つて音樂もそれと相俟つて、多様な様式、類型を現出しなければならなくなつたのは、極めて當然なことである。

人はベートーヴェン以前の音樂を古典主義と言ひ、それ以後の音樂を浪漫派と名づけるけれども、かかる様式的區別は、如何にも暫定的な感がないでもない。殊に十九世紀の音樂を浪漫派音樂と稱して一括するが如きは、音樂史の研究として未だ尙非常なる不滿を感じないわけにはゆかないのである。シューベルト、シューマン、メンデルスゾーン、ショパン等の音樂、或はベルリオーズ、リスト、ワーグナーの音樂に於ける個性的相違と様式的特性を、吾々は更に立入つて考察して見る必要を痛感するの

である。

十九世紀の新しい音楽に於ける種々なる様相を究明すればする程、吾々はそこに音楽に關する問題が如何に多く、如何に廣範に亘つてゐるかに思ひを致すであらう。而も現代の音楽界に於て吾々の直面する凡ゆる問題は、正にこの時代より解明せられずして繼承されてゐるが如き感を深くするのである。十九世紀以來のかかる複雑なる、多面的なる諸問題を、殆んど全部取り扱つた音楽家を、正に吾がフランツ・リストに見出した時、吾々は彼の偉大なる人間に對して驚嘆の眼を向けずにはゐられないのである。

フランツ・リストを研究することは、現代文化としての音楽の行くべき方向を知る上に、現代音楽界の指導原理を把握する上に、缺くべからざるものであるといふことを譯者は痛感した者の一人である。リストは卓越せる演奏家であり、優秀なる指揮者であつたばかりではない。彼は又作曲家として、音楽運動家として寧ろ一層偉大であつた。批評家としても、文筆家としても彼の地位は又決して低いものではない。彼の教養、彼の人格が如何に廣大であつたかは、彼の生涯を詳細に知れば知る程、益々明らかに感ぜられるのである。

かくも優れたる音楽人リストは、然しながら從來ヨーロッパ人によつてさへも正しくは理解されてゐなかつたらしい。而も吾國に於てはその誤解の甚だしきものを屢々見出すのである。音楽の正道を説

く者、文化の進むべき正しき標的を示す者は、俗人多き世間に顧みられないことが多いが、これは甚だ遺憾なことである。

然るに最近に至つてリストの價値も益々その光輝を現はしつつあるやうである。彼の音楽の目指す方向を正當であると認識する者、彼の藝術に對する主張に共鳴する者は、愈々その數を加へつつある。彼の畏敬せる友ワーグナーの藝術が、その眞價を發揮するに従つて、リストの音楽はその認識を更に新たにされねばならなくなつて來てゐる。ルネッサンス以後の近世音楽史が、ワーグナーの音楽に於て、若しその結論を見出したと考へることが出来るならば、フランツ・リストの存在意義は實に重大でなければならぬのである。

リストの生涯は十九世紀の初頭より末葉に至る殆んど全世紀に亘つて居り、彼を取り卷く世界は而も殆んど全ヨーロッパに跨がつてゐる。この意味に於ても、リストの生涯を知ることとは興味深いものがあるといはねばならない。十九世紀の文化史を眺める上に、十九世紀の精神史を考察する上に、このリスト傳は貢獻するところの多いものであることを確言することが出来る。卷末にリストを中心として特にその文化史的年表を編纂附加したのは、かかる意味に於て讀者を益するところ少くないと信じたためにほかならない。この年表を作成するために役立つものは Arnold Schering; Tabellen zur Musikgeschichte, 1934 であるをここに斷つておきたいと思ふ。

本書は數あるリスト傳の中で最も優れたものの一つであると思ふ。著者ユリウス・カップは單なる音樂學者ではない。彼は一九〇六年に化學を専門として博士號を獲得した後、音樂の文筆家に轉じ、多くの著述を公けにしたが、特にワーグナー、リストに精通し、この兩人に關係ある公刊物が最も多く出版されてゐる。一九二三年以後はベルリンの國立歌劇場の演出顧問として重要な地位に就き、特にワーグナーの演出家としては、第一人者に數へられてゐる現代ドイツに於ける著名なる人物の一人である。従つて彼の描く人間及び藝術家リストは極めて生々としてゐる。古き型に屬する學者の如く、乾燥無味なる分析に走ることなく、或は主觀的な美學の見地に立つて獨斷的解釋を施すことなく、リストのあるがままの姿を如實に描き出してゐる點、他に類書を見出すことが出来ないだらうと思ふ。譯語の不完全なることや文章の生硬なることに於て、本書は必ずしも原著の表現せんとする意圖を十分に傳へることが出来なかつたことと思ふが、この點幾重にも讀者にお詫びせねばならないと思つてゐる。

最後に本書を譯出するに當つて種々御援助を賜つた牧定忠氏、大西通夫、當別當卓志の諸兄に衷心よりの謝意を表する次第である。

昭和十五年九月十六日

譯者

目次

序にかへて	一
青少年時代(一八一一年—一八三四年)	三
一、ライディングに於ける少年時代(一八一一年—一八二〇年)	三
二、父の指導下にあつた修業時代(一八二〇年—一八二七年)	九
三、心の葛藤と究極の勝利(一八二七年—一八三四年)	二六
放浪時代(一八三五年—一八四〇年)	四九
一、マリー・ダグー伯爵夫人	四九
二、スミスでの同棲生活(一八三五年—一八三七年)	五三
三、イタリア旅行(一八三七年—一八三九年)	七二
名手時代(一八三九年—一八四七年)	九二
一、最初の凱旋(一八三九年—一八四一年)	九二
二、偉大なる年(一八四二年)	一一三

三、最初の歐洲大旅行(一八四三年—一八四四年)	二六
四、ダグー伯爵夫人との別離(一八四四年)	二七
五、再度の歐洲大旅行(一八四四年—一八四七年)	二八
六、リストの演奏	二九
ワイマール時代(一八四八年—一八六一年)	二九
一、カロリーネ・ザイン・ウイットゲンシュタイン侯爵夫人	二九
二、ワイマール歌劇の勃興(一八四九年—一八五八年)	三〇
三、リスト、ワイマールを去る	三二
四、文筆家としてのリスト	三五
ローマ時代(一八六一年—一八六九年)	三二
一、リストとウイットゲンシュタイン侯爵夫人	三二
二、一八六一年より一八六九年までの事件	三三
ワイマール、ペスト、ローマ時代(一八六九年—一八八九年)	三五〇
一、この期間の主なる出来事	三五〇
二、一八六九年より一八八六年までの事件	三五九

三、バイロイトに於ける最後	四六
フランツ・リストの作品	一
フランツ・リスト年表	4
索引	27

フランツ・リスト傳

ユリウス・カッパ著
高野 瀏 譯

『人間リストは藝術家リスト
よりも遙かに高く聳え立つ。』

(ワイマール大公に獻じたロールフの言葉)

青少年時代 (二八二一年—一八三四年)

一、ライディンダに於ける少年時代(二八二一年—一八二〇年)

リストといふ名前は昔のハンガリアの貴族の名前である。フランツ・リストは嘗て『自分達のリストといふ名前はハンガリア語で粉といふ意味を持つてゐるから、自分達は良い小麦粉を作り出したものである』と考へたことがある。だがリストの一族やその素性、又その一族が夫々の時代に如何なる運命に遭つたかを知るには確かな消息は少しもない。此の事に關する凡ゆる證據は百年に亘るハンガリアの内亂のために無くなつてしまつた。が一族の傳記によるとキット湖畔(コミタート州のワイゼルブルグにある)に住んでゐた男爵リストイ一家の血を引いてゐるといふことである。リストといふ名前は *Listr*, *Sizky*, *Lishins*, *Listins*, *List* といふやうに色々な形で書かれ、最後に

List といふ異つたのが現れた。吾々は我が巨匠フランツの曾祖父ゼバステイアン・リストについて先づはつきりしたことを述べる事が出来るであらう。それから又彼についてはフザール一世陛下の聯隊の下士官であつたといふことだけが知られてゐる。ラーゲンドルフで一七五五年十月十四日に生れた息子ゲオルグ・アダムはエステルハツィー侯爵の私領の管理人であつた。そして三度結婚をして二十六人の子供をまうけた。かつ彼の財政状態はかなり切りつ

めたものであつたので、多くの幼児たちに金のかゝるやうな教育は少しも施すことが出来なかつた。子供達は大抵實際的な職業に就き、運命の爲すがまゝに四方八方に散り、早くから別れ別れになつてしまつた。最初の妻が生んだ長男（一七八〇年生）が同じくアダムといふ名をつけられた。彼の兄妹の中になほ二人だけが知られてゐる。一人は第二の妻が一八〇一年七月五日に生んだアントンで、彼は富裕な時計師であつたが、一八七六年にウィーンで死んだ。そしてもう一人は第三の妻が生んだ一番小さい息子エドアルド（一八一七年一月三十日生）で、彼はフランツ・リストの生涯に於て後年大きな役割を演じて居る。

アダムは父と同じ職業を選び、夙にエステルハツィ侯に仕へ書記として世に出た。彼はその役に非常に適してゐたので、昇進するのが迅かつた。元來彼は音楽家になりたかつたのであるが、その教育を受けるには財産が充分でなかつた。然し彼は一生の間音楽に對する大きな愛を持ちつゞけ、そして素人ではあつたが優秀な技能に達してゐた。彼が侯爵の行政秘書の地位に就いてゐたアイゼンシュタット、即ちエステルハツィ侯の城下に於て、嘗てヨゼフ・ハイドンによつて指揮されてゐた有名な侯爵の音楽團の一員と緊密な交際をするやうになつた時、彼の音楽的素質が特別に促進されたのであつた。彼はまたハイドン自身とも間もなく盛んに、そして親密に交はるやうになつた。もう一人の大音楽家ネボムク・フムメルはアダムと宮廷で知合ひになつて以來、彼の家へ屢々出入りをし、彼に強い影響を與へた。アダムはシュピネット（譯者註、ピアノの前身樂器）の他にギターを愛してゐたが、フムメルの素晴らしいクラフイア演奏に感激して、それから専ら何時もクラフイアに熱中し、暇さへあれば音楽ばかりに時を費した。彼は自分の今やつてゐる職業に對して自分を冷淡ならしめたやうな彼の誤つた生活について、よく歎いてゐたものであるが、然し一度選んだ地位にじつと堪へ忍んでゐたのであつた。そして非常に忠實に彼の役目を果して行つ

た。とかくしてゐる中に彼の敏腕を非常に高く買つてゐた主君によつて、彼は一八一〇年にライディング領の支配人の地位に拔擢された。其處はやはりコミタート州のエーデンブルグにあるのだが、アイゼンシュタットからは數時間かゝる所にあつた。成程このことは確かに、職業上の順調な昇進を意味してゐたかも知れないが、彼にとつては苛酷な打撃であつた。斯くして突然彼アダム・リストは刺戟多きアイゼンシュタットの音樂的雰圍氣から此の私領の孤獨の中へと移され、初めの中は吾が身の不幸を深く感じなければならなかつた。彼は間もなく、自らの孤獨を分ち合ふ生涯の伴侶を探すやうになつた。そして彼が前にウィーンで一緒に仕事をした時知り合ひになつた十九歳のオーストリアの娘アンナ・ラーガーとその年の秋に結婚した。彼女はクレムスの小間物屋の十四番目の子供で、その家柄は大したものではなかつた。そして寛容な心と深い思ひやりとを持つた世話女房であつた。若い夫婦はコチコチといふ程ではなかつたが信心深いカトリック教徒であつた。

一八一一年十月二十二日火曜日に彼等には一人の男の子が生れた。そしてフランツと名づけられた。フランツの誕生の夜、一つの彗星が輝いた。（譯者註、彗星はハンガリアの幸運のしるしであるといふ。）彼は弱々しい子供で、その危げな健康は両親の心配の種であつた。幼少の頃から彼には生々と鋭く物を感じる才が現れて、凡ゆる周圍の事物に非常な興味を持つやうになつた。彼は常に愉快であつた。そして凡ゆる人に馴れつくく、そして非常に従順であつた。彼は母をおだやかな心を以て愛し、母の側を離れるやうなことは殆んどなかつた。父に對しては或る畏敬の念を懷いてゐた。牧童達が現れると、此の子供はそれから何時も強い印象を受け、そして彼は大きな眼を睜つて彼等の神秘的な行動を眺め、彼等の珍らしい風習をそつと見守つてゐた。彼は音楽を燃えるやうに愛した。父が演奏してゐる時には彼は何時も傍に来て黙つて、クラフイアと並んで坐り熱心に耳を傾けてゐた。此のほんの子供の時のことに

就いては父の日記の中に次の記録が書かれてある。即ち「種痘の後に續いて子供が神経病と熱病とに交る交る闘はねばならなかつたやうな或る時期が始つたのであるが、そのために此の子供の命にかゝはるやうなことが何遍もあつた。嘗て子供が二歳か三歳かの時に私達は彼を死んでゐるのだと思ひ、子供の柩を作らせたことがあつた。此の不安な状態は彼が六歳になるまでずっと續いた。六歳の時に子供は私にリースの作つた嬰ハ短調の協奏曲を弾いて聞かせた。子供がクラフィアに倚りかゝつてゐるやうな時には、全身が耳かと思はれる程であつた。夕方になると子供は庭から歸つて来て、その主題を唱つた。私達は子供に何回も唱はせたが、子供は自分が何を唱つてゐるのかは知らなかつた。これが子供の天才の最初の現れであつた。子供は、何時も何時も私と一緒にピアノを弾いてくれとよく願つた。」彼が、何になりたいかと聞かれた時には何時も彼は音楽部屋の肖像を指して、「こんな人になりたいんです。」と答へた。それはベートーヴェンの肖像であつた。父は彼の切なる願ひを容れて、彼にクラフィアの教授を始めた。フランスは熱病につかれたやうに勉強し信じられぬ程の進歩を遂げた。音楽に對する愛は、最早彼をクラフィアから離すことは殆んど出来ない程に激しいものとなつてしまつた。彼を見た人はみんな彼の絶對的に確實な聴覺と、恐ろしいまでの記憶力に啞然として眼を瞠つた。教授が三ヶ月續いた時に又も病氣になり、中止のやむなきに至つた。此の病弱な身體では、とてもこれ以上こんな急激な進歩をさせようとしても堪へさうではなかつた。人々はもう駄目だと思つた。が終に、だんくんと力を取り返して來た。(同じやうな危機が、後年青春期に繰返された。)とはいへ彼の音楽への烈しい愛はもと少しも變りがなかつた。否更に一段と昂められてゐた。即興演奏をしたり色々な旋律を探し出したり、それからその旋律を書き記すことを始めた。たとへ彼は今やたゞ自分一人だけであることを望んだにもせよ、彼は音楽することの喜びのために同年輩の子供達と遊ぶ樂しさを捨て去りはしなかつた。「子供の稽古の有様は

必ずしも同じ工合ではなかつたけれども、何時も從順に稽古をした。」と父の日記に記してある。ライディングには學校が一つもなかつたので彼は傍ら村の司祭から讀書算を教へられた。其處では——將來に於ても常にさうであつたが——規則正しく組まれた教授課程などといふやうなものは勿論問題となる筈がなかつた。後年リストは自分にきちんとした方法による學校教育の無いことを屢々歎き悲しんだ。「私はアルファベットの文字を書かないうちから、もう譜をなぐり書きしてゐたし、そして文法の規則も分らないうちに神祕的な本や哲學的な本を讀み耽つてゐた。」と。彼の兩親は何時もドイツ語を話してゐたので、彼はハンガリア語を少しも習はなかつた。そして後になつてもハンガリア語は話さず、ほんの少ししか分らなかつた。父のリストは息子の音樂的な素質を非常に楽しみにして居り、祕かに自分の生活に於て拒まれたことを息子で實現して見ようと望んだ。父は息子を友人知己のところへ、エーデンブルグへまでも連れて行つたことがよくあつたが、到る處で子供は非常な評判となつた。人々はみんな彼をやはり音樂家にさせたらよいと勧めた。然し正式に教育するためには資力が足りなかつた。此の時偶然にも解決の道が見つかった。

此の神童と共演すれば澤山の収益を擧げ得ると思つてゐた盲目の音樂家、ブラウン男爵は、フランスの父に自分がエーデンブルグで演らうと計畫してゐる演奏會に、フランスを出して欲しいと頼んだ。アダム・リストは喜んで承諾し、此の出演で息子の才能を試してみようと思つた。斯くして少年リストは初めて人のためにする演奏會に出たのであるが、此のやうなことは、何回も後になつてあつたことである。彼は管絃樂伴奏でリースの變ホ長調協奏曲も弾いたし、又有名な旋律による「即興曲」も演奏したが兩方とも偉大な効果を收めたので、父は間もなく、もう一つ今度は自分の協奏曲をエーデンブルグで編曲をして弾かせた所が、之もやはり素晴らしい成功を收めた(一八二〇年十月)。その後間もなく父は息子にもう一度、よく認めて呉れるやうな聴衆の前で公開演奏をさせたいと思ひ、プレスブルグ

へ旅行をしたが、その途中、フランチをアイゼンシュタットのエステルハツト侯に引き合はせた。此處のアイゼンシュタットでも亦此の子供の才能は非常な賞讃を博し、そして侯はプレスブルグの演奏會のために、侯が此の町に持つてゐる宮殿を提供した。此の演奏會は一八二〇年十一月二十六日の日曜日に催され、それは侯が主催したやうなものだつたから、プレスブルグの貴族全部が集つた。みんな恍惚となつて感激した。人々はこのやうな天才を、ともすると殺して了ふものだが、さうさせないやうにとアダム・リストに忠告した。この爲になつた聴衆の激勵の言葉に勵まされ、彼は貴族の一人に金銭上の状態の苦しいことを打ち明けた。即座に五人の援助者が協同して、子供の教育のために、六年の間、毎年六百グルデンの學資を用立てることを約した。それはアマデー、アッポニエイ、ミカエル・エステルハツト、スツアバリ、ヴィツァイの伯爵達であつた。斯くしてフランチの運命が好轉されたのであつたが、而もそれが此のプレスブルグの町で決せられたといふことは、確かなことである。此の町は後になつてもリストの作品に對して非常な貢獻をすることになつた。町の「プレスブルグ紙」は一八二〇年十一月廿八日に此の演奏會に出席したエルケルの師、H・クライン教授の筆に成る批評を掲載した。フランチ・リストに關するこのそも／＼の最初の公けにされた記録は次のやうなものである。「去る廿六日、日曜の正午に、九歳の名手フランチ・リストは、當地の身分高い貴族と藝術愛好者とを交へた多くの聴衆を前にして、ミカエル・エステルハツト伯爵下の邸に於てクラフィアを演奏する名譽を擔つた。此の藝術家の非凡なる技能と、難曲を速く讀み眼は驚くべきもので、彼がその眼前に置かれたものを凡て初見で弾きのけたことは一般の賞讃を惹き起し、最も素晴らしい期待に背かなかつた。」

明るい氣持になつて親子は家へ歸つて來たが、その途中、アダムは既に、次のやうなことを堅く確信した。息子の將來の發展を害ふことなしに、息子を唯見知らぬ人達の間を送りさへすればよいのではなく、息子に對して犠牲を拂

ひ、彼のために確實な職業を與へるやうに彼を教育しようと堅く誓つたのであつた。母はいつも吾々は神の御手の中に在るのだと信じてゐたのであるが、彼女の愛する子供の切なる懇願にほだされて、永い間心配し躊躇した學句、結局はこの危なげな子供の歩みに同意させられてしまつた。アダム・リストは不満を感じつゝ續けてゐた嚴めしい行政秘書の職を辭した。彼はフランチの教師として先づアイゼンシュタット以來親しくしてゐたフムメルに頼んだ。此の人はワイマールの宮廷樂長となつてゐたのであつた。フムメルは既に教授では定評のある人であつたが、毎時間一ルイスドルの謝禮を要求した。さて然し財力はそのことを許さなかつた。そこでアダム・リストは、先づウィーンに連れて行き、そして教師の問題は其處で處理しようと思つた。心配しながら彼等は親しみのある故郷に別れを告げたが、それは唯小フランチをどこまでも愛すればこそであつた。彼が「ガラスの馬車」に乗つて輝しく歸つて來るに違ひないとまで豫言した村人達の心からなる希望に送られて。

二、父の指導下にあつた修業時代（一八二〇年—一八二七年）

充分考へた後、アダム・リストはカール・チエルニーを教師に選んだ。ペートーヴェンの弟子であり、又ペートーヴェンを世に知らしめた人として有名なチエルニーは、フムメルと並んで非常な才能のあるクラフィア演奏家とされてゐた。そして特にウィーンに於ては教師として輝かしい名譽を博してゐた。彼は非常に多忙であつたにも拘らず、此の若き天才を見た時に、進んで此の少年を教育することを承認した。而も一時間一グルデンの教授料であつた。十二時間の教授が終つて父が月謝を持参しようとした時に、チエルニーは申し出でを斷つて次のやうに云つた。「私はこの

弟子の信じられない程の進歩によつて、それに使はれた勞苦は完全に報いられたのですから。」と。チェルニーのこのやうな我慾を抜きにした態度は一年半も續いた。そしてこのことは始終リストの心に深く刻みつけられた。チェルニーは晝間は多忙であつたので、彼はいつもさう呼んでゐたのであるが、この小「ブッチー」、「ツイッシー」のために夜を使つた。リストは初めは少々不機嫌なことが屢々あつた。といふのは、子供が易々と初見で弾けると思はれたやうな曲の系統立つた教授や、きちんとした方法の練習が、小フランスの熱情的な精神とか、大膽な獨創的な想像と相容れなかつたからである。そこで此の若者に未だ缺けてゐるのは、正に技術的な形式をひどく強調する此の困難な修業であるといふことを、先見の明を以て、よく知つてゐた父は、屢々彼をなだめる役をしなければならなかつた。樂曲の中に含まれてゐるものを藝術的に弾きながら捉へて行かうとしたフランスの側から云へば、自分自身を訓練して普通のところまでもつて行かうとすることが特に問題であつたのであり、また自分の技術を系統的に完成しながら、彼が自分の内面に感じてゐるものを、何か或る外面的な困難さのために妨げられずに表現することが出来るやうな風を持つて行くことが問題なのであつた。彼の中にあるこの二つのものが、次には誰に頼らずとも、どん／＼發展することが出来、後になつて圓熟の域に達することが出来るやうな點まで進歩したのは、チェルニーの大いなる功績に歸せられるのである。此の教師チェルニーはフランスにとつて間もなく父のやうな氣持ちの持てる一人の友とまでなつたのであるが、彼はその後もまだ續いて彼の發展に對して非常な影響を與へたのである。そして例へば後年の次のやうなアダム・リストに宛てた手紙の箇所はこのことを最もよく物語つてゐる。「ただツイッシーはメトロノームを以て一生懸命に稽古しなければなりません。といふのは、彼位の年では、拍子のしつかりしてゐることは最も稀なことであり、最も驚歎に價することですから。」(一八二四年四月三日)

チェルニーの他に七十歳のアントニオ・サリエリから音樂の理論的教育を受けた。彼は熱心に總譜を讀ませた。そして樂曲の分析をさせたり、和聲の練習をさせたり、作曲の試みをさせたりし、彼に確實な音樂的基礎を與へた。

サリエリの教授がよかつたといふ一つの證據になるものに、その時代から今尙保存されてゐるリストの曲がある。之はディアベリの圓舞曲の變奏曲であり、ベートーヴェンも此の圓舞曲に三十三の變奏曲を作つてゐる。オーストリアの大抵の作曲家によつて、曾つて此の主題には變奏曲が作られたのであるが、この子供が作つたものが出版を勧められたといふことは、彼が當時既に、如何に信望を得てゐたかを物語るものである。彼がフムメルの協奏曲を素晴らしく立派に演奏したといふことは最早ウィーン中に知れ渡つてゐた。もつと詳しく云ふと、人々が樂譜屋で彼に色々な樂譜を見せるのであるが、どれを見せてもこれぞといふ、むづかしいものは何もなかつたのである。そこで此の小さな、然し力のある人、リストを入々は何とかして困らしてやらうとし、そして本當にむづかしさうに見えるフムメルのイ短調協奏曲をクラフィアで弾かせたところが、彼は初見で少しも間違はずに弾いてのけた。非公式の間ではフランスは既に屢々演奏をし、ハンガリアの貴族達の御引き立てがなければとても入ることが出来ないやうなウィーンの上流社會では、フランスは既に大きな役割を演じてゐたのである。かくして幼き頃より既に彼はサロン上流社會に出入し、上流の世界に住むことになつた。

一年半の勉學の後に、父は今こそ子供を公衆の前にも立たす好機が來たのだと思つた。一八二二年十二月一日に演奏會がウィーンの國會の廣間で催された。彼はフムメルのイ短調協奏曲と一つの自由な幻想曲とを演奏した。そしてその幻想曲に於ては、此の「小ヘルクレス」(ギリシャ語で英雄)はベートーヴェンのイ長調交響曲のアンダンテの主題を、ロッシーニの「ツェルミラ」の唱歌風の旋律に非常にうまく結びつけることが出来たが、それはたくひもない成

功を収めた。公衆の熱狂も批評家の熱狂も同じやうに荒れ狂ふ程であつた。一般音楽新聞の記者は彼の感激的な報告を「吾々の中に神あり。」といふ言葉で結んでゐる。忽ち小フランツは著名なピアニスト達の中でも優れたものとまでなつた。彼が演奏會へ出るといふことは何時でも大きな出来事を意味するやうになつた。次の月には、彼は何遍も演奏會に他の人と一緒に出るやうになつた。そして全ウィーンは彼の素晴らしい成功の話で持ち切つてゐた。然し一八二三年四月十三日の假裝舞踏會場に於ける第二回の彼の獨奏會に於ても感激が餘りにひどかつたので、暫らく演奏を中斷しなければならぬ程だつた。此處で此の小さな天才は、藝術の王國に於ける大人物によつて藝術的な清めを、音楽家としての洗禮を受けた。——ベートーヴェンが彼の額に接吻したのであつた。ベートーヴェンに非常に親しく仕へてゐたアントン・シントラーは、小フランツと彼の父を、當時非常に人づき悪くなつてゐたベートーヴェンに紹介した。そのことについてシントラー自身は次のやうに書いてゐる。「……一八二三年に私は前途有望な小フランツをその父と一緒にベートーヴェンのところに連れて來た。ベートーヴェンの態度は普通のやうに愛想のよいものではなかつた。その時この偉大なる巨匠が餘り愛想よくなかつたといふことは、特に私にとつて面白くなかつたといふわけがあるのだ。その理由は此の神童リストが私の興味を非常に惹いた人であつたからである。ベートーヴェンは自分も此の小さなフランツに關心を持つたといふ證據に於て、何となく足りない所があつたのではないかと思つた。それで彼は次に催される小リストの演奏會に出席してやつて、そして前に示した冷淡な態度を償はうと間もなく考へた。彼は彼の豊病のためよりも、當時既に、歪んだ、墮落せる方向を取つてゐた名技主義といふもの全部に對して反感を持つてゐたために、一度もこの種の演奏會に行かなかつたので、小リストの演奏會に彼が現れるといふことは、非常な評判となつたのである。」フランツは此の度はフムメルのリ短調協奏曲と、最後に自由な幻想曲を弾いた。會場は超

満員であつた。そして拍手喝采は嵐の如く起つた。此の演奏會を以てピアノ演奏家としてのリストのヨーロッパ的名聲は始まつたのである。ウィーンの凡ての新聞や、外國の新聞までも、感激的な論説を掲げた。然し當夜今一つ大きな轉換が齎された。之は金錢上の成功であつた。このことは父に、彼の「男の子」に、ウィーンで出来るよりもつとよい教育を授けてやらうといふ風に考へさせた。チェルニーから受けた彼の技術的教育は之で終ることにした。今度は或る大家の教へを受けて、作曲の試みしながら成長して行かなければならなかつた。アダム・リストの眼はパリに向けられた。ここではケルビーニが非常に尊敬された歌劇作曲家として、又世界的に有名な音楽學校の校長として生活してゐたのである。其處でこそ、フランツは彼の最後の勉強を完成すべきであつた。といふのは、父はこれまで獲得した色々の成果を唯自分の創作に關與すべき「本當の音楽家」に至る準備に過ぎないと思つた。此の計畫はその秋に實行することになつた。先づ以て幾つかの演奏會が、此の旅行費に當てられることになつた。一八二三年五月一日に、ブダペストのツー・デン・ジーベン・クアフェルステン會場で、第一回の演奏會が催されたが、此の時フランツはモシェレスの變奏曲、リースの協奏曲及び一つの「自由なる幻想曲」を演奏した。當夜の廣告は次のやうなものであつた。「身分高き貴族様方よ！ 賞讃すべき王室附の軍人諸君よ！ 尊敬すべき大衆の諸君よ！ 私はハンガリア人である。そして私の教育と教養との最初の實りを、最も深い感謝と愛着の供物として、私がフランスやイギリスに旅立つ前に、愛する祖國に對して畏敬の念を以て捧げるといふことよりも、より大きな幸福を私は知らない。私にはまだ成熟といふ點で缺けてゐるものがあるが、それは堅忍不拔な努力によつてなほ一層の完全さにまで進められるだらう。そしてその努力は恐らく他日、私を最も幸福な状態に置くであらう。又それは愛する祖國を飾る花の小枝ともなるものであらう。」

二、三日後にプレスブルグに於ける演奏會が催された。此の時代にあつた一寸した面白いエピソードが今も吾々に傳へられてゐる。即ちフランツはプレスブルグでツィルケルといふ彼の幼年時代の友達を訪れた。此の人は繪かきで銅版腐蝕の商賣をしてゐたフェルディナンド・フォン・リュートゲンドルフ・ラインブルグの弟子であつた。ツィルケルに連れられて、フランツも、その藝術家の家にやつて來た。その藝術家の娘はずつと後になつて白髪の老人になつた時までも、此の元氣な潑刺とした子供を覺えたのであるが、そのわけは、彼は到る所でチャホヤされたにも拘らず此の時彼の本來の自然らしさは少しも失はれてゐなかつたからである。彼は愉快に庭で他の子供達と相撲をとつたりしてゐたので、食事の時には随分よく食べたものである。料理人は彼の需めに應じて、酢漬キャベツとトウガラシを入れて料理した豚肉とを料理した。彼は、それが非常に好きであつた。そしてみんなが食後喫煙室に行つた時に、リュートゲンドルフは突然妻に、臺所の方を見て「ごらん、なさいと低い聲で促された。此の若い藝術家はそこに坐り込み、野菜皿を膝の上のせ、ペーターヴェンのソナタをあんなんにも大家らしく弾いてのけたその指で、突ツつき廻し、残り物を如何にも満足さうに食べてゐた。リュートゲンドルフが此のいたづらつ子の姿を、うまくスケッチしたものが今でも残つてゐる。

一八二三年九月二十日にアダム・リストは妻と子供を連れて、途中所々方々へ立ち寄りながらパリへの旅を實行するためウィーンを離れた。先づ最初に立ち寄つた所はミュンヒェンであつた。演奏會をすればする程成功したので、此處の滞在期間は十月の終りまで延ばされた。社交界に於ても此の神童は殆んど毎晩のやうにワイ／＼騒がれた。そして國王からさへも一度ならず好意あるもてなしを受けた。アウグスブルグ、ストットガルト及びストラスブルグを通つてパリへの旅を續けるために、新しく出來た友達と別れることは非常に悲しかつたが、十二月十一日にとり

とうパリへ向つて旅立つた。どの村々でも演奏會が催され、常に同じやうな熱狂を喚び起した。

批評は到る處で非常に熱狂的であり、最後はもう「モーツァルトの再現だ」といふ文章を掲げるまでになつた。八二三年十一月五日のスワビアのメルクル紙が次のやうに言明したことは、その後リストが色々の攻撃を受けたことと思ひ合はせて考へて見れば、特に注目すべきことである。「彼は自由な幻想曲の中にそれを發展させることが出来る程對位法のことやフーゲの深い知識を持つてゐる。」

パリで最初に足に向けた所は勿論、フランツが後でその一員とならうとした音樂學校であつた。とはいへ、此處で彼を待つてゐたものは幻滅の悲哀であつた。リストは後になつて此の光景を次のやうに記述してゐる。

「丁度到着した次の日に、急いで私達はケルビーニの所に行つた。メッテルニヒ侯爵の非常に親切な紹介狀が、私達をケルビーニに引き合はすことになつてゐた。丁度十時であつた——そしてケルビーニはもう音樂學校に來てゐた。私達は急いで彼の後を追つた。私がやつと玄關、もつと正しくいへば、物凄く立派な門道リ・デュ・フォーブル・ポアソニエールを通つた時に、ひどく怖ろしい感じが私に襲ひかかつて來た。「此處はどうも不吉な所だ。」と思つた。此處では、此の榮譽ある聖堂の中に、最高裁判所が設けられてゐて、永久に罪の宣告を下したり、罪を赦したりしてゐるのだ。——そしてちよつとした誤りがあつても、多くの人々の前に私は屈服しなければならぬであらう。その人達はみんな名士達だとばかり思つてゐたのだが、驚いたことには唯のつまらない人間のやうに、どうにでもなるやうな人々であることが分つたのだ。とう／＼十五分間非常に切ない氣持でそこに待たされた後、やつと小使が校長の部屋を叩いて、入れと合圖をして呉れた。生きてゐると云ふよりは死んでゐると云つた方がよい位だつたが、此の瞬間に壓倒的な力に動かされて、彼の手に接吻しようと、私はツカ／＼とケルビーニの所に進み寄つた。然しこの

刹那、そして私の生涯に於て初めて、かうするのは多分フランスでは習慣ではないのだらうと思ひついた。そして私の眼は涙で一杯になつた。困惑し、赤面しながら、ナポレオンをさへも凌駕する程の力を持つてゐる此の大作曲家に對して再び眼を開くことも出來ずに、彼の口から出る一語も無駄にすまいと、彼の息づかひの一つをも聞き逃すまいと、私は全身の努力を集中した。幸にも私の此の苦しい氣持は長くは續かなくてよかつた。人々は此の音樂學校に私が入ることは色々のむづかしい問題がありさうだといふことは既に分つてゐたのだが、然し、外國人ならば誰でもどうしても一緒に此處で勉強は出來ないといふ此の學校の規則までは分つてゐなかつた。ケルビーニが先づこの事を知らせてくれた。何といふ災難だらう！ 私は全身ふるくと顫へた。それにも拘らず、私はそのままゝゐた。父は歎願した。父の聲は私を元氣づけた。そして私もやはり何か吃りながら云はうとした。然しながら規則は嚴としてどうにもならなかつた。私はがっかりした。何もかも駄目なやうな氣がした。自尊心もなくなつたし、もうどうにもならないと思つた。私の歎きと悲しみはそれで終らうとはしなかつた。心の傷手は段々深くなり、そして尙長い間痛み續けた。」

粉々に打碎かれて二人は此の大先生の應接間を去つた。とはいへ、そのやうな事になつたのは幸福なことでもあつた。といふのはリストのやうな天才にとつては、このやうな個性に合はない型通りの教育の仕方は餘り本當のものではないだらうと思はれるからである。今や彼は人の前で弾くことによつて段々と教へられて行く他に道はなかつたのである。それに父は作曲家のフェルディナンド・パエールをフランスの作曲の先生に頼んだ。ハンガリアやウィーンの貴族たちから貰つて來た澤山の紹介狀によつて、凡ゆる社交界に、イキナリ入ることが出來た。此處でフランスはその演奏によつて、最も人氣のある藝術家としての地位を占めるやうになつた。彼が出演しなかつた夜會は殆んど一

つもなかつた。彼は熱狂してゐる凡ゆる人の心を、自分のものとした。オルレアン侯までも彼を驚異の眼で以て見た人々の中の一人となつた。殆んど二千フランの純益を収めた非公開の演奏會に續いて、一八二四年三月七日に、王様の非常な援助によつて無料で使ふことが出來た王室歌劇場で、公開大演奏會が催された。アダム・リストはその演奏會について次のやうに、アイゼンシュタットの友人に報告してゐる。「此の演奏會は僕の子供の公けの勝利であつた。彼が出て來るや否や、拍手喝采は鳴り續き、一つ一つのパッセージの後には激しい驚きの中に感激が語り合はされ、それに曲が終つた時には二回、三回もアンコールされ、拍手喝采された。……これより前既に、新聞は僕の子供の才能を賞揚する記事を掲げてゐたが、然し演奏會の後のそれは特別なものであつた。三月九日にはわれ先にと争つた四人の記者が此の才能について書かうとしたことを思つても見給へ。そしてそれは今なほ終つてゐないのだ。人々は一般に彼のことを神童、子供の姿をして再現したモーツァルトだと呼んでゐる。友よ！ 僕が一體全體何を云はうとしてゐるか分かるかい！ 僕は泣いてゐるのだ。——そして僕は偽りなく君に語るのだが、子供のピアノで弾く幻想曲は全く特別なのだ。パリーの紳士、淑女を斯くまで仰天させ驚歎させたのは正にこのことなのだ。更にこんなことも思つて見給へ。僕達は殆んど毎日社交界へ行き、何時もただ、幻想曲を弾き、即興演奏をし、そして與へられた主題に基いて演奏するのだ。それなのにみんなは、異口同音に彼が何時も新しいものを弾き出してゐるやうに聞えるといふのだ。又子供は此處で既に數々のピアノや歌の曲を書いた。そして人々は絶えず、それらを聞きたいと思つて居り僕に充分な代價を拂はうとしてゐる。然し僕は、それを以てロンドンで一層よい仕事をしようと思つてゐる。」

一八二四年三月七日の演奏會に關する新聞記事は作り話のやうに聞える。ドラボー、ブラン紙の報ずる所によればフランスは伴奏する管絃樂團員を彼の演奏によつて魅了してしまつたので、彼等はリトルネルの所で、どこに入るの

か忘れてしまつた程である。公衆や批評家を喝采させ感激させたこのやうな光景は、以後の凡ての演奏會で繰り返された。人々は何時も彼をさう呼んでゐたのであるが、「ル・ブティ・リッツ」は一般の話題の中心となりパリーの評判となつた。人々は彼を歌に唄ひ、彼の肖像を凡ゆるショーウィンドーに飾り立てた。そして、社交界には彼と彼の藝術に關する實に不思議な澤山の逸話が廣まつた。此の不斷に昂まつて行く外面的成果と共に、内面的發展も歩を揃へて行かねばならないと、父は一生懸命心配してゐた。自分の教へ子の試作を非常に前途有望だと思つてゐたリストの對位法の先生バエールは、やさしい小さい臺詞に作曲することを奨めた。彼は此の計畫に直ちに火のやうに熱中した。そして、彼が選擇したのは、非常に多作な詩人テオーロン（彼は全部で三百以上の作品を書いた）の一幕物で、之はテオーロンが、ドゥ・ランケと共作したものであり、「ドン・サンショ或ひは愛の城」といふ題であつた。バエールの指導の下に既に一八二四年早々作曲が始められた。

斯うする中に、フランツの名聲に對して、嫉妬し、不快を感じる無智な大勢の人達が、又どこまでもくつついて來た。素晴らしい勢で上昇して來た星辰によつて、殆んど完全に陰の方に押しやられた彼の反對者達は、凡ゆる種類の中傷によつて彼に嫌疑をかけ、危害を加へようとした。成程凡てのものが彼に響いては來たが、然し猜疑は大したことでなかつた。といふのは輝かしい成功さへ收めれば、そんなものは結局解決されるものだと言ふアダム・リストは思つたのである。エラール家の支配人をしてゐた彼の友達はロンドンにピアノ工場の大きな支店を持つてゐた。そして丁度イギリスへの旅を始めるところだつた。彼は一緒に來るやうにリストに勧めた。そしてパリーの音楽シーズンももう終つてゐたので、ロンドンで二三の演奏會を開くやうにフランツに勧めた。遠くイギリスへ旅する途中、フランスの地方を通つて巡業しながら行くことになつた。アダム・リストは妻に、ずつと續く遍歴の辛苦を嘗めさせたくない

と思ひ、そして更にサロンの中に甘やかされて育ち、贅澤に慣れたフランツには一度は完全に母の膝下から離れるのが望ましいことだと思はれたので、妻にシュタイエルマルクの姉のところへ歸つて行くやうにさせた。非常に愛されてゐた母から別れることはフランツにとつては本當に辛かつた。そこで後になつて、色々と氣を配つてくれる母の心がどうしても必要になつた場合には、何時も母のことを想ひ出したのであるが、その度に此の辛い別れのことかいつも頭に浮んで來たのであつた。

一八二四年五月の終りに彼等はロンドンに到着した。此處ではシーズンはもう終りかけて居り、且つ反對者達の嫉妬、猜疑のために、色々と面倒なことがあつたので、唯一回の公開演奏會（六月二十一日）しか行ふことが出来なかつた。成果はパリーに於けるものに劣らなかつた。凡ゆる社交界にフランツは現れなければならなかつた。デョージ四世陛下さへウィンゾルの宮殿で彼の音楽を聞くことを希望された。陛下は此の子供の演奏に恍惚とさせられ、次のやうなことを繰返して云はれた。「こんな音楽は自分の生涯で嘗て聞いたことはなかつた。此の子供はモシエレスやクラマーやカルクブレンナーやその他の大ピアニストよりも一段と優つてゐる。演奏振りや、態度ばかりでなく、樂想や展開の豊富な點で。」

アダム・リストは朗かな氣持でチェルニーに次のやうなことを書き送つてゐる。「フランツは熱心に自由にすらすらと演奏してゐます。彼の今度の演奏は貴方の賛成されるものだと思ひます。彼は純粹に、そして何かを表はして演奏します。彼の技術は一段と高くなつてゐます。私は今でも尙常に、音階や練習曲はメトロノームでやらせます。そして貴方の原則から離れてはゐません。それが最上の方法であるといふことを結果が示してくれそうですから。幻想曲を弾く時には彼は最早、高度の、彼の年齢としては驚歎に價する程度にまで行つてゐます。作曲の方では彼は既に二つ

のロンド・デイ・ブラブラを完成しました。そして此處の人々はそれを買はうとしてゐますが、私はまだ引き渡しません。一つのロンド、一つの幻想曲、二三の主題による變奏曲、一つの娛樂曲、もつと詳しく云へば、彼が陛下のところで大喝采を博して演奏したロッシニとスポンティニの種々の主題による即興的混成曲、然し彼の主要な作曲は『ドン・サンシヨ 或は愛の城』といふフランス歌劇です。この原作は特に彼のために作られたのです。朗吟の他は凡て彼が此處で作つたものです。そして二三の社交界で少しばかり彼が唄つたところが、陛下によつても認められ、上演するやうに勧められ、そして大喝采を博したのです。私は此の曲が全部發表された時にはどんなことが起るだらうかと非常に期待してゐます。歌劇はパリイでは大歌劇場で上演されるといふことは間違ひないのですから。」

二回の演奏會が催されたマンチエスターへの小旅行を終へて、親子は八月の初めにパリイへ歸つて來た。フランツはあちこちの社交界で演奏したが、今はシーズンを外れた静かな時であつた。そして彼は此の時に父の立てた仕事の計畫に従つて勉強に専心した。主な仕事はドン・サンシヨを仕上げることであつた。そして之は八月の終りには既に、パエールの助けを借りて、管絃樂に編成し始めるまでに捗つてゐた。パエールは彼の弟子の仕事に満足し、歌劇の初演を、どうしてもアカデミー・ロワイヤールでやらうとした。とは云へそこには尙嫉妬心に燃える反對者達による多くの面倒なことが克服されねばならなかつた。仕事は多中熱心に續けられ、ドン・サンシヨの總譜は完成された。こゝで一八二五年三月に、かねがね計畫されてゐたフランスの地方への演奏旅行が始まつた。旅はボルドー、トゥールーズ、リヨン、マルセイユ其の他の町々にまで及び、どこでも大成功であつた。そして最後にロンドンに着いたが、之は第二回目の滞在であつた。フランツは今度は此處で數回の演奏會を、マンチエスターでは二回の演奏會を催し、まともや皇帝陛下に引見された。此の數ヶ月のかなりひどい疲れを癒すために、アダム・リストは彼の「息子」と共に

二週間ポローニユ・シュール・メールへ出掛けた。一つの演奏會の収入は滞在費を拂ふに充分であつた。彼等は七月の中程に此處から眞直ぐにパリイへ歸つて來た。そして今やドン・サンシヨの運命は此處で決せられねばならなかつた。アダム・リストのチェルニーに宛てた或る手紙は此の興奮した日のことを次のやうに記述してゐる。「私達はパリイへ歸つて來ました。實は私達に對する誤解を解き、段々親しい友人を訪れる爲に、十四日間ひそかに留つてゐたかつたのです。だが私達の計畫は早や五日目に滅茶々にされました。私達は一週間以内に審査官の前でフランチャイの歌劇(ドン・サンシヨ)を聞かせなければならぬといふ藝術大臣の手紙を受け取つたのですから。ところで私達か如何に狼狽したかを思つて見て下さい。寫譜はひとつもしてなく、一人の歌手も準備してなかつたのです。私は二週間の延期を要求したが、然しそれは許されなかつたのです。だが二、三日は猶豫してくれました。審査官(ケルビーニ、ベルトン、ポアエルデュー、ルシュール、カテルから成つてゐる)は會議を開き、歌劇は聞かれました。そして非常な喝采を博しました。——愛する友よ！今となつて見れば、貴方が彼の父でなかつたことが惜しいことです。此の時になつて初めて親になつた幸福感を語りながら、苦しみはどんなことでも忘れてしまふやうな所にゐるのです。かうしてその歌劇は認められ、そして劇場管理人の熱心な勧めによつて、ちやんと收支計算され、遅くとも十月一日に上演されることになりました。人々の好奇心は非常なものであつて嫉妬心はものすごく、何かまづいことがありはせぬかと期待されてもゐたのです。然し之までにさういふ嫉妬心は成功したためしはなかつたので、これからかういふやうなことをすれば、却つてひどい目に遇はされなければならぬと私は思つたのです。」

フランチャイは二種の協奏曲を書きました(未發表のもの)。彼は非常に大きくなり、殆んど私位です。誰でもみんな驚いてゐます。彼は、作曲より他の情熱を一つも知りません。そして之だけが彼に喜びと満足とを與へるのです。連

彈のソナタ、一つの三重奏曲、一つの五重奏曲、之等は貴方に充分満足を與へるでせう。彼の協奏曲はとてもガツチリしてゐて、演奏者にとつては途方もなくむづかしいものです。私はいつもフムメル（F. Hummel）の協奏曲はむづかしいものだと思つてゐました。然し之と比べてみると非常にやさしいものです。貴方は彼の左手に喜びを感じるでせう。彼は尙毎日二時間練習をやりまゝ。そして一時間讀書をします。尙私達が家に居る時には、他の凡ての時間は作曲のために使はれます。」

一八二五年十月十七日月曜日にとり／＼ドン・サンショの初演が、王立音楽院で行はれた。そして色々の馬鹿げた噂や評判によつて、人々の期待は最高潮に達してゐたので、微かな失望を惹き起した。人々を啞然たらしめる、彼の年齢としては遙かに優れたピアノ的演奏によつて眼の曇つてゐた人々は、大家の作品を期待してゐたのであるが、二三の箇所を除いてあとはみな月並の手法であり、子供にしてはよく出来てゐたけれども、非常に他の作曲家の模倣を示し、獨創性を失つてゐた。それは兎も角としてこの作者の今までの評判は非常なものであつたから、受けは大變なもので、彼は舞臺に呼び出されるといふ有様であつた。此の作品はその後尙三回も上演された。十日と十九日と二十六日の三日である。然しそれからはプログラムに上るやうなことはなくなつてしまつた。批評は非常にまぢまちであつたが、悪評が大部分であつた。次に掲げるやうな「ガゼット・ドゥ・フランス」の記事は本當に事實を云つたものであらう。「非難の餘地なき子供の作品を期待してゐた人、此の人こそ満足させられなかつたに違ひない。何故ならば、若きリストの總譜の中には非常にまづい所が多かつたからである。即ちそれは、此の嘴の黄色い作者が自分の尙知らない苦惱、嫉妬、憎しみ、憂愁の情熱とか宿命的な情熱とかを強ひて表現しようとした所である。物の分つた人達は之に反して（敢て云へば、出来るだけのことしか望まない人達）、吾々の小さい偉大なモーツァルトの優

れた素質に満足させられた。彼は非常にうまく、器用に柔かな優しい感情を表はすことを知つてゐた。吾々は之以上何を要求することが出来るか。」再演の後次のやうな批評があつた。「ドン・サンショの第二回目の上演は比較的好意を以て迎へられた。實に幼きリストは非凡なる子供の一人である。とはいへ彼は正に子供でしかなかつた。吾々が成熟した出来上つた才能の證據を要求するといふことは誤つてゐるのである。」

一八七三年十月三十一日に大歌劇場が全焼した時、文獻の大部分は焰の奪ふところとなつた。そして人々はドン・サンショも失はれたものと思つた。一九〇四年になつて初めてジャン・シャンタヴォアンヌ（J. Santavirta）（パリ）は「ムジーク」誌上で此の歌劇が難を免れたことについて報告を行ひ、且つ澤山の樂譜の實例を示して詳細な樂曲分析を行つてゐる。發見された總譜はリスト自身の書いたものでなく、寫されたものである。因みに小説家クラリ・ドゥ・フロリアン（C. Floriani）（一七五五—九四）の或る物語から種を借りた二人の臺本作家は、臺詞に次のやうな序を書いてゐる。「吾々がこの抒情的な作品を書いた時に、吾々は、總譜を作つて貰ふべき此の神童に對して出来るだけ色々、種々の才能を表はし得るやうに場面を作り、又種々の側面から書いてもらふやうにとの唯一の目的に従つたのである。そこで吾々は例へば勃發的な嫉妬の後には、同じ程度の静けさを置いたり、そして喜びの唄、愛の讚歌の後には、最も深刻な苦惱の表現を置くといふやうにした。此の拙ない歌劇の二三の場面の間には殆んど少しの連絡も見出されないかも知れないが、それは文學愛好者や社交界の人々の方に責任があるのだと吾々は思つてゐる。此處では音樂に有利ならしめるために詩は自ら權利を完全に斷念したのである。」配役と歌手の名前は次の通りである。E・プレボスト（E. Prebost）（魔術師アリドール）、グラサリ嬢（G. Sallier）（エルツィーレ）、M・アドルフ・ヌーリ（M. Adolphe Noury）（ドン・サンショ）、フレモン嬢（F. Monnier）（エルツィーレの婚約者ツェリス）、ジョウレック嬢（J. Leck）（小姓）、騎士、女官達、農夫、農家の少女、桶持等々。

比較的長い序曲の後で幕が開き、そして舞臺は「眼の覺めるやうな景色を展開する。その中央に宮殿があり、それは濠と城壁で取り圍れ、吊り橋を通つて行く他に一つも入口がない。」歌劇は農夫の合唱で始まり、田舎の人々が宮殿の前で踊つてゐる。吊り橋は下ろされ、二人づつの騎士と貴婦人の非常に澤山の組が宮殿に引き續いて入つて行くのが見える。列の最後にサンショが現れる。小姓が彼の入るのを拒む。といふのはこちらから唯愛してゐるばかりではいけないので、自分も愛されてゐなければ、此の中には入れないことになつてゐるからである。ドン・サンショは實は王女エルツィーレを愛してゐるのであるが、彼女には少しも聞き入れられなかつた。サンショは唯獨り舞臺に残る。(愛の詠唱)。そこへ宮殿の主、魔術師アリドールが出て来て、エルツィーレはナバラの王子と結婚しようとしてゐることを彼に告げる。サンショは燃えるやうな嫉妬を表はす。(アリドールとの二重唱)。アリドールは彼を救はうと思ふ。彼は、愛の宮殿の近くで、ナバラ行きの馬車に乗るエルツィーレを迷路に引き込み、暴風雨を起させようと思ふ。アリドールが去つた後で、嵐が起る。エルツィーレと従者達は宮殿に避難したいのだが、彼女がサンショを愛することを拒んでゐる間は、入ることは許されないのである。が、彼女は忠實なるツェリスの切なる願ひにも拘らず、益々烈しく荒れ狂ふ暴風雨でどうしようもなくなつても、尙拒絶し續ける。「段々と夕闇も濃くなつてくる。楯持ち達は、サンショの旗を芝生の腰掛の側に立てそれで雨覆ひを作る。夜は更けて行き、愛の炬火は宮殿の圓屋根の上に燃え續ける。女王は芝生の腰掛に腰を下ろす。サンショは低い聲で長い愛の詠唱を歌ふ。地上から上つた輕やかな霧は愛の童神を齎す。そして童神達は王女を空色や金色のヴェールで覆うてしまふ。その時宮殿の城壁は透き徹つて見えるやうになる。明るい光は中を照らす。そして幸福さうな二人連れは、愛の歡喜に陶醉し切つてゐるのが見える。背景にふさはしい豪華な宮殿の中のバレエ。舞臺の前景には、その間に、森の精達が一杯出て来て如何にも森の精ら

しい踊りを踊る。小姓が吊り橋の上に出て来て、愛する人々を、宮殿の中に入つてくるやうにと招く。トロムベットは敵が入つて来たことを告げる。恐ろしいルーマルド(アリドール)が王女を奪ふために入つて来る。サンショは彼女を衛らうとし、彼に二回決闘を求め、エルツィーレは、彼が自分のために危険極まる決闘をしようとなせつてゐるので、自分にとつてどうでもよいものではないといふことを突然に感ずる。そして彼女はサンショのために愛の神に祈る。然し無駄であつた。サンショはひどく傷つけられ(葬送行進曲が奏でられる)、連れ歸られる。彼を助けるために今はエルツィーレはナバラの榮譽を斷念し、彼に永遠の愛を誓ふ。魔術師アリドールは彼がめぐらした奸計がもう駄目になればいいと願ふ。二人は二重唱で彼等の愛の幸福を歌ひ續ける。その間に舞臺は變り、今度は愛の宮殿の中を表はす。そして、その中ではサンショとエルツィーレのために盛大な祝宴が行はれる。祝ひの合唱を以て此の歌劇は終る。

吾々は此の内容の梗概から見て、この臺詞が十二歳の子供の感情界では實現不可能なる要求をなしてゐるのがわかる。彼が此處に作曲しなければならなかつた感覺を、彼獨自の直感からは未だ理解出来なかつたので、彼は或る手本に依らねばならなかつたのである。個性的な調子は、たとへば葬送行進曲の如く、ほんの僅かしか表はされ得なかつた。

ドン・サンショ上演後もアダム・リストは尙その年の終りまでパリに留つた。一八二六年の初めに彼はそれからフランスと一緒に、フランスの町々を廻つて第二回目の巡業を始めた。そしてマルセイユまで行つて大分長く留り、そこでフランスは彼の「十二の練習曲」を出版した。パリへ歸つてから彼はアントン・ライヒアの弟子になつたが、ライヒアは彼に對位法の秘訣を授けた。半年ばかりの熱心な勉強で彼はこの對位法の領域も征服してしまつた。一八

二六年から二七年へかけての冬は次いで南フランスとスミスへの演奏旅行で忙しかつた。それに續いて一八二七年五月にはロンドンで第三回目の滞在をするやうになつた。此の旅は到る處で非常な成果を收め、彼に幾多の名譽を齎した。然し内面的にはフランツには大變化が起つた。彼の第二回英國旅行（一八二四年）以來既に、彼にとつては演奏會を開くことは前のやうな喜びとはならなかつた。聴衆に對する嫌惡の情が彼自身にとつて未だ意識的に起つて來たとは云へないが、演奏會がない時は非常に快活な子供のやうに見えた。彼は本能的に、自分が實際、娛樂や見世物となつて居り、そのために自分の頭を擡げて來る藝術心に逆つてゐるといふことを感じた。彼は眞面目になり、不機嫌になつた。そして愛を以つて指導してくれる人が欲しくてたまらなかつた。今となつて、自分を心配してくれる母の愛情がないことを非常に感ずるやうになつた。父は此の變化に異様の感を抱いたが、然しそれについて正しい理解を持つてゐなかつた。フランツは信心深い子供として教育され、殆んど毎日のやうに父とミサに通つてゐた。彼は教會で、自分の憧れに對する慰めを探し求めた。彼は正に大抵の神童が此の時期に破壊してしまふやうな、發展の時代にあり、而も危険な段階にあつた。それは子供が青年になる時に體驗する心の花であり、而も苦しみ多き悲しみでもある。心配のない明るいブロンドの頭は眞面目になり深刻になり、氣分やむら氣、無氣力や幻を持つやうになる。彼は最早演奏會の話聞きたくはなかつた。そして彼は浮世を離れて僧侶になる話をした。彼は宗教書に熱中し、聖書も讀んだし、それから又「沙漠の父達」やトーマス・ア・ケムピスの「キリストの使徒達」及び彼の守護の聖人、聖フランシスクス・フォン・パウラの物語のやうな澤山の苦行の本を讀んだ。自分を僧侶にしてくれと願ひ出た。父は非常に驚いて、彼の切なる願ひに耳を藉さなかつた。「お前は藝術のものであつて教會のものではない。」父は子供が宗教的な讀物に耽るのを誤つてゐると思つたので、子供の宗教的迷妄をたきつけるやうなものを、みんな、遠慮會釋もなく

子供から取り上げてしまつた。フランツは父の命令に従はねばならなかつたが、祈りと教會に對する彼の熱烈な憧れは、それ位で挫けるやうなことはなかつた。彼は今でも相變らずコソソリと夜中に本を讀み、度々朝まで續けることがあつた。かうしてひどい勞力の要る演奏旅行で、さうでなくても既に衰弱してゐた健康は益々害はれて行つた。アダム・リストも、健康はさまで勝れてはゐなかつたので、ロンドンの醫者は二人に海水浴をして靜かにしてゐるやうにと命じた。そこで親子は一八二七年七月に再びブローニュ・シュール・メールへ赴いた。氣持のよい海邊の空氣を吸つて、演奏會の息苦しい束縛から放たれて、フランツは又急に元氣になつた。そして體力の増進するにつれて彼の氣分も一層生々と快活になつて來た。其の時彼は最もひどい打撃に遭つた。といふのは彼の父は胃熱で倒れ、三日寢ただけであの世に行つてしまつたのである。父は自分の終りの近づいたことを感じた時、フランツを呼んで、彼に忠告の言葉と將來の戒めを與へた。

「ブローニュの父の死の床で、お前は善良な心と正しい理性を持つてゐるであらうが、女がお前の生涯を滅茶々にするやうなことはありはせぬか、そして、お前が果してそれに打ち克つことが出来るかどうか心配であると、父は私に云つた。此の豫測は變なものであつた。といふのは私は十六歳であり、未だ女といふものがどんなものか少しも知つてゐなかつたからである。そして心から私の懺悔を聞いてくれる神父に、天使の十誡中、第六條と第九條を説明してくれるやうにと頼んだ。（譯註、第六、汝姦淫する勿れ。第九、汝人の妻を戀ふる勿れ）。私がそれらをひよつとすると知らず／＼の中に犯しはせぬかと懸念したからである。」アダム・リストは一八二七年八月二十八日に死んだ。そしてブローニュに葬られた。父と子の間の關係は、明かに、最後の年には餘り心からのものではなかつたが、アダムは常に信頼すべき指導者であり、彼に委ねられた貴重な寶を充分に發展させ、そしてもう獨力で展開することが出来る

まで、それを安全な地盤に置いてやつたのであつた。――

リストの幼年時代の作曲の中では非常に多くのものが失はれてゐる。といふのはそれらは當時印刷もされなかつたし、草稿は度々の遍歴の時失はれてしまつたからである。傳へるところでは、此の時代の作品には他の多くの作曲以外に主なるものとして「タントゥム・エルゴ」があり、之は未だウィーンにゐた頃、サリエリの下で勉強してゐた時に作られたものである。そして後になつてリストはその作品のことを屢々手紙に書いてゐる。それとロンドンの演奏會のプログラムに載つた「イ短調ピアノ協奏曲」（註、此のイ短調協奏曲がリスト博物館にあるベルリオツの「レリオ」の動機に基づくピアノと管絃樂のための交響的幻想曲であるといふことは尤もらしい。）モシエレスは之について「混沌とした美しさを持つてゐる。」と書いてゐる。寫本ではドン・サンシヨの總譜があり、當時印刷されたものでは、ロッシーニとスポンテイーニの主題による即興曲、アレグロ・ディ・ブラブラ、ト短調スケルツォと、後になつてリストが十二の大協奏練習曲に書き直した *Etudes en alouze exercises* があつた。

三、心の葛藤と究極の勝利（一八二七年——一八三四年）

十六歳になるかならぬかの子供は今や世界中で誰一人助けられる人もなく一人ぼつちになつた。彼はこれまで實際の生活上の色々の仕事を處理して行く方法を殆んど何時も指示され、注意されて來たので、父の突然の死はそれだけにひどい打撃であつた。父は常に子供についての凡てのことに氣を配り、子供の教育をしつかりした目的を意識した意志を以て行ひ、確實な計畫に従つて子供の勉強を指導したのであつた。卒直に云へば子供が一人では全然立つて

行けないやうに成長せしめたのである。彼の次の時期の多くの行爲や、立居振舞の不安定であつたことや、生活方法の常軌を逸してゐたことや、彼の計畫が屢々全く目的を持つてゐなかつたことや、度々の事故にあつて標準や目的をやり過ぎるといふやうなことは此のことから理解出来る。彼は大抵其時々のほんの思ひつきに従つて行つた。彼は世事に疎いにも拘らず非常に多くの危険を免れることが出来、後に残るやうな損害を受けず、そして何時も自分で又正しい道を取つて行つたのは、主として次の三つの事の結果である。即ち彼の生れながらの尊敬に價する性格と高い知性と深い宗教心とである。第一のものは彼の父の死後直ちに現れて來た。といふのは、彼が重苦しい悩みから或る程度立ち直つた時、母をパリへ來るやうに招いた。そして其處で母と一緒に住み、生計の仕方を習ひながら、彼女の面倒を見ようと思つた。父が死んだための澤山の費用を支拂ふために、彼はウィーンで儉約して母のために貯へてあつた合計數千ターレルの金に決して手をつけなかつた。そして自分の高價なエタールのグランドピアノを買ふのに大きな穴を明けたのも母のさゝやかな財産を減らしてはならないと思つたからである。彼は一八二七年の九月に母とパリーのリュ・モントロンのさゝやかな住ひに移つた。そして彼は今までの名聲によつて最上流の家庭から多くの弟子を一度に得ることが出来た。間もなく彼は「早朝九時半から夜十時まで息つく暇もない」程忙しくなつた。彼は事務的な仕事に無經驗だつたので、演奏會を開くことは安全な収入の道ではなかつた。そして名技を追ふやうなことは彼は大嫌ひであつた。

次の月は彼の生涯で最も幸福な時であつた。といふのは、咲き始めた花の眞に淨らかな香りと共に、初めて彼の心の中に愛慾が芽生えたのであつた。明るい美しさを持ち、生れつき聰明で、奥深い、優雅な十七になる少女が彼の弟子になつた。彼女はカロリーヌといひ、内務大臣サン・クリ伯爵の娘であつた。教へる時には大抵娘の所に一緒に附

いてゐたカロリーヌの母は、間もなく少年らしい感激を以て此の女弟子に自分の藝術の高さを見せようと努めてゐる。若い藝術家のひたむきな態度を快いものと思ひ出した。熱心な二人の若者は段々近づいて來た。殊に彼等は互に多くの共通の興味や趣味を持つてゐた。伯爵夫人は満足さうに二人を見てゐたが、彼等自身に愛戀の情が芽生えてゐるといふことは分つてゐなかつた。そして、既に永いこと胸を病んでゐた伯爵夫人は、また新しい發作で病の床に倒れた時、夫に向つて、若し貴方が二人を本當に愛してゐるのなら、彼等の結ばれることを邪魔しないやうにしてくださいと、心から頼んだ。それから間もなく彼女は死んでしまつた。そしてそれと共に、あんなにも永い間此の愛の情景をやさしく守り續けた愛の天使は去つてしまつた。伯爵夫人の死による哀愁と苦惱とのために、二人はなほ一層近しくなつた。そして今はもう彼女にとつては毎日の交際はどうしても無くてはならぬものとなつてしまつた。音楽は悲歎にくれるカロリーヌを慰めてくれるものであつた。更に彼等の共通の興味は他の分野にまで擴がつて行つた。彼女は文學の美しさにひたり、そこではカロリーヌは彼の先生となつた。授業の時間が度々長くなり、おまけに夜遅くまで延びることも幾度となくあつたといふことは少しも不思議ではない。彼女は短い時間に、本當に清らかな幸福を味つた。が偶然の出來事が、残酷な手を以て此の清淨な心の結びを滅茶々々にしてしまつた。リストは夜遅くまでカロリーヌの所に居るさうだといふことが、或る日伯爵の耳に入つた。そして伯爵は、妻の言葉を之までは熱に浮かされた迷ひ言だと思ひ、大して氣に止めてゐなかつたのであるが、實際にさうなることを恐れてゐたのである。然し伯爵はいかめしい貴族として、娘を音楽家風情の妻とする氣は少しもなかつたので、リストを呼び寄せ、非常に上品にはあつたが、少しの假借もない冷たさを以て、彼に音楽の勉強を止めるのが一番いゝことでせう、といふのは身分の違ふ人の間に起つたこの無理な近寄りには到底どんなことをしても實現は出來ないと思ひますからと云つた。自分が辛う

じて心の中にこつそりと期待してゐたところのもの、そして聖殿のやうに護つて來たものが、突然冷酷な手によつて白日の下にさらけ出されるのを見たりリストは、魂を奪はれたやうになつて立ちすくんだ。黙々として彼は家を出て行つた。彼はもうカロリーヌに會はなかつた。彼の傷つけられた誇りは、隱遁の生活に入るやうに彼に命じた。かうして、お互にさうなるやうに生れついてゐたこの二人は、ほんの一寸したことから別れ分れになつてしまつた。二人は此の悩みを生涯の間、完全には克服することが出來なかつた。カロリーヌは彼の全生涯を通じ妻の理想として彼の念頭を離れず、決して忘れることなく、遂に一八六〇年の遺言中にも想ひ出されてゐるのであるが、この最愛の戀人カロリーヌをリストがその時失ふやうなことがなかつたとして見ても、なほ多くの悲劇的な運命が彼に振りかゝつて來たことであらう。カロリーヌは重い病氣に罹つた。そして後になつて修道院に入らうと思つた。が彼女の父はその友人ダルテイゴ伯爵と無理に結婚させた。そして、カロリーヌは彼の傍らにあつて不幸なる結婚生活を遂つたのである。彼女も決して彼を忘れることは出來なかつた。後になつても一回だけ彼等は再び會ふことになる。——

若い藝術家の弱々しい、感じ易い魂は殆んど致命的な打撃を受けてしまつた。彼は凡てのものに對して引込み思案になつた。彼の唯一の隠れ場は今や宗教であつた。そして以前父の前に懇願したと同じやうに、今度は母の前に自分を僧侶にしてくれと願ひ出た。然し彼はまた結局母の願ひに従つて行つた。それが息子としての義務を果すことであつたから「私の母は唯一の子供である私より他に誰一人頼る人がなかつた。そして音楽を本當に愛好してゐた私の聽罪師バルダンが、私が藝術家としての天職にあつても、神に仕へ、教會に仕へるべきだと私に忠告したことは恐らく私の初期の名聲を得るために非常に貢獻したことであつたらう。」フランスは母を非常に愛してゐたので自分が本當にしたいと思つてゐたことを犠牲にした。リストは後になつて次のやうに云つてゐる。「母は私を愛した。そし

て母のために私は神學校に入らなかつたのである。といふのは、母は正直な子供のやうな信念を以て、私がどうしても僧侶にならなければならないものとは思つてゐなかつたからである。それ故私は母のために浮世に留まり、私は唯餘りに俗世間並の生活をしてしまつた。私の慰めは、彼女の幸福が死の時に至るまで保たれることなのだ。母は何時もかういふのが常であつた。『人が私の息子について何か變なことを云つても、決して私は瞞されません。私は彼のほんとのことを知つてゐるのですから。』と。此の時代には、リストは唯、彼の神祕的な空想をよく理解し、共に感じてくれた音楽家、クリスチアン・ウルハンとだけ交際した。此の絶えることのない心の葛藤は、彼の自暴自棄な氣持に起因した亂雑な生活態度と結びついて、彼の體力を擦り減らし、彼を死に瀕せしめた。餘りにも體が弱くなつたのでとうとう教へることを全然やめねばならなかつた。彼は非常に無感覺になつてしまつた。そして此のやうな状態が數ヶ月も續いた。彼はもう一步も家を出ず、友達も彼をちつとも見ることがなかつたので、パリイでは彼が死んだといふ噂が廣まつてしまひ、「エトアール」誌は既に悲しい追悼の言葉を載せてしまつた（一八二八年冬）。リストはジョルジュ・サンドに宛てた或る手紙の中で一八三七年に、當時の體験を次のやうな言葉で述べてゐる。

「私の生涯の二つの發展はすでにパリイに於て完成されました。先づ第一は父の意志で、私が自然のままの遊牧の民の間で、自由に、恣に大きくなつたハンガリアの草原から連れ去られ、そして私に『ル・ブッティ・プロディジュ』といふ嬉しがるせの渾名をくつつけた華やかな社交界のサロンの中へ、此の憐れな子供の私を放り込んだ時です。其の時から、早い頃の憂鬱が私を擱へてしまひました。そして私はいや／＼ながら、婢僕の身分といふ藝術家の悪い後暗い屈辱を辛抱しました。後になつて父が死によつて奪はれ、私が唯一人パリイへ歸り、そして、藝術とはなんだらうか、藝術家はどうあらねばならないかといふやうなことを臆げに感じ始めた時に、自分の考へを表はすと、色々な方

面から反對されるといふあり得べからざることには私はどんなに惱んだことせう。おまけに私と同じ意見を持つてゐる人の好意ある言葉は一つもなく——そんな人は一般の人々の間にもなく、そしてそんなことに關してはどうでもよいといふ無關心さで居睡りをし、私のことを少しも分つてくれず、私が自分で立てた目標や、私に與へられた能力について少しも分つてくれない藝術家達の間には尙少いのです——。私が目前に見るやうな、即ち多かれ少かれ金儲主義の手工にまで墮落し、上流社會の娯樂の種といふ刻印を押されたやうな藝術に對して、激しい反感が起つて來たのです。私は本當は、偉い主人から受ける俸給で生活したり、手品師のやうに主人達から鼻眞を受け、給料を與へられてゐる音楽家よりも、俗世間のみんなの方が、よほど好きなのです。此の頃私は二年間に亘つて病氣をしました。そしてその二年の間に信仰と歸依の激しい私の慾望はカトリック教の嚴肅な苦行に變つて行きました。私の燃えつくやうな反抗心は聖バンサン・ドゥ・パウル寺院のじめ／＼した階段の上で鎮められて行つたのです。私は心を血にし考へを謙虚にしました。聖杯の雪花石膏の如く清淨な、純潔な聖母マリアの像は、私が涙ながらにキリスト教徒の神に供へた聖餅であつたのです。浮世を諦めることは、私の命を保つ唯一の力であり、私の命を救ふ唯一の言葉でありました。然しこんな隱遁の生活がそんなに永く續かう筈はありません。人間と罪惡を昔から結びつけてゐたところの貧困のために、私は此の聖なる孤獨を見つめることを止めて、時には自分と自分の母が生きて行くために聽罪師の前に立たねばならなかつたのです。私は當時は若くもあり、極端に走り過ぎるやうな所があつたので、外部との關係の軋轢の下に悲しい目に會はなければならなかつたのです。そしてその軋轢は、私の音楽家といふ仕事について來たものであり私の心は本當に愛と信仰の不思議な感情で充ち満ちてゐたのに、尙激しく私を傷つけてしまつたのです。……私は何の飾りけなく、あるがまゝに行動したので、即ち空想的な子供であり、暖い感情を持つた藝術家でありました。

人々が神様と人間とを熱い、燃えるやうな心で愛し、社會的な個人主義の冷たい霧圍氣に染まつてゐない時に、人々が十八歳といふ年に持つてゐる凡てのものを私は持つてゐたのです。そしてまた私は喜劇を演ずることを知らなかつたので、變な噂を立てられてしまひました。——私が俳優にならうとしてゐるといふ噂を。」

此の時にベートーヴェン傳記作者ウィルヘルム・フォン・レンツがリストを訪れて來た。彼はリストを「限りなく人を惹きつける顔つきをした瘡せ細つた青白い男」のやうに書いてゐる。そして又次のやうに記してゐる。「彼は深い考へ事に耽つてゐるやうであり、巾廣いソーファに埋れ、そしてとりまかれてゐる三臺のピアノの眞中程で長いトルコのパイプで煙草をふかしてゐた。彼は私が入つて行つてもちつとも動かず、私には少しも氣づかぬらしかつた。」レンツはリストに二三のウエーバーのピアノの作曲を知らせ、リストを非常に喜ばせたので、彼はレンツに教授をしてやることにした。レンツは次のやうに云つた。「變イ長調ソナタのアンダンテにある初めの四小節については、私は、前になか／＼良い先生に習つたこともあるが、その時よりも、ずつと多くのことをリストから學んだ。」と。此の時からウエーバーはピアノに於てリストの好きな作曲家となつたのである。

然しリストの如き活動的な人は、長い間何もせず過す事は出来なかつた。彼は精神的な仕事に全力を集中した。そして讀物、特に宗教的な本を手にとつた。シャトーブリアンのルネは彼の愛讀書であつた。彼はその中で自分に近い氣持を見出し、自分の現在の状態にとつての慰めと助言とを見出した。彼の教育は一面的であり、音樂より以外の凡てのものは等閑に附されてゐたので、彼は今自分の知識の中に多くの缺點のあることに氣づいた。激しい熱心さを以て、彼は自分の出會はず凡ての新しいことにぶつかつて行つた。文學、藝術、哲學、政治や宗教の方面、之等凡てのものを彼は探求し、自分の中に取り入れようとした。シャトーブリアン、バスカル、モンテーニュ、ラムネイ、ヴィク



トル・ユーゴー、ラマルティヌ、ヴォルテール、ルソー、そしてカントやシェリング、ヘーゲルまでも彼の机の上にあつた。かうして彼は或る時、辯護士のクレミューに「フランスのありとあらゆる文學を私に教へて下さい。」と頼んだ。此の時クレミューは「此の若者の頭の中で考への大混亂が起つてゐるやうだ」と思つた。此の時不意の出來事によつて彼は孤獨の勉強から呼びかへされ、完全に揺り醒された。ある活潑な叫び聲が回復期の患者の部屋に入り込んで來た。若い人々が群をなして通つて行くのが窓から見えた。そして若者達はその旗の下に叫びわめいてゐた。彼等は新しき時代よ現はれよと布れ廻り、古くさい神を誹謗し、官民擧つての改革を語り合つた。即ち一八三〇年の七月革命がパリを震動せしめたのであつた。鋭い風は世界中を吹きまくり、頭につけてゐた鬘を吹き飛ばしてしまつた。浪漫主義は始まつた。「吾が世紀の若々しい時代」は始まつた。リストは夢中でその運動に飛び込んで行つた。彼は凡ての野心と衝動に驅られ、人々と親しく交つた。「眞理とは、自分がどんな時代に於ても世界を完全に無視し、何事も氣に懸けぬことである。——少しも恐るゝところなく激情の示す道を押し進んで行きながら「利己主義は駄目だ!!」と叫んだ。「彼を治したのは大砲だつた」と後になつて彼の母は此の時代のことを思ひ出してはよく云つてゐた。彼は自分が自己矛盾に陥つてどうにもならなくなるまでは、持つて生れた多血質的な性格で以て、深い考へもなく物事に熱中した。だが此のやうな態度の一番の好ましい結果は、彼がいはば新しきものによつて生命を呼び醒され、行ひに對して要らざる詮索をすることを止めたといふ事實であつた。彼は今や再び社交界へと歸つて來、教授を始め、熱心に劇場に出入りするやうになつた。そして演奏會にも出て、彼は時に演奏するやうにもなつた。リストの文學的革命に續いて政治的革命が起つた。即ち彼は「民主共和政體」に熱中し、ラファイエット將軍を歡呼の聲で迎へた。そして凡ての人間に人文主義の凱歌を歌はせねばならぬといふ「革命交響曲」を作らうと思ひ立つた。それはス

ケッチのまゝで残つてゐる。次に社會的革命が起つた。即ち彼は聖シモン派の常客となり、人間の權利と一般の人間愛に熱中した。聖シモン派の主義が彼を魅了したのは、彼等が藝術と宗教とを一緒のものだと考へたこと、更に進んで聖シモン派の人々は藝術家に讓歩するといふ高い立場をとつたことであり、之はリストの考へに完全に一致した考へであつたからである。彼の藝術觀に最も大きい影響を及ぼしたのは、此處で得た感銘であつた。だが然し彼は教父アンファンタンによる墮落せる運動には完全に無關係であつた。彼はまた、屢々主張した通り、同盟の一員とは決してならなかつた。此の事件をひどく非難したハイネの文筆による皮肉は、全く個人的な反感に歸せらるべきであり、自分から他へ轉向しようとしたものと見ていゝだらうと思ふ。

リストの精神的發展を根本的に促進せしめたこの影響とは別に、今一つの刺戟、即ち彼の中にある音樂家としての側面を新しき活動にまで驅り立て、そして次の時代に重要な意味を持つ外面的刺戟が現れて來た。一八三二年三月九日にニコロ・パガニーニがパリーのグランドオペラに初めて現れた。彼は人を魅惑するやうな眼差しを持つた物凄い男であり、彼の圍りには人々の興奮せる想像が狂氣じみた作り話の綾となつてつき纏つてゐた。リストはその演奏會を聞きに行き、まるで魔法にでもかゝつたやうに、魅了されてしまつた。彼は父の死以來、外的生活に於ても藝術に於ても少しも定つた道を進んでゐなかつた。今や突然パガニーニの嘘のやうな物凄い技術によつて、彼に新しい道が開けて來た。彼は此處で絶對的な技術が樂器にどんな効果を惹き起すことが出来るかを知つた。最も神祕的な心の活動もこんな方法で表されることが出來たのである。若し彼が從來既に、ピアノ演奏の世界を全然自分に隷屬せしめてゐたとしても、而も尙彼のピアノ演奏の能力は獨創的ではなかつた。彼の激しい藝術家的名譽心は、今では此の考へに達し、後年になつても此の名譽心は其の他の能力と激しく衝突をしたものである。今や彼は烈火のやうな勢を以て

樂器にぶつかつて行つた。「二週間前から私の精神と指とは二つの呪はれた者のやうに働き續けてゐる。ホーマー、聖書、プラトーン、ロック、バイロン、ユーゴー、ラマルティニス、シャトーブリアン、ベートーヴェン、バハ、フメル、モーツアルト、ウェーバーは私を取り圍んでゐる。私は熱心にそれ等を研究し、人に尋ね、貪るやうに吞込んでゐる。——ミケランジェロが初めて大家の作品を見たときに、『自分も一個の繪かきなのだ』と叫んださうだ……」汝の友は如何に小さく、貧しいとはいへ、此の間のパガニーニの出現以來、汝の此の言葉を繰返し言ひ續けてゐるのだ！」人々は公開の催しの中で彼を見ることは殆んどなかつた。彼は三度、六度、八度、その他の技術的なことだけを毎日四時間から五時間位も勉強した。そして「彼は氣違ひになるか、さうでなければ世界が今必要としてゐるやうな本當の藝術家となるでせう。」と少しの誇張もなくいひ切ることが出來た。彼はパガニーニがそのヴァイオリンの上で持つてゐるやうな技術を、ピアノの上で獲得しようとした。とは云へば彼は藝術家として尙一層高い目標を狙つてゐた。パガニーニはほんとの達人であり、彼の演奏には王者の如き心が缺けてゐた。彼に於ては人間が藝術家の遙か下に位してゐた。リストは彼が意慾したところのものを表出し得る爲にのみ、此の技術を獲得しようと思つた。技術は彼にとつては、目的のための手段であり、決して主目的のものであつてはならなかつた。一八四一年パガニーニが死んだ時に、リストは温情のこもつた追悼文を彼に捧げたが、それを見ると、リストがパガニーニの演奏から受け取つた強い感銘には今尙慄へてゐることが分るが、然し、パガニーニの態度の非藝術的なものや、彼の甚だしい個人主義に對しては沈黙を守つてはゐられなかつたやうである。此の追悼文は次のやうな言葉で結んでゐる。

「將來の藝術家は下らない獨りよがりのことを悦んで斷念して欲しいと思ひます。その獨りよがりの最もよい最後の標本を吾々はパガニーニの中に見出したと思ひます。將來の藝術家は目標を自分の外部に置かず自分の内部

に置いて欲しいし、又名技主義も目的でなく手段であつて欲しいのです。『貴族がさうさせるのだ』と云はれるかも知れないが、それと同じ位、或ひは貴族よりも一層『天才がさうさせるのだ』といふことを忘れないやうにして欲しいと思ひます。」

此の高潔な言葉は、善行に豊かなリストの全生涯を物語つて餘りあるものであらう。リストは自分の勉強の合間にバガニーニの二十四のカプリスをピアノになほさうとした。だが、從來このやうな仕事で多くなされたやうな、一つ一つの音符を忠實に再現することは彼には出来なかつた。そして彼は全然独自の考へを以て、完全に詩想だけを寫し取つて作らうと思つた。此處に於て彼は一つの領域に入つて行つたのであるが、こゝで後年新生面を拓くことになつたのである。そして正に素晴らしい業績を擧げたのである。即ち他の人の作品をピアノとかピアノスコアへ藝術的に編曲することである。此の新しい道で彼は同時になほ大膽な試みを行つた。即ち今度には、その上に、彼が初めて聞いたときに非常に氣に入つた他の人の作品、特に此の場合には管絃樂の作品、エクトール・ベルリオーツの幻想交響樂のやうなものをピアノで征服することを始めた。

ベルリオーツはイタリヤ旅行から歸つて、一八三二年の十二月九日に、音樂學校の演奏場で、自分の演奏會を開いた。リストは非常に感激し、その日からピアノスコアの作成を始めた。それはもはやこれまでの編曲ではなく、個々の樂章の色彩性、夫々の特性、樂器効果を充分に考慮して作られた新しい作曲であつた。此の「ピアノスコア」は非常に立派なものであつたために、ローベルト・シューマンは自分一人で、未だ管絃樂總譜を知らないのに、此の樂曲に感激し、そして彼は今日でもなほ價值のある樂曲分解を書いた程である。凡ゆる新しいものを求めるリストの燃えるやうな心が、ベルリオーツの大膽な音樂に陶醉させられたといふことは、少しも不思議なことではない。どの程度ま

で、此の刹那の影響がリスト自身の創作の上で續いたかといふことは、後になつて明らかになるであらう。何れにせよ、ベルリオーツは吾が身を忘れて盡してくれる友、彼の藝術を計り知ることが出来ない程にまで促進せしめ、宣傳せしめる人を得たのであつた。バガニーニがリストの中に名技といふものを目醒ませたとするならば、リストはベルリオーツによつて音詩人に至る萌芽を植ゑつけられたのである。後にワイマールの土壤で爛漫と咲き誇つた花は、一八三〇年代に於けるフランスの土壤にその根を持つものである。

今やリストに残された危険は唯、古典に對する浪漫主義者達の闘ひに於て、新奇を好む者といふ側面や、又彼等の無節制といふ方面に盲滅法に迷ひ込んでしまひ、戦ひや争ひにのみ夢中になり、詩を忘却しはせぬかといふことだけであつた。

此の危険から彼を護つたのは、暗黒の雲間から出て來る月のやうに、パリーに不意に現れた藝術家フレデリック・ショパンであつた。このやうな闘争の雰圍氣は全くショパンに合はなかつた。彼の性質は、ほんの一寸だけ外から觸つても縮んでしまふ含羞草ネムリグサのやうなところがあつた。「演奏會を開くことは私の性に合いません。聴衆が恥かしいものですから。」と彼は何時かリストに云つた。だが二三のポーランドの伯爵令嬢のサロンで、開け放たれた窓からは月の光が射しこみ、接骨木ニハトコの香がむせるやうに匂ひ、そして、澤山の明りや、美しい女の眼差しの輝きが彼の感官を刺戟してゐる暑い夏の夜に、美しい若人ショパンはピアノに坐り、そして溢るゝばかりの詩趣ある夢幻を弾くのであつた。光を放ちつゝ消えて行く蠟燭のやうに弱々しい性格は長い生命を保つことは出来なかつた。ショパンの演奏の裡の此の静けさ、此の抒情詩がリストの力強い性格に影響して非常に落着きと静けさとを與へたのであつた。「その時には名聲ある反對者よりもつとひどく疑惑の目で見られてゐた、當時未だ非常にあやふやであつた所の吾々の

試み、吾々の奮闘に對して、シヨパンは冷靜な熟慮の支柱となつたものであるが、それは弛緩したり、邪道に走ることを防いだ確固たる信念の支柱であつたのだ。」とリストは彼の著「シヨパン」の中で述べてゐる。パガニーニとベルリオーツがリストをして凡ゆる因襲的なものを打ち破つて進ましめ、藝術の凡ての限界を大膽に跳び越えて行くやうに刺戟したとするならば、シヨパンは彼に眞の中庸の價値を重んずることを教へたのであつた。シヨパンからリストは浪漫主義の優美なところを知ることを知つた。これまで彼は浪漫主義の悲劇的なものばかりに共鳴して來た。リストとシヨパンは間もなく心から許し合ふ友達になつた。だが二人の何時も對立するやうな性質は、彼等の演奏と同じやうに、最も具合よく補ひ合つたものである。ピアノの限界を跳び越えて、全管絃樂のある音量をピアノの中に何とかして入れ込まうとしたリストの巨人のやうな力がシヨパンには缺けてゐたとするならば、シヨパンは彼の抒情的な弱々しい、そして詩のやうな多くの夢の中に美を創つて行く演奏に於てリストより優れてゐるのである。リストの演奏ぶりは今や詩的な内容を得て來た。本當に彼はその友シヨパンの態度の中へと非常に深く入つて行き、間もなく彼はシヨパンの音樂の最もよき理解者となり、シヨパンの作品を二人が演奏するならば、その中のどちらが演奏してゐるのか、はつきりと區別する事が出来ない程のものとなつた。又一方シヨパンはリストとの交はりによつて、作曲家といふ點で得るところがあつた。リストの影響は彼の多くの作品の中に容易に指摘することが出来る。之に反してリストは作曲家としてはシヨパンから何らの影響を受けなかつた。といふのは彼の友人の弱々しい性格は彼には無縁なものであつたからである。その當時、表面的な衣裳だけ見ると、往々にしてシヨパンを思ひ出させるものがあるが、内面的にはこのポーランド人の音樂とは全く何の關係もないやうなものが澤山出て來た。人々が恐らく後になつて、成熟したリストのリヒャルド・ワーグナーに對する友情と比較し得るやうな、此の友情の結びの最も立派な敘述を、シ

ヨパンが若くして逝つた後に、リスト自身は詩のやうな、人の心を打つ彼の著「シヨパン」の中で行つてゐる。そしてそれは今日でも尙人間と藝術家の最も良き評價たることを失つてゐない。シヨパンの數々の傳記の中で此の本にある無雙の魅力を越え得るものは一つもない。一人の天才が温かい、感じ易い藝術家の心を以て、他の一人の天才を理解し書き上げたのが正にこの本である。

音樂的關係に於けるシヨパンと同様な役割を、リストの生涯の社會的政治的な方面でなしたのは、僧侶ラムネイであつた。シヨパンが藝術の領域で、一面的に、狂暴に突進することからリストを守つたとするならば、リストはラムネイの中に於て、確固たる道を指示してくれる力強い人格を見出したのであつた。といふのは、リストは時々世界觀と生活力との渦中にあつて、抵抗出来ない程おしかゝつて來る重壓のために、それが滅茶々に壞れることがあつたからである。リストはラムネイに接近して行き、ラムネイは雑誌「アブニール」で國家や教會に對するその人道主義的理念を思ひ切つて、雄辯に、大膽に述べたのであるが、その雄辯さや大膽不敵さにすつかり心を奪はれてしまつた。彼が有名な論說「宗教の貧困について」を發表して後、初めて人々は彼をカトリック教の救世主として稱揚し、教會は彼に非常な期待をかけたのであつた。然し彼が、何も捉はれずに、自分の意見では、教會の改革すべき必要を提議した時に、彼に對する教會の愛顧は敵愾心に變つてしまつた。ラムネイは政廳側にも教會側にも自分の計畫を支持するものがないといふことを知つたので、彼は直接國民に向つて行つた。そして「一信徒の言葉」といふ辯明書に彼の意見を披瀝した。その結果教會から破門されることになつた。既に聖シモン派によつて作られたリストの藝術と宗教に對する觀方は今やラムネイの教説によつて實にはつきりとなり、圓熟して來た。藝術の目的は人間を完成させることと人間を高貴にすることにあり、藝術の不斷の發展は何等の束縛や傳統と結びつくべきでないといふ彼の宣言は

最も激しくリストを刺戟した。否その上彼はほんの一寸した論說の中にも彼の藝術觀を表すために、筆を手にしたのである。リストは親しくラムネイと交際し、後になつてもなほ屢々、彼はラムネイを常にさう云つて居たのであるが、彼の「父のやうな友人であり且つ先生」の意見に従つて行つた。此のやうな議論の方面とは別になほ、リストは彼の友ラムネイから重大なる教訓を得た。即ち彼は初めて、宗教と教會がどこまでも異つた概念であるといふことを知つたのであつた。信仰篤きラムネイが罰せられた破門といふことによつて、上述のことは非常にはつきりと彼に分つて來た。非常に激昂してリストは彼の師の側に加擔し、次のやうな鋭い非難の文を書いた。(一八三五年)

「カトリック教會は意味のない言葉をぶつぶつと喋り、下劣な墮落した生活を安閑と續けることのみを忙し。そして教會が呪詛し、是正しなければならぬ場合に、追放と破門をしか知らない若き人を吸収しつくすやうな深刻な憧憬に對する凡ゆる共感や藝術や科學をも理解して居ない。此の非常に苦しい渴とか、正義や自由や愛に對する飢ゑを癒すことは少しも出來ず、またそのために少しの持ち合せもない。——自分で自分を築き上げたやうなカトリック教會、そして現在控への間と公衆の廣場に現れ、國民と君主との橋渡しとなつてゐるやうなカトリック教會——一步も譲ることなく言ひたいのは此の教會のことだ。即ちそれは現代の尊敬と愛とは完全に無縁なものであり、國民、生活、藝術は教會の前から影を潜めてしまつてゐる。そして教會の斷定することは空虚なものであり、誰も顧みる者がなく滅亡して行つてゐるやうに思はれる。」

リストが當時自分の憤激を言ひ表したやうな、此の斷乎たる態度を、後年になつては勿論非としたけれども、彼は全生涯を通じて、また彼が僧服を身に纏ふやうになつた時でも、ローマ教會政治を快しとすることは出來なかつた。

リストはラムネイの如く嚴格な民主論者であつた。彼は自分が、ほんの子供の時から貴族のサロンを故郷として

つたといふことを惱まなかつたにしても、然し藝術や藝術家を見下げた貴族の高慢な輕蔑には憤激してゐた。リストは凡ゆる所から彼に起つて來る事態を廣く大きな藝術家の誇りの中に處理して行き、藝術家の威信を高める上に計り知れざる程の功績を残した。彼は何時も最高の人々から、その仲間たるべき充分に資格のある一員として取扱はれようと努めた。彼が貴族の仲間自分の意見を實現する方法を會得したといふことによつて、彼がその味方とだけ交はり貴族を敵視して交はらなかつた時よりも、ずつと多くの事柄をなすことが出來た。そして民主主義的な側から、即ちリストの事を後になつて「何時も本當に情ない振舞ひをした」と云つたことがあるハイネによつてなされた下劣な非難は全然當を得てゐなかつた。此の鋭い對立の間に立ち入るには、生活態度の非常な如才なさを必要とした。彼が凡ゆる社交團體の中で身を處して行くことが出來、そして此のパリ時代に向その儘しつかりとしてゐた彼の社交的な落着きは後になつて彼の生活に多くの良い結果を残してゐる。——

自宅教授だけでは生計を保つことが覺つかなかつたリストは、以前と同じやうに最も身分の高い貴族のサロンへ歸つて來て、屢々音樂を聞かせた。公衆の前では、彼はパガニーニの演奏會以來もう一度も演奏しなかつた。彼が今、殆んど三年に亘る沈黙を守つた後に、再びパリーの公衆の前に出た(一八三四年)時、彼は完全に前の彼ではなかつた。それは最早「小リスト」(Le Petit List)ではなく、聽者の息の根を止める巨人の如き天才であつた。パガニーニに刺戟されて捷ちえた嘘のやうに途方もない技術によつて、彼は凡ゆるピアニストを凌駕して了つた。彼は完全な獨自な者となり、無雙な者となつた。聽衆は電氣にかゝつたやうになり、喝采は狂亂の如くであつた。之に反して批判は大部分敵意に充ちた態度をとつた。古典的、因襲的演奏様式の代辯者達は此の新しき人の魔術に會つて畏れ戦ひてしまつた。リストの演奏は、新しい藝術の偉大さを理解せず、理解しようともせず、些末なことに拘泥して居た斯

る人達には、實になほ攻撃點となるに充分であつた。リストの溢れ立つばかりの激しい氣性は、間々古い大家の作品に專横さを持たせるといふことを斷じて許さなかつた。それは決して「人氣取り主義」「山師主義」、もしくは、反對者が色々と言ふやうなものではなくて、單純に彼独自の人格の溢れ出たものであつた。リストは正に自分で勝手に演奏し、そして初めの頃は充分には自制を保つことが出来なかつた。が最早彼は此の若さをも克服して了つた。彼に對する攻撃は何時も彼が聴衆の前に現れるまで續くだけであつた。彼がピアノで語れば、凡ての人はどうしても黙らなければならなかつた。當時の批評家連の中の稱揚すべき例外を、ドルティーゲが次の興味ある言葉を以て「ガゼット・ミュージカル・ドゥ・パリ」(一八三四年)誌で述べてゐる。

「彼の演奏は彼の言葉であり、彼の魂である。彼は自分の受取つた凡ゆる印象の最も詩的な、最も完全な精髓であり、彼が没頭したものの凡てである。見受けるところどうしても言葉の仲介によつては全然再現することが出来ず、また明瞭な一定の思想の中に表現することが出来なかつた此の印象、之をこそ彼は、決して到達され得ないまでも、眞理の力、自然の威力、感情の勢ひ、優美の魔法を以て全く限界なき廣さに於て創造して行くのである。然し一方彼の藝術はまるで惱めるもののやうであり、樂器であり、反響であり、また彼の藝術は表現し、翻譯するのであるかと思ふと、また一方再びそれは活動的となる。さうなると彼の藝術は物を云ひ、そして彼が自分の理念を擴げて行くのに役立つ器官である。従つてリストの演奏ぶりは、決して機械的物質的な訓練ではなくして、より以上のものであり本質的な意味に於て藝術の作曲であり、眞の創造であるといふことになる。」

一八三四年から一八三五年にかけて再びリストはパリーの聴衆の前で演奏した。多くの演奏會を彼はベルリオツと共に催し、そして「幻想交響樂」を彼が編曲したものを弾いた。彼は何時も収益は此の友人に與へてしまつた。慈

善の目的のためにも彼は氣樂に共演した。斯くして、後年非常にはつきりとなつて來た彼の氣質の二つの側が當時既に示されてゐた。即ち奮勵努力しつゝある藝術家の作品を宣傳するやうな行ひと、私慾を忘れ切つた心、慈善の心であつた。リストはパリーでまたもや流行兒となつた。今や凡ての藝術界、文學者も音樂家も彼と交際するやうになつた。此の人達の多くの名前から有名な人を二三掲げてみよう。ヴィクトル・ユーゴー、彼は或る夜友達仲間の會で「山にて聞ける」といふ詩を朗讀し、リストを非常に感激させ、リストはそれを後年彼の「山嶽交響樂」の下地に使つた。アルフレ・ドゥ・ミュッセ、彼はジョルジュ・サンドに紹介されて彼のところに來た。マイヤーベル、フェルディナンド・ヒルラー、彼等は度々ベルリオツ或ひはショパンと會ひ、特にショパンとは仲のよい友人であつた。また若いフェリックス・メンデルスゾーンとも間もなく親しい友情を結ぶやうになつた。彼等は頻繁にショパンやヒルラーと會つた。或る日メンデルスゾーンはリストに、出來上つたばかりの非常に讀みにくい短調協奏曲の草稿を見せたところが、リストは初見で完全に弾いてのけた。「誰一人としてリストが弾いたよりも立派に弾くことは出来ない。——驚歎すべきことだ。」とフェリックスは感激してヒルラーにかう云つた。メンデルスゾーンがそれからパリーを去つた時でもなほ、何時も彼等はヒルラーを通して互に接觸し續けてゐた。當時の彫刻家達にさへも、リストの「象牙色の横顔」をした一風變つた頭は非常な魅力を與へてゐた。その時代の多くの彫刻や肖像には彼の面影に非常によく似てゐるものがある。殊にトゥイレリエンの庭にあるフォワイアティールの作つたスバルタタスの有名な彫刻はリストを像どつたものとされてゐる。

リストが今サロンの中に占めた地位は以前のやうなものではなかつた。最早何時も甘やかされてゐた「神童」ではなくて、すらすらとした青年貴族であつた。そして彼の奏する樂音の魅力によつて人々の心をかき亂し、多くの美しい

婦人の眼は燃ゆるやうな眼差しを彼に送つてゐた。人々は前と同じやうに甘やかしたが、以前の子供らしい遊戯的なものは今や灼熱せる戀愛の耽溺となつて了つた。リストは時々暫くの間だけ社交界から見えなくなつたことがある。いろんな風評が立つたが、誰もその眞相は知らなかつた。事情はかうであつた。美人として騒がれてゐた伯爵令嬢アデル・ラブルナレード、後の侯爵夫人ドゥ・フルーリー、彼女は一年中老いた両親のところにある退屈をサロンの中で紛らさうとしてゐたのであるが、其處でうまく此の若い熱狂者リストの心を捉へて了つたのだ。彼は殆んどまる一冬彼女について彼女の華麗なアルプスの邸宅に行つた。一八三三年早々初めて彼はパリーに歸つて來た。そして此處から頻繁な文通、リストが後になつて云つてゐるやうな「フランス語高級作文練習」を此の美しい女と行ふやうになつた。が程なくして新しく起つたリストの情慾によつて此の文通は廢れてしまつた。パリーでは人々は此の遠く離れた「愛の邸宅」のことは何も知らなかつたが、彼が姿を消したことによつて彼といふ人につき纏ふ不可解のことは、人々に尙更興味を持たせ、知りたいと願はせる一方であつた。だが此の戀愛牧歌が此の種のものの唯一のもの、且つ初めて冒険でなかつたといふことを、之に關するドルティエグの次の言葉からうまく言つてゐる。「社交界の人々はリストが姿を晦ましたので、何か別な情熱が起つたのではないかと思つた。」之以上詳しい事は知ることが出来ない。

一八三四年にリストはアルフレ・ドゥ・ミュッセに紹介されてジョルジュ・サンドの所へも行つた。それは丁度彼女の小説「インディアナ」と「レリア」が非常な人氣を博してゐる時であつた。彼女の婦人解放熱は聖シモン派によつて大分影響されてゐたが、婦人の自由とか、愛や幸福に對する婦人の權利についての此の行き過ぎた燃ゆるやうな辯護説は、また實に詩的な表現に充ち、人の心情に深く訴へるところがあつた。出發點は確に良かったのだが、終りに目標をふみ越えて了つた彼女の道徳觀は、程なくフランス貴族の自由階級の中で最も有害な影響を及ぼすやうになつた。

リストの物の見方も又それに感染されたのであつた。そして一時彼はサンドの説の熱心な主張者であつた。此の女流詩人との個人的關係は非常に緊密になり、親しくなつたが、彼等の交はりには心から許し合つた友人の交際といふ以上には決して出なかつた。彼女の性格はリストに對しては餘り女らしいものではなかつた。彼はサンドを次のやうに云つた。「彼女は冷淡で利己的であり、想像の中でのみ温かさを持つてゐる。がその他はまるで凍つた心を持つてゐる。」當時はまだ既に彼の感覺は、また他の情慾にひどく囚はれてゐた。

ペルリオーツは一八三三年から三四年にかけての冬に、リストをダグー伯爵夫人の集ひに紹介した。彼女は自分のサロンに藝術界、文筆界の花形を集めようと努めてゐたのである。彼女は既に久しい間、リストに此處で「最も素晴らしい餘興」をして貰はうと思つてゐた。ペルリオーツは前以て次のやうなことをリストに注意して置いて、或日とらう彼女の願ひを彼のところへ持つて行つた。「彼女の美しさは男の波と共に昂まつて行く打算的なものです。だが男に對する氣持は、困つたことには、何時も冷たいものです。彼女は精神と情熱は持つてゐますが、誠は持つてゐません。」リストはそれ故注意深く控へ目にしてゐた。が彼女に對する彼の冷淡さと無關心さは反つて、紳士や藝術家達に敬はれることに慣れてゐた夫人を惹きつけて了つた。彼女はリストに女の持つ色々な技巧に幾度も抵抗させるやうにしたが、間もなくどうしても駄目となつた。此の美しい女に對する激しい情慾が彼の中に芽生えて來、彼は今や彼女のサロンによく現れる客となり、そして公けの席でもかまはず彼女の許にゐるやうになつた。然し恐らく自尊を傷つけられて此の危険な遊びを始めた程の彼女はまた、何時までも自分の感情に満足したまゝではゐなかつた。彼は少しも實現の可能性など考へなかつた危険極まる情慾から逃れようとして、一八三四年秋、父のやうな友人ラムネイの所に走り、そのブルターニュにある平和な靜かなラ・ケーナイに逃げて行つた。だが彼は自分の力を餘りに

も高く評價してゐた。時は既に遅かつた。どうすることも出来ない程の力を以て、彼は彼女の住む近くのパリへと連れ返された。そこには運命が救ひの手を擲けて待つてゐた。といふのは伯爵夫人の長女、六歳のルイソンが病氣になつて死んだのであつた。母としての悲歎は暫らくの間彼女の激しい情慾を鎮めたので、反つてその後間もなく、もつと強く此の情慾が起るやうになつた。彼女はすつかり彼のものとなつた。リストは伯爵夫人のために郊外の家を借りた。そして二人はよくよくこつそりと愛の巢の幸福なる時を享樂した。だが間もなくかういふ状態は伯爵夫人には堪へ切れなくなつた。そして彼女は愛人のために夫や子供を捨て、彼と共に逃げ出さうと決心した。かうした行き方と共に自分に負はされるかも知れない責任に不安を感じ、そしてかうした關係が將來は永續しがしないといふことを豫測したリストは、彼女を此の無分別な進み方から引き止めようとした。だが無駄だつた！ 彼女の母の懇願もラムネイや彼女の聽罪師デ・ゲエリー神父の忠告もみんな何の効き目もなかつた。彼女の情慾は、非常に物の分つた、しつかりした反對をも打ち破つて行つた。愛は理性を越えて行くものだ。彼女の場合にもやはりさうであつた。伯爵夫人は先づ一八三五年の初頭、彼女の母伯爵夫人ドゥ・フラヴィニーと共にベルンに旅した。リストは二三日後れて後を追ひ、そして別のホテルに入つた。かうしたのは歸ることが出来るやうにちやんとして置くためであつたらしい。それなのに或る日彼女は自分の荷物をリストの部屋に運び込んだ。かうして事件は結末まで行つた。フラヴィニー夫人は唯一人パリへ歸つて行つた。

放浪時代 (一八三五年—一八四〇年)

一、マリー・ダグー伯爵夫人

マリー・ソファイ・ドゥ・フラヴィニーは一八〇五年フランクフルト・アム・マイン市に生れた。彼女の父は舊フランス貴族の家から出た若い士官で、ドゥ・フラヴィニー子爵(一七七〇年に生れ一八一九年に死す)といひ、フランス革命の時にフランスの國外に逃れて來、フランクフルト・アム・マイン市に下つて來た。そしてそこで彼は一七九七年に富裕な銀行家シモン・モーリッツ・ベトマンの娘と結婚した。此の娘は兩親の意志に叛いてまでも強く彼との結婚を遂行したのだつた。とかくする中に四人——男の子モーリッツと女の子マリーを入れて——にまでなつた。その家族をつれて一八〇九年子爵はフランスに歸つて來て、トレレーヌに地所を買つて定住した。此處のモルティールの邸宅で小さいマリーは自由氣儘に大きくなり、その間に男の子はパリーの學校に通つた。彼女は母からドイツ語を、父からフランス語を習つた。兩親が殆んどパリで過してゐた冬の間は、彼女は此の子供達を最高の貴族に仕立てた僧侶ゴートイールに勉強を見て貰つた。と同時に、彼女は熱心に舞踊もやり、又サロンの社交術も教はつた。十三歳の時彼女が非常に愛してゐた父が死んでしまつた。母は彼女を連れてフランクフルトの兩親の家へ歸つて來た。既に早くから肉

體的にも精神的にも非常に發達してゐた此の美しい娘は、此處でひどく此の家のお客たちの目を惹くやうになつた。或る日彼女は、庭でゲーテが彼女の祖父と談じてゐるのを見た。ゲーテは別れを告げる時彼女の頭に手を置いて、暫らく彼女を其處に立たせ、そして彼女の金髪を撫で、やつた。「私はわざと息を凝して居ました」と後になつて彼女は此の光景のことを追想録の中に書いてゐる。ベトマン家の社交的な混雜は幼い伯爵令嬢の教育に非常に不都合だつたので、彼女はパリにあるサクレ・ユール・ド・マリー（聖心院）といふジュスイット派の修道院の學校に送られた。彼女の心情は修道院生活の外面的な浪漫性には非常に敏感であつた。そして彼女はほどなく非常な敬虔さを示すやうになつた。それと共に精神と思考の生々とした自由は妨げられたけれども、教義の吟味、聖書の章句の解釋は彼女の大きな喜びとなつた。約一年の後マリーはパリーの母の家へ歸つた。そして今では最高の社交界へ連れて行かれた。サロンや劇場や舞踏會の優雅な世界では、彼女は明朗きはまる、然しまた凛としたところのある少女であつた。一八二七年彼女が二十歳になつた時、シャルル・ダグー伯爵は彼女に求婚した。ダグー伯爵は舊貴族の將校の家庭の出で、宮廷や社交界と非常に勢力ある關係を持つてゐた。それは彼女に上流の世界で輝かしい地位を開いてくれた因襲的な結婚であつた。伯爵は本當に立派な紳士であり、彼女にあらゆる自由を與へ、ただ彼の體面と地位を保つのに必要な注意を要求するだけであつた。彼女の家は間もなく、政治的、文學的、藝術的生活の凡ゆる精神的大家物たちの集會所となつた。伯爵令嬢は美はしく、そして金髪の人の持つ非常な魅力を持つてゐた。いつも讚嘆の的となつてゐた彼女の髪は非常に房々として居り、不思議な色を持つてゐた。彼女が嘗てヴェニスでリストと一緒にアポロの廣間に入つて行つた時、彼女の頭の圍りに房々と垂れてゐる金の散らばつたやうな髪を見た一人のイタリア人が、「アポロの髪の毛」と叫んだ。残念なことに彼女は自分の美しさを自分で非常によく知つて居り、そのために非常に自惚れてゐ

たのだ。また彼女のために不幸なことには、幼少の頃からあまやかされ、ちやほやいはれて放縱な教育を受けた彼女は、自分の個性に非常な重みを加へ、そして自分の氣に入つたやうに生きて行くことに慣れてゐたのである。冷やかな利己主義と傲慢な虚榮心とが彼女の中に知らず／＼の間に段々大きくなつて行つた。感情生活は彼女の幼少の頃の環境のために非常に皮相なものであつたが、之に反して化粧の事に關しては彼女は第一人者で、一時はパリーのサロンの中で流行の魁をなしてゐた。理智的並びに情慾的方面では彼女は何時も、社交界で重要な役割を占めようと努力した。そして自分からやらうと思つた時には誰でも、彼女の風采によつて魅惑して了ひ、自分の欲するものは何でも手に入れることが出來た。彼女は人を壓倒し征服することに慣れてゐた。此の夫人に今や突然リストが面と向ひ合つたのであつた。彼女が如何に此の藝術家の初めの間の無關心さを刺戟したか、そしてまた次に彼女がとう／＼彼を征服して了つた時に、彼女の側にも如何に情慾が逆り出て來たかといふことは容易に理解出来ることである。常に思慮深い一人の人格が、誰にも負けないやうな女性に立ち向はせられ、そして此の二人の個性の争ひの中に於て彼等の内面的精神がすつかり掘り起されてしまつたのである。こんなことは今までになかつた事である。お互に征服せねば止まない二つの性格は向ひ合つて立つた。だが此の藝術家の生涯の伴侶となるといふ氣持になつた今までの自分の過程を考へて見ても、又彼のミューズでさへもあり得るといふ靜かな希望を實現するのにも彼女はその資格がなかつたので、此の關係がそのまゝ幸福に續き得べきものではなかつた。情慾が段々と靜まつて行き、そして夫々の性格の眞の姿が浮び出た時に、彼等の不調和は明らかになつた。一人の人が他の人を破壊するか、さもなければ彼等が互に別れて行くかしなければならなかつた。

リストと伯爵夫人が一八三五年ベルンで一緒になつた時、彼の感情は彼女にとつては、決して心から靜かに傾倒し

て行くやうなものではなく、灼熱せる情慾であつた。之が漸次に本當の感情にまで發展して行くといふことは、彼とは全然違つたマリイの性格が之を妨害したのである。二人とも結婚といふやうなことは考へてゐなかつた。凡ての傳記に出て来る作り話に依ると、伯爵夫人はリストと結婚し得るために、新教を信仰したらよいといふ彼の提議に對して、尊大な口ぶりで次のやうに答へてゐる。「伯爵令嬢ダグーは決してリスト夫人にはなりません。」リストは之を否定して云ふ。「私がダグー夫人に求婚する。彼女は誇りに拒絶する。そして彼女は新教に改宗しようと思はる。これ位馬鹿げた筋書はありません。私をほんの少ししか知らない人でも、決して之と同じやうなことを記さないでせう。」或る目的を達するために宗教を變へるといふことは、心の傾いて來ることが必要な時でさへも、リストにとつては不可能なことであつたらう。故に二人は相互ひに信じ合ふことによつて、世の中の偏見に對抗して結合して行かうと努力したのであつた。此の努力は彼女が出入して居た社會では、何となく不可能なことであつた。そして程なくどうしても好ましからぬ衝突が起らなければならなかつた。即ち時が経つに従つて此のやうな状態にならないわけには行かなかつた。リストはマリイに對して正當なる夫としての凡ゆる義務を負うた。彼女の収入、持參金からの利子は高々年二萬フランに過ぎなかつた。其他凡ゆるもの、即ち彼女が今になつても持ちつゞけ、リストの祕書の申告によれば間々年に二十萬フランに上ることのあつた程の彼女の高貴な習癖と慾求とが必要とした凡ゆるものをリストは保證した。彼の演奏會の収入と、貴族からの無數の寶石の贈りものはこの贅澤をすることを許したのである。彼はかういふことを思ひ出して後年次のやうに記してゐる。

「私が未成年の頃、父が死んでからといふものは、私一人ばかりでなく私の家族のために日々のパンを稼がなければならなかつた。その後私には金が私の方に流れて來るやうに思はれる程の収入があつた。そして私は馬鹿者のやう

に凡ゆる人と一緒に金を浪費して行つた。今では私は金の扱ひ方、使ひ方を昔よりは知つてゐる積りだ！ だが彼女が欲しいものはなんでもしてやつたのだ！ それでも私は幸福になれたのだ。貧乏や缺乏は私を怖れさせたが、さうは云つても富裕と贅澤に魅惑されるやうなこともなかつた。私はグランドピアノや愛する人とならば何處でも暮すことが出來たが、どうしてそんな時が來ようか！ 私の考へは非常に哲學的になつてしまつた！」

伯爵夫人の逃亡がパリイに知れ渡つた時に、社交界では醜聞がとびまはつた。實に馬鹿げた噂まで出て來た。即ちリストは彼女をグランドピアノの中に入れて誘拐したのだと云ふのもあつた。パリイの貴族達には此の相愛の二人の關係は永い間少しも祕密になつてゐなかつたが、二人はそのことについてのほんの少しの妨害も受けなかつた。だが今となつて非常な評判が立つた時、二人は社會から追放されてしまつた。ダグー伯爵は自分の辯明を一句も發せず、伯爵夫人に對して一言もいはず、唯「よろしい、私はそれを耐へ忍んで行くことが出来るでせう。」とだけ云つた。然し次の年になつて、此の出來事の真相やリストの態度が知られてみると、人々の態度は和らいで來た。ダグー伯爵さへも、家族會議で別居と云ふことが定つた時に「リストはほんとの紳士だ」と云つた。後になつてマリイが彼女の家族と再び和解した時に、ダグー夫人の兄ドゥ・フラヴィニイ伯爵がリストにこの言葉を傳へたのであつた。

二、スピスでの同棲生活（一八三五年—一八三七年）

フラヴィニイ夫人がパリイへ歸つたあとで、リストとベルン伯爵夫人は一緒にゲンフへと赴いた。彼等はそこのリニ・タバツァウ（今日のエティヌ・デュモン三十二番地）に、湖とアルプスを一眸に納め得る優雅な住居を持つた。彼

等の生活振りは初めは非常に謙虚であつた。リストは再び熱心なピアノ勉強と同時に、學問的な教養を加へることに餘念がなかつた。彼は大學に入り、種々の學科、特に哲學の講義を聴いた。彼の當時の主な讀物はバイロン、バラシユ、セナクルールであつた。彼がパリを去る前（一八三四年）に、彼はベルリオーツやショパンやジャン等々、また樂譜商シュレージンガーを動かして、「ガゼット・ミュジカル・ドゥ・パリ」といふ新しい音樂雜誌を起し、その中で藝術家自身が意見を發表し得るやうに計畫してゐた。同じ年にローベルト・シューマンが同じやうな動機から始めた「新音樂雜誌」を發行したといふことは、全く偶然なことである。此のシューマンの雜誌は後年リストにとつて重大な意味を持つものとなつたのである。リストはパリですでに此の雜誌「ガゼット・ミュジカル」に論文集を投稿しようと思ひ始めてゐた。そしてその中で彼は初めて、高慢な顔をして藝術家を見下す社交界に對する永年の憤懣や、彼に集中された當時の音樂界の状態への不平に對して腹の底から書きなぐつてやらうと思つてゐた。「藝術家の地位に就いて」といふ綜合題目の下に集められた數々の論文は、今やゲンフで脱稿しパリで出版された。藝術と藝術の婢僕達を斯くも大膽に談じた論説を以て彼の重要な文筆活動は始まつたのである。吾々は更に深く彼の文筆活動の全體に戻つてみよう。リストは彼の實行範圍を、唯弱點や缺點を暴露したり、音樂學校、劇場、演奏會、そして音樂文筆界に批判を起すやうなことにばかりに制限するやうなことはなく、彼はまた判斷の驚くべき圓熟さと先見の明を以て、今日でさへも少しも無價値になつてゐないやうな、完全に發達した革新的な主義を表明した。彼はワーグナーが後になつて彼の論文「藝術と革命」の中に獨特な、云はば獨斷的な目的のために捉へたやうな多くの思想を、彼の論説の中に、先に——然も一般的な見地から——取り入れた。リストのこの計畫を實現するといふやうなことは、當時は然し考へられないことであつた。リストは彼の時代の遙かに先を走つてゐたのだ。之等の中の多くのものは一

八五九年に初めて、リストの指導の下に創設され、そしてまた彼によつて促進された「全ドイツ音樂協會」に於て實行された。此の革命的な仕事の他に、此の次の年の間に、現在は *Lettres d'un Bachelier—es-musique* といふ題目の下に集められ、彼の全集第二卷では「音樂のバカロレアの旅の便り」といふドイツ語の題目の下に集められてゐる旅行記が「ガゼット・ミュジカル」に載せられた。それらは吾々に、リストを繞る生活について多くの興味ある解説を與へてくれる。

リストはゲンフに於てまた教授の仕事を始めた。火曜日と土曜日の午後にはピアノを教へた。一八三五年ゲンフに音樂學校が開かれた時に、彼は無報酬で或るクラスを受持つた。そのため彼は名譽教授に推され、謝禮として高價な時計を貰つた。此の弟子達の中には、若い頃のヘルマン・ヨーヘン、パリからリストに隨いて來たベーター・ウォルフ、詩人ミュッセの妹、エルミーヌ・ドゥ・ミュッセ、マリイ・ポトカ伯爵夫人、ドゥ・ミラモン伯爵夫人、ヴァルリー・ポアッシエ嬢、モンゴルフェイ夫人などがあつた。——リストの書いた生徒の成績表は今日尚ゲンフの音樂學校に保存されてある。

リストはゲンフでは稀にしか公衆の前で弾かなかつた。そしてそれも大抵は慈善の目的のためであつた。彼の實際の範圍は學界と、身分の高い政治的な亡命者の仲間に限られてゐた。伯爵夫人は非常に論争を好んだ。そして間もなく名士達の輝かしい仲間が彼女を遠つて集つて來た。「彼女は自分の警句やくだい程の文句や、女らしい能辯さの凡ゆる道具を以て、此の白髮の老人達を呆氣に取らせる術を如何によく知つてゐたことか！」彼等の中には次のやうな人達があつた。才氣煥發な文筆家アドルフ・ピクテ、彼は當時非常に熱心にシェリングの研究に没頭し、よくリストと「絶對者は自己と同一のものなり」といつた命題に就いて議論し合つてゐた。老齡の文學史家シモンド・ドゥ・シス

モンデイ、彼は伯爵夫人に政治に對する興味を起させた。植物學者ドゥ・カンドール、ゲンフ共和國の大統領チェームス・ファツィー、東洋學者アルフォンス・デニス、彼はリストが東洋旅行を計畫するに至つた程、東洋に就いてリストを刺戟した。等々——。貴族の中では就中、音樂的な伯爵夫人マリー・ポトツカの名を擧げることが出来る。彼女はパリーの友達への手紙によつて、首都パリーに於けるリストに對する人々の氣分を和らげるのに力があつた。それとイタリアの侯爵ベルヂオジョソ、彼は見事な聲を持つて居り、リストと一緒によく音樂を演じた。

一八三五年十月三日のリストとベルヂオジョソ侯爵とヴァイオリニスト、ラフォンによつて催されたイタリア亡命者のための慈善演奏會は、リストのゲンフ滞在中に高い音樂的頂點を形作つた。リストは演奏會について旅の最初の手紙をジョルジュ・サンドに、細々とユーモアたつぷりな口調で書き送つてゐる。彼はチェルニーの編曲した四臺のピアノの爲の接續曲を、弟子のコーヘンとウォルフ、そしてポノルディ氏と共に弾いた。それにウェーバーの協奏曲を演奏した。リストは尙二三の慈善演奏會に出演し、公衆と批評家の側から非常な稱讚を博した。だが彼が初めて獨奏會を催した時には、會堂の半分は空席であつた。「彼等がさう云つたやうに、私の不眞面目な生活の爲に集つて來なかつた。」と彼は後になつて云つてゐる。それにはゲンフの人々は殆んど禮を失した、非常に矛盾した態度を示した。たとへ彼等が彼の演奏會に行き得ない程の反感を、彼の私生活に對して持つてゐたにしても、彼等は相續いて行つた彼の善行を黙つて知らぬ顔をしてゐるといふ事は出來ない筈だ。だが彼等の「怒」はそんなにひどいものではなかつた。

一八三五年十二月十八日リストに一人の娘の子が生れ、ブランドイーヌと名づけられた。彼女は母と生きうつして、リストの寵愛的となつた。最も親しい感情からピアノ曲「ゲンフの鐘」をリストは作曲した。最初の歌曲、即ち「房々した金髮の天使」Englein hold im Lockengold が彼女に贈られてゐる。

一八三六年の初めに、リストは自分の勉強を切り上げてパリーへ急行しようとしてゐるといふ噂がゲンフの隱遁の世界に入り込んで來た。といふのは其處に丁度、從來はあまり大して有名でなかつたジギスムント・タールベルグといふピアニストが現れて、多くの演奏會で非常な喝采を博してゐた。リストの「醜聞」以來、彼を放逐して了つた社交界は此の突然に現れ出た競争者に夢中になつてゐた。そして聲高く彼を稱讚する言葉を布れ廻つてゐた。タールベルグの出現は疑ひもなく目覺しいものであり、彼は卓越せる技巧家ではあつた。——が然し、またそれ以上の何者でもなかつた。彼は自分の技巧的効果によつて人を啞然たらしめた。その効果といふのは、凡ての鍵盤の上をとび廻り、そしてその際指は旋律を浮び上らせるといふハープのやうなアルペジオにあつた。此の當時では新しかつた効果の創始者といふことが、彼に對して、有名なハープ演奏者パリッシュ・アルヴァルスから抗議されたといへ、パリーのタールベルグの評判は大變なものであり、ピアニスト界の第一人者たるの地位を彼に與へるに充分であつた。新聞界、殊に當時のブリュッセル音樂學校長フェティスは「ガゼット・ミュージカル」紙上で彼を「劃期的天才」だと稱揚した。此のタールベルグを賞讚した讚歌はリストを動かさし、一八三六年五月の初めに、リストは其處此處で此の噂が正しいかどうかを調べて廻つた。彼がパリーに着いた時には、タールベルグは既に再びウィーンへ旅立つた後だつた。音樂家達の語るところによつて、彼には、直ちに此處では藝術の新しい發展といふことは少しも問題になり得ないことが分つて來た。そしてパリーの人々は自分の永年の公けの生活にも拘らず、外面的な藝術の技術に欺かれて了つたといふことを彼は残念に思つた。此の皮相な藝術に相對して、彼は自分が本當の名技主義だと思つてゐたものを、演奏によつてもう一度、一般に知らしめようと思つた。彼は今公衆の前で演奏するといふことはよくないことのやうに思つてゐたにも拘らず、此の事は敵對行爲或は更に嫉妬の行爲といふ感じを起させたかのやうだつた。彼はブレイエ

ル會館とエラル會館の二ヶ所で非公開の夜會を催し、音楽家達を招待した。リストが演奏するといふ報せによつて非常に多くの聴衆が集まつて來、ほんの十人か十二人位しか直接には招待しなかつたのに、會館は二回とも四百人から五百人位の聴衆で一杯になつた。ベルリオヅは「リスト」と云ふ題目の比較的長い論文で此の演奏會のことを記してゐる。彼の次の斷片は感激させられて了つた彼の影響をよく物語つてゐる。

「再び現れたリストの姿はすつかり變つてゐた。當時も彼の技倆は優れてゐたけれども、今日のリストは吾々がよく知つてゐた過ぎし年のリストを完全に凌駕してしまつた。そして彼が非常な飛躍をなし、斯くも迅速に今まで知られてゐた最高點を越えて以來、吾々は最近の彼を聞いたことのない人々に向つて、大膽に『お前達にはリストは分つてゐない』と叫びかけることが出来る程である。……私が技術に關して、大いに新しいものとして今までのものと違ふ點だけを云ふならば、節奏と色調とであり、人々はこれ等をピアノで表現することは不可能だと思つて居り、且つ今までは實際到達し得ないものであつた。此のために當然必要となつて來るのは次のやうなものである。即ち廣々とした而も簡単な歌の旋律、長く響き續け、そしてガッシリと結ばれた音、尙その上或る箇所では非常に激しく而も堅さや和音的な輝きを損ふことなしに、非常になげやりに書かれた凡ての音符、更に短三度で動く旋律、樂器の底音部に於ける全音進行に驚くばかりの速さでスタッカットが行はれるといふこと。しかもかくして各々の音符はたゞ直ちに消され、そして前の音とも後の音とも完全に分たれるやうな短い和らげられた音を出すに過ぎない。……非常な驚歎の的となり、そして人々は彼の少年時代、特に彼の神經過敏な氣質に鑑みて殆んど期待してゐなかつた進歩は、彼の演奏ぶりの抒情的な部分の著しい改革であつた。……これこそピアノ演奏の新しき偉大なる流派である！ 今より作曲家としてのリストから總てが期待されてよいのだ！ 然し人々は、彼のピアノ演奏家としての意味

が何處にあるかをも殆んど知つてゐない。何故なら、急速な、完全な方向轉換といふことは、どこまで突き進んで行くか分らないやうな強力な内面的な衝動に従つて行くところの、未だ尙發展段階にある人の場合について云はれることだからである。私の意見で正しいことを證明するために、私は今日まで殆んど凡てのピアノ演奏家にとつてスフィンクスの謎であつた優れた詩、ベートーヴェンの作品一〇六番の大きなソナタを彼が演奏するのを聞いたことのある人々の判斷を引き合ひに出してゐる。新しきエーディプスであるリストはその謎を解いたのだ。それは演奏不可能と思はれてゐた作品の演奏の理想である。リストは斯くの如く今まで理解されてゐなかつた作品を人々に理解せしめながら、彼こそ未來のピアニストであるといふことを示したのであつた。」

それは盲目的なタールベルグの熱狂者達に對する明かな挑戦であつた。然し誰一人としてリストの成果の新鮮なる感銘を受けては、敢て公然と反抗しようとする人はゐなかつた。斯くして事件は終つたかの如く見え、そしてリストは其の年一八三六年の十二月にベルリオヅの演奏會に共演するといふ約束を残してゲンフに歸つて行つた。

夏は美しいアルプス地方への小旅行に費された。リストは自然を非常に愛し、自然に刺戟されて彼は屢々藝術創作を行ふことがあつた。「そこには豪快な男達、氷に覆はれた山々があり、幼年時代に於ても私はそれ等に友達のやうな親しさを持つてゐた。自然の美しさが私に與へる此のやうな力強い印象に攔まへられてしまひたいといふ祕かな憧れを持つてゐた。彼と伯爵夫人とは先づヴェイリールに行き、それからモルネの避暑地に行つた。其の後ナポリへの旅行が計畫されたが、またもや之は中止せられた。ジョルジュ・サンドの來訪は十月にとゞ／＼實現された。彼女の來訪は既に前々から計畫されてゐたのであつたが、二度も三度も延びのびになつてゐた彼女の離婚事件のために、何時も何時も延期されてゐたものであつた。サンドが頻繁に交通してゐたリストと伯爵夫人との招待によつて、彼女は

二人の子供と一人の侍女(ウルシニール・ジョス)を伴れてゲンフにやつて来た。そしてサンドもその書簡「一旅行者の手紙」の中で讚美して居り、ピクテも同様にその小説「シャモニへの騎行」中で讚美してゐる数日のシャモニへの共同旅行については、非常に澤山の面白いエピソードが知られてゐる。藝術や哲學に關する眞面目な話と非常に愉快な有頂天騒ぎとが入り交つてゐた。既に此の一行の外観は人目的となつた。サンドは古風なブラウスを身につけ、子供達、リスト、そしてジョルジュ・サンドが十六歳のヘルマンをさう呼んでゐたのであるが、その「ブッチー」も同じやうに軽やかな旅仕度をしてゐた。髪はみんなリスト流に長く延ばしてゐた。度々旅廻りの曲馬園と間違へられ、而もどれが男か女か、どれが主人か召使かを入々が區別し得なかつた此の目立つた一行は、シャモニのユニオン・ホテルの人々に少からず危険視されてしまひ、そのため主人は毎日數回銀製の匙の敷を調べてゐた。リストは宿帳に「パルナッスに生れ、疑惑から出て、眞理に行く、音樂家、哲學者」と自分で署名した。歸りには彼等はフライブルグに寄り道をした。それはオルガン製造者モーザーが作つたそのニコラウス教會の大オルガンを見學に行くためであつた。夕方頃初めて彼等は其處に到着した。リストは直ちにオルガンにより禮拜堂の黄昏の靜寂の中に、彼の力強い演奏を響かせた。ジョルジュ・サンドは書いてゐる。「彼のフローレンス風な横顔の輪廓が神祕的な恐怖に包まれ、宗教的な憂愁の漂ふ此の雰圍氣に於けるよりも、より純粹に、より蒼白に、私の目にうつつた事は一度もありません。」リストはモーツアルトの「怒りの日」^{デイエス・イラエ}をもととして幻想曲を弾き始め、程なく「怒りの日」に自分の主題を加へて行つた。ピクテは次のやうに書いてゐる。「そして今や二つの間に一風變つた争ひが始まつた。身輕なものは重々しい相手を大膽に攻撃し、そして彼をその中庸を得た行き方から不協和音の奈落におびき寄せようと、藝術の凡ゆる魔術が彼の圍りをふざけながら廻つて行つた。眞の情熱と勇氣とが嘲罵と憤怒の音に移つて行くまでは、オルガンの絢爛た

る音の中に無数の冗談を云つてゐるやうな諧謔が歩き廻つてゐた。とうとう全力を盡して二つの主題は抱き合つて了つた。といふのは音響、即ち悲痛の音は、恰もラオコンが蛇に巻きつかれ、苦痛を訴へる蛇を力の限り、而も空しく振り離さうとしてゐるかの如く、此の闘争を抜けて奇妙な響きに高まつて行つたのである。だが争ひの結末は違つたものとなつた。第一の主題は自分の優位を主張し、そして第二の主題を無理やりに基音に従はせて了つた。またやや減茶々な和音が歸つて来た、そして何とも云ひ表はし得ないやうな技術で、二つの主題は或る一つの主題へ完成された偉大と豪華、冥想と情熱、力と婉美の表現にまで統一された。そして此の新しい主題は天才の興奮と共に發展し樂器の凡ゆる助けによつて表現された主題、崇高の讚歌、藝術家の即興で終つた。「ジョルジュ・サンドは初めて嚴かな沈黙を破つてふらくくとリストの方に向つて行つた。リストは深く感動して云つた。「お友達よ、私達はお別れしようとしてゐます。今日の想ひ出が決して私達の記憶から消え去らないやうに。そして私達はまた藝術と學問、詩と思想、美と眞理は人生の殿堂に向つて金色の門を開いてゐる二人の天使であるといふことを決して忘れないやうにしませう。」翌日リストは行程を變へ、ジョルジュ・サンドは子供達とゲンフに歸り、そして伯爵夫人のところへ十二月の半ばまで滞つた。

一八三六年十二月十八日パリでベルリオーツの演奏會が催された。リストはその月中頃ダグー伯爵夫人と其處へ赴いた。一方ジョルジュ・サンドはリストとマリーが訪問して來ると約束してゐたので、その接待の色々のものを準備するために、ベリーにある彼女のノーアンの別荘へ旅した。伯爵夫人は一月の末にノーアンへ來たが、リストが着いたのは五月の初めであつた。リストは初めて再びパリーの聽衆の前に現れ、彼等の好意に答へるために、色々なことで時を過してゐたのであつた。たとへ人々がダグー事件に於ける彼の態度をだん／＼何となく和やかな眼をも

つて見始めたとしても、彼に對する氣分はまだく害はれたままであり、そして「藝術家について」といふ論説を彼が書いたといふことは、多くの人の氣分を尙一層害してしまつた。パリー人の以前の偶像であつたりリストが、舞臺に現れた時には、彼を迎へるために拍手する者は一人もゐなかつた。成る程會堂一杯に集つて來た人々はみんな以前彼に驚歎した人々であつたが、満場死の如き靜寂があつただけだつた。彼は唯ベルリオツの作品を自分でピアノに編曲したものを弾いた。初めは彼は聴衆の拍手を得るために努力しなければならなかつたが、最後になるとやはり物凄い感激が起つて來た。彼の演奏の熱に對しては、不平も亦逆ひ續けることが出来なかつた。此の名譽ある勝利に續いて、リストは暫らくパリーに留らうと決心した。彼は非常に多くの演奏會で演奏した。最も注目すべき、最も價値あるものは四回の室内樂の夕であつた。彼は、之等を友人のウルハンとチェリスト、アレキサンダー・バッタと共に催し、殆んど全部ベートーヴェンの曲を演奏した。アベネックの主催せる音樂學校のベートーヴェン演奏會は非常に大きな功績を收めた。之こそ本當の藝術的行爲であつた。此等の演奏會が如何に眞面目に、如何に熱心に準備されたかといふことは、前稽古に出席したルグーヴェが一八三七年の「ガゼット・ドゥ・ミュジカル」紙上に載せた次の報告がよく之を示してゐる。「何といふ良心的な、そして辛抱強い勉強振りだらう！ 何と熱心に各人は仕事に没頭してゐることだらう！ お互に忠告し合ひ、教へられては中止し修業した。自分を主張しようといふ虚榮も慾望もなく、皆夫々の持場に從つた。吾々はリストの練習を五回聽いた。技術的には少しもむづかしくはないが、表現で満足しなかつた箇所は繰返した。そして吾々は一つの音の明暗の度とか、弾き出されたアクセントの多少とかが如何に作品全體の上に、新しい精神的な斜光を投げ得るものであるかといふことを知つた。」然し聴衆はまるでベートーヴェンの精神で満ち充ちてゐる此の催し物を鑑賞するまでには成熟してゐなかつたといふことを、リスト自身次のやうに記してゐる。

る。

「音樂學校の管絃樂團が、ベートーヴェンの交響曲を公衆の前で演奏することを二三年來計畫してゐたといふことを人々はよく知つてゐる。今日こそベートーヴェンの聲價が一般に認められるのだ。無學文盲の徒は彼の巨大な名を楯にとり、そして敢て頭を擡げようとする無力の嫉妬は、彼の名を同時代者達に對して棍棒の如く利用する。音樂學校の考へ方を是正するために、私は此の冬（時間の不足から非常に不完全な風にしか出来なかつたのは残念だが）數回の音樂會を殆んどベートーヴェンの二重奏曲、三重奏曲、五重奏曲の演奏に限つて行つた。私は殆んど完全に人々を退屈さすものと思つてゐたが、然しまた誰も退屈を口に出して云ふ人がゐないといふことも充分確信してゐた。そして實際は、非常に素晴らしい感激が爆發したので、最後の或る夜會で、此の幻想がプログラムの變更によつて少しも妨げられないとすれば、聴衆は天才に服従するものであると信じて、曲目を變更しても容易に分らないだらうと思つた。聴衆に通告せずに、ピクシスの三重奏曲がベートーヴェンの或る曲の代りに演奏された。喝采の聲は前よりも激しくひどかつた。然しベートーヴェンの三重奏曲が、元々ピクシスを演奏するやうに決められた箇所で行はれた時には、人々は冷やかな、つまらなささうな、退屈さうな氣色だつた。無理もない。我慢し切れなかつた人々は、ピクシスの作品を、たつた今聞いた大家の作品の後で演奏するといふ彼等の期待を、卒直に、無難にも表はしたのである。」

リストの大成功はタールベルグ派の人々を心中穩かならぬものとした。タールベルグは丁度パリーにゐなかつたので、彼等は此のピアニストに對抗して演奏さすことは出来なかつたから、馬鹿げたことにも作曲家としてのタールベルグを賞揚し始め、そしてリストよりも更に優れてゐるものと主張し始めた。かうしてつまらない彼等のおしやべり

に疲らされたリストはどうしても何とかせねばならないと思つた。彼は熱心に研究して、タールベルグの作品が無價値であることに確信を得た後「タールベルグの大幻想曲、作品二十二番、第一と第二のカプリス、作品十五番と十九番の批評」といふ論説を「ガゼット・ミュージカル」誌の一八三七年一月號の第二冊目に發表し、その中で彼は忌憚なく獨自の見解を披瀝した。此の論評は爆彈のやうに響いた。彼にとつては自分の藝術的努力の表現であつたものが、大衆に對しては個人的な嫉妬のやうに見えた。戦ひは明らかに勃發した。此處にタールベルグ派あり！ 此處にリスト派あり！ タールベルグ自身がパリに現れた時に戦ひは頂點に達してゐた。そしてフェティスは長い論説の中で、リストを猛烈に論駁し、リストに最も下劣な個人的な動機をなすりつけ、そして次のやうに結んでゐる。

「君は君の睡眠を妨害する藝術家に對して、何か或る新しいもの、鞏固なるもの、確定的なるものを提示したと信じてゐる。だが君は誤つてゐる。君は大藝術家であり、君の才能は驚く程である。そして種々の困難を征服する技倆は比べるものもない程だ。君が他の人を乗り越えて行つたもの、及び出来る以上の事を實行して行つたといふ事を、前からチャンと系統立てて考へてゐたのだ。が然し系統立つた考へに捉はれたまゝで何も考へてゐないのだ。そしてそれは個々のものの中で形を變へてゐるに過ぎず、新しい考へは君の演奏の驚異に對して、決して獨創的な、そして個性的性格を與へてゐない！ 君は完成され、そして最早行ふべき何物も持たない或る流派の亜流であつて、君は或る新しい流派の男ではない。タールベルグこそ斯かる人なのだ！ これこそ君達二人の間の完全なる違ひである。」
之がベルリオツの「リストこそ未來のピアニストである！」といふ言葉に對する應酬であつた。此の二人の中どちらが眞の音楽についての正しい理解を當時示してゐたかといふことは、時間が之を決定した。そしてフェティスによつて、あれ程賞揚されたタールベルグの作曲は、十年前から埃りだらけになつて忘れ去られてしまつた。

リストは此の戦ひの個人的なやり方に痛く憤激して、「フェティス教授に對して」と題する公開文の中で、彼獨自の理論を縦横に論じながら、最も首肯すべき論駁をした。フェティスはこのためにガゼット・ミュージカルの發行者に宛てて書簡を書き、美辭麗句を以て、窮境を脱しようとし、而も寛大なる態度を表はさうとした。之は唯下劣な假裝した退却に過ぎなかつた。斯くして此の論戦は終つた。リストは此の事件について、少し後になつて既に引用されたゾルジュ・サンドへの旅の手紙の中で、次のやうな偏見なき敘述を行つてゐる。

「最初の中は最も簡單であつた世間の事件が——説明のおかげで——公衆にとつて最も理解し難きものとなり、そして——釋明のおかげで——私にとつて最も煩はしき、最も憤激に價することとなりました。そこで私は貴女に此の経過をお話し致します。二三の人は好んで之をタールベルグとの私の『競争』だと云つてゐました。昨年冬の初めにゲンフを後にした時には私はタールベルグ氏を知らなかつたといふことを御存じですね。彼の名聲は仄かに私達の耳に入つて来るだけでした。私がパリへ到着した際には、今までの凡ゆるピアニストの影を潜めさせ、藝術の更新者と呼ばれるに價し、而も演奏家としても、作曲家としても私達みんながどうしてもついて行かねばならないやうな、全然新しい道を進んで行く或るピアニストの不思議な出現については、全樂界の誰一人として口にしてはゐませんでした。私はどんな小さな噂にも耳を傾け、進歩的なものであれば、どんなことにも同感して喜んでとびついて行つたことを御存じの貴女は、同時代のピアニスト達が私の希望に燃ゆる心に對してどんな大きな衝撃を與へたかといふことを貴女は御分りです。唯一つどうも分らなかつたのは、なぜこんなにも性急に、この新しい救世主の豫言者達が凡ゆる今までのものを忘却し破棄したかといふことです。天才の人を私に啓示してくれる筈の此の新しい深い作品を遂にはどうしても自分で知らうといふ氣になつたのです。私はそれを良心的に勉強する爲に、午前中を全部

つぶしてしまいました。此の研究の結果は、私の期待とは正反對のものでした。私は唯斯かる平凡な、何も云ふべき所のないやうな作品が、一般にあれ程の反響を呼び起したといふことに啞然として眼を瞠ただけでした。此の事から私は此の作曲家の演奏的才能が普通のものではあるまいと結論したのです。他の色々な場合に発表したと全く同じ意見「ガゼット・ミュージカル」誌に発表しましたが、それは私が骨折つて吟味したピアノ作曲に關して良かれ悪しかれ、兎も角も私の意見といふものを発表したのです。此の場合私は、輿論を支配しようとか、貶さうとかいふやうなことは毛頭考へませんでした。私は敢て斯かる不遜な權利を欲しようといふやうな事はまるで考へていませんでしたが、然し若し云つても差支へなければ、私は次のやうな事は信じてゐました。之が若し新しい流派だとすれば、私は新しい流派の人ではないといふこと、若しタールベルグ氏がこの新しい方向を取つてゐるとすれば、同じ道を歩むことは私には適してゐないやうに感じられたこと、そして最後に彼の考への中には、どん／＼發展して行かうとする未來の萌芽を少しも發見することが出来ないといふことを思つたのです。私は嫌々ながら、云はゞ競馬場で同じ賞金が賭けられてゐる二人の競争者のやうに、私達を對立させることのみを問題としてゐた大衆に迫られて、以上のやうなことを發表したのです。多くの人が持つて生れてゐる感情、即ち不公平に對して逆つて行つたり誤謬とか虚偽の信仰とかの一寸したことに對してさへ躍起となつて反對するやうな感情が、恐らく又私に筆をとらせたり、私の意見を公表させたりするやうにさせたのです。私達が後になつてこの作曲家に出逢つた時、私は公衆に告げたと同じやうなことをその人に話したものです。私は喜んで彼の立派な演奏の才能を聲高々と褒めることが出来るやうになりました。そして彼は他の誰よりも、私の態度の忠實さと自由さとをよく理解してゐました。此の時は人々は私達の事を『和解した人』と云ひました。が此の命題は程なく、馬鹿げた而も廻りくどいことですが、私達が前云はれたと同様に『仇

同士』といふことに變へられてしまひました。——實際は私達の間には敵對もなかつたし、和解もなかつたのです。或る藝術家が公衆の判斷するところによつて自分を凌駕してゐると思はれる他の藝術家に對して、或る價値を認めた場合、彼等は仇同士なのでせうか。彼等が藝術以外の問題で評價され、重んぜられた場合、彼等は一體和解したのでせうか。私はタールベルグについて一行一行と書いて行く中に、ほんとに或る種の憤怒を豫感しました。がそれにも拘らず私はこれまでの色々なことによつて醜惡な嫉妬の嫌疑は解かれるものと信じました。眞理は常に主張され得るもの、主張すべきものと思ひました。そして藝術家はどんな事情があらうと、極く些細なことについて、伶俐な打算によつて、自分の信念を個人的な興味から裏切るやうなことをしてはいけないと思ひました。經驗は私の蒙を啓いてくれましたが、私の苦惱を救つてはくれませんでした。」

此の論戰と共に、事件も騒々しく進展して行つた。タールベルグはバリーに入つて來(一八三七年二月)、三月十二日に彼の第一回の演奏會をマチネーで催すといふことを發表した。リストは此の日に彼の夜會を催すことに決してゐたのであつたが、此のことはまるで挑戦のやうに思はれた。競争と思はれる凡ゆる態度を避けようと思つてゐたリストは自分の演奏會を約一週間延期した。タールベルグは「イタリア劇場」で演奏し、彼が初めて弾いた「モーゼの幻想曲」によつて大勝利を収めた。リストは自分の演奏會のために、從來一度も行はれなかつた大歌劇場を選んだ。彼はウェーバーの協奏曲を演奏したが、非常に具合の悪いことには、管絃樂が彼と聽衆との間に位置し、その爲に、音が管絃樂のバックカナルを通り抜けて行かねばならなかつたので、非常に弱められ——ほんの半分位の成果しか収めなかつた。今や人々は二人の藝術家の演奏を並べて聞いたのであつた。だが論争は今尙少しも収まらず、決定さへもしなかつた。公然と云はれることは、兩人の甚だしい相違だけであつた。その當時の或る人が、その相違を次のや

うに記してゐる。

「外面的な態度からして完全に違つて居り、リストはピアノに恍惚となつてゐるといふ風だつた。長い髪は絶えず背の方へ投げやられ、唇をピク／＼と動かし、變化に富む表情を持つて、にこやかに威容を保ちつゝ聴衆の方を見てゐた。彼は喜劇役者ではなかつたのだが、どこことなくさうしたものを明かに持つてゐた。——彼は正にハンガリア人であり、同時にマジヤール人であり、デプシーでもあつた。タールベルグはこれと全く異つてゐた。彼は優雅そのものであつた。會場へ出て來るのに少しの音も立てず、勿體ぶつた何となく冷やかな挨拶をして、彼は樂器の前に坐つた。曲を弾き始めると、彼はほんの少しのデェスチュアも示さなかつた！ 少しの表情も！ 聴衆の方は一寸も見なかつた！ 嵐のやうな喝采が起つた時も、唯慇懃に頭を下げるだけだつた。彼の内面的な興奮は、彼の兩耳や頸や顔を深紅に染めた激しい紅潮によつて表はされた。リストは演奏を始めると直ぐ靈感に打たれたやうに見えた。——彼は最初の音符に、既に彼の才能を惜しげもなく表はした。恰も放蕩者がその金を惜しげもなく使ふやうに。斯くして全作品を通じて彼は倦むことなく、情熱を演奏の最後まで持ち續け、彼の情熱の絢爛たる輝きを方々へ投げ散らしたのであつた。タールベルグはゆつくりと、落着いて、平坦と弾き始めた。段々と彼は拍子を速め、演奏は力を持つて來た。そして連續的に上つて行くクレツセンドに續いて、彼は荒れ狂ふフィナーレを持つて來、何時も聴衆を恍惚として感激せしめる力強い最後の効果に備へてゐた。リストが演奏するや、會場の空氣は電氣の火花に充たされたかの如くなり、人々は雷鳴の轟きを聴き、稻妻の閃きを見たのだ！ タールベルグの場合は、恰も人々は光明と歡喜の大海に漂つてゐるかのやうだつた！」

此の時突然、二人の競争者が同じ夜、同じ演奏會に出演するといふ意外な報せが起つて來た。ベルヂオジョソ侯爵

夫人は輿論の此の争ひをうまく利用して、彼女のサロンでイタリア亡命者の爲に慈善演奏會を三月三十一日（一八三七年）に行はうと計畫した。其處でタールベルグは彼のニオーベの幻想曲を弾くことになつた。入場券は四十フランであつたのに全部満員であつた。二人はいづれも歡呼を以て迎へられ、終りには激しい喝采を送られた。此處でも人は、どちらが勝利を得たのかはつきり決めることは出来なかつた。或る貴婦人の「タールベルグは世界一のピアニストだ」といふ洒落は當時パリーに流行したものだつた。「そしてリストは」といふ恐ろしい間に對して、彼女はまごついて「リスト！ 彼が唯、一人者です」と叫んだ。二人の藝術家の騎士のやうな態度が、相對して、人々に見られるのは非常に面白いことだつた。だが意見の争ひは尙パリーで、その年中荒れ狂ひ續けた。時間が此の種の凡ゆる問題の絶對的な審判者であるものだが、時間が初めて、此の場合にも解決を齎したのである。そして他の場合に、二人が或る演奏會で共演してゐるのが見られた。ベルヂオジョソ侯爵夫人によつて再び刺戟が捲き起され、最初よりも更に大きなセンセーションを惹き起した。當時の最も著名な六人のピアニスト、即ちショパン、チェルニー、ヘンリー・ヘルツ、リスト、ピクシスとタールベルグが此の慈善演奏會に共演し、而も、夫々——六臺のグランドピアノで舞臺を飾つて——態々此の目的の爲に作曲されたベルリーニの「清教徒行進曲」による變奏曲を演奏した。リストは彼の變奏曲に、なほ序奏と終曲を附け加へて弾き、彼の味のある弾き方によつてチェルニーとショパン以外の共演者達を皆喜ばせて了つた。此の共同作品には「ヘクサメロン」といふ題がつけられた。リストは後になつても獨りで屢々それを彼の演奏會で弾いたり、又は管絃樂伴奏づきのピアノ曲や二臺のピアノだけでも編曲した。此の機會にリストはまた彼の敬愛せる恩師チェルニーに再會し、チェルニーのパリー滞在中は自分の所に泊つて貰ふといふ喜びを持つたのであつた。

一八三七年の初めに、個人的にはリストと充分に知り合ひでなかつたローベルト・シューマンの二三のピアノ作品に關するリストの論説が發表されてゐる。そしてそれは偶然にシューマンの手に入り、彼を激しく惹きつけたのだつた。リストは此の場合にも、以前タールベルグに關して採つた態度を採つた。そしてリストは自分が同輩の作品の價値を認めれば直ぐ、公平な態度でその作品をどんなに喜んで世の中に送り出す氣であつたかといふことを示してゐる。演奏會シーズンが終るや、リストは五月の初めに、ジョルジュ・サンドをノースアンに訪れようとパリを後にした。彼を當分の間疲れ果てさせてしまつた——例へばレントは、リストが或るマチネで、まるで失神したやうになつて椅子から轉び落ちたと云つてゐる——パリーでの數週間の骨身をけづるやうな活動の後に、友達の集ひの中で、休養と娯樂の數箇月を送ることが出来るといふので、彼は浮き浮きして居つた。「私は六箇月の間、つまりらぬ闘争と無駄な努力の生活を送りました。」と彼はサンドに書き送つた。更に續けてゐる。「私は自ら進んで私の藝術家としての心を社交的生活の軋轢に曝して來ました。私は毎日々々、毎時間々々、聴衆と藝術家との間に尙永い間存在すると思はれる凡ゆる永久の誤解の息苦しい拷問に耐へ忍んで來ました。人々は度々私に向つてかう云ひました。少年時代から私の才能や希望以上の成功を私は收めたのだから、私は他の誰よりも、斯かる歎きを公言する權利がないのだと。然し非常に悲しいことには、嵐のやうな喝采といふものは眞理と美に對する本當の感情よりも、むしろ何とも云へない偶然の流行とか、偉大な名前と或る精力的な演奏を尊重することから起つて來るのだといふことが分つたのです。」

ノースアンに於ける滞在中の上品な生活のことを、リストは或る旅の便りの中で「それは豊かな内面的な生活であつた。そしてその時を信心深く自分の心の中に封じ込んでゐたのだ。」とピクテに書き送つてゐる。彼等の仕事や娯樂といふのは、自然哲學者或は深い思索の詩人、即ちモンテーニュか、ダンテか、ホフマンか、シェクスピアを讀むこと

であり、或は人目の少ないアンドルの岸邊をいつまでも歩き廻ることであつた。然し夜の暮と共に宵の静けさが深く垂れ込めて來ると、彼等は庭の露臺に出て來て、恍惚となつて自然の偉大さの前に我を忘れるのであつた。それから仕事が始まつた。ジョルジュ・サンドは、彼女の小説「モープラ」を書き、リストはゲンフで既に立てられてゐた彼の計畫、即ちベートーヴェンの交響曲をピアノに編曲するといふ計畫を此處で實行し始めた。「ほんとのことを云へば此の仕事は確かに骨の折れるものでした。だが、私は正しいにしろ、正しくないにしろ、その仕事に従來行はれてゐる凡ゆる同種のものに比べて、優つてゐると云はないまでも、非常に異つてゐると思ひます。私は此の版には餘分のこととせうが、綿密な指使ひをつけようと思つてゐます。そして種々な樂器の名前をつけることによつて、確かに多くの人々に満足と與へるだらうと思つてゐます。」と彼はブライトコップ・ウント・ヘルテルに書き送つてゐる。またシューベルトの歌曲のピアノ編曲、その中の「魔王」を彼はノースアンで始めた。かうした眞面目な仕事と同時に、愉快な有頂天騒ぎが折々行はれた。リストは、既に引用されたピクテへの手紙の中で、特に、サンドが厄介な訪問客を追ひ拂つたといふやうな面白い挿話を、目に見えるやうに記してゐる。此のやうにノースアンでの此の仲間は和氣藹々としたものであり、それはパリーから度々訪問して來る人々によつて時々數がふやされた。そしてジョルジュ・サンドとマリイの如く、またジョルジュ・サンドとリストの如く相反する性格の人が何も危険なく緊密に相並んで行くやうなことはそれからはもうなかつたのである。激しい嵐を孕んだ雲が、時折地平線上に現れたこともあつたが、それはリストの洗煉された社交家的な態度を以てのみ拂ひのけることが出來たのである。常軌を逸したやうな生れながらのサンドの氣質、後を顧みない彼女の野生的な率直さとマリイの性格は、はつきりと相對するものであつた。簡単に云へば、親密な仲は度々脅されたかのやうであつた。それどころか一時的ではあつたが争論さへ起つた。リストと伯爵

夫人が一八三七年七月の末に、常々待望されてゐたイタリア旅行を始めるため、ノースアンを後にした時に、みんなは平和と友愛を保ちつゝ別れて行つたとは云ふものゝ、親密な関係は亂されて了つてゐた。彼等の間の文通が今や段々と稀になり、形式的になり、ジョルジュ・サンドは以前は何時も「ミニヨンさん」とか「マリーさん」と書いたのに今では何時も「伯爵夫人様」と書いたといふやうな表面的なことにも、此の事は現れてゐる。リストもジョルジュ・サンドの氣質には心から嫌悪を感じてゐた。

「彼女は蝶々をモチ竿で捉へ、そしてボール箱の中へ芳はしい香りの花と青草と一緒に閉ぢ込めて、それを手馴つけることを喜んでゐた。——これが戀愛期であつた。次に彼女はそれに針を突き挿して、死の苦しみにバタ／＼させたのである。——これが何時も彼女から出て来る別離であつた。その次に彼女は自分の『對象』を解剖した。そしてそれを彼女の小説の主人公の集積の中へ漬物にした。彼女に後を顧みさせなかつた心の、斯かる實に野心的な利用のために、結局天才的な私のこの女の友達を私は嫌ひになつてしまつた。……藝術上のことについては、私のノースアンに於ける暫らくの滞在は非常に興味あるものであつた。……だが、私はそこでは副へ役として振舞つただけであつた。」

三、イタリア旅行（一八三七年——一八三九年）

イタリアの季節はまだ餘りよくなかつたので、途中度々寄り道して行つた。最初のそして最も永い滞在地はリヨンであつた。此處ではリストは彼の以前の弟子であつたモンゴルフィール夫人を訪ねてそこに滞在した。此處では丁度

怖るべき窮乏が勞働者の家族を脅かしてゐた。何時も救済といふことを心掛けてゐたリストは、直ちに此の困窮を緩和してやらうと思つた。此の時うまい具合に、彼はモンゴルフィール夫人の所で、彼のドン・サンショの歌手であつた有名なテナー、アドルフ・ヌールリーに出會つた。二人は一緒に、貧しい人々の爲に數回の演奏會を催し、數千フランを収めた。リストは此の時のことを、彼らしい特色のある言葉で、ピクテに書き送つてゐる。

「私は何時も、凡ゆる機會に慈善演奏會を行ふといふことを一つの義務として來ました。私が共演した演奏會の後晝間だけは、發起人が祝辭を述べたり、収益のことをあれこれと云つたりするときには、私は頭を下げてそこから逃げるのでした。一家族への分け前としては、おなか一杯食べるだけの一ポンドのパンにも、暖を取るための一束の薪にもならないであらうと思ひました！」

モンゴルフィール家のサロンに於てもリストはその演奏によつて列席者を恍惚とさせた。彼は専ら最近完成されたシューベルトからの編曲ものを弾き、此の創作をヌールリーに知らしめた。程なく此の人はシューベルトの音樂の優れた解釋者となつた。然し歌曲の歌詞は尙フランス語に翻譯されてゐなかつたので、リストが書いてゐるやうに、「シューベルトとゲーテを全く崇高なもの、深刻なものとして理解してゐた」ダグー伯爵夫人は、「魔王」を翻譯した。實に彼女の最初の文筆家としての事業であつた此の仕事は、リストが或る旅行記の中に原文を公けにした時、非常な喝采を博した。シューベルトの夕べの聴衆の中には、青年詩人ルイ・ドゥ・ロンショウもゐた。彼は此の美しい心豊かな伯爵夫人に感激して、彼女を自分のミューズに選んだ。此の人こそ、後に彼女の愛人となり、彼女の死後彼女を讚美する歌を傳記の形で出版したその人なのである。彼はリストとも友情を結び、二人を伴つてシャンペリーまでずつと旅行を共にした。此の地から彼等は多くの小旅行をした。第一はラマルティエヌの所へであつた。彼はサオーヌ河

に面したサン・ポアンの彼の綺麗な別荘に滞在してゐた。そしてリストは既にパリーでの以前の知遇によつて彼と知己になつて居り、彼を尊敬してゐたのであつた。今一つの小旅行は、山の中腹にある有名な修道院「グラント・シャルトルーズ」へと計畫された。ゲンフを通り、シンプロン峠を越えて、ミラノにまで續けられた旅のこともや、彼を非常に不愉快にさせた到着の晩のスカラ座で上演された歌劇の敘述のやうな見聞記を、リストはドゥ・ロンショウへ宛てた興味ある旅の便りの中に記してゐる。ミラノで彼は楽譜出版業者リコルデイを訪れた。彼はリコルデイの所へ行つて、ピアノに坐り即興的に演奏し出した。リコルデイはとうとう「何とまあ、こゝにゐるのがリストでなかつたら、悪魔に違ひない！」といふ言葉を發した。——だがミラノは炎暑の絶頂だつたので、リストは、街を見物するのは後に延ばさうと思つた。そして急にコモ湖へ出發した。其處のベルラジオに、彼はメルツイ別荘を借りて、一八三八年二月まで伯爵夫人とそこに住んでゐた。

廣々とした湖の畔りでの滞在は、マリーとの同棲の中でリストの最も幸福な時代であり、非常に靜かな、そして平和な幸福に充ちた素晴らしい愛の牧歌であつた。そしてお互は完全に熱中し合つてゐた。毎日のやうに、彼等は繪のやうに美しい近郊へと散策をしたり、度々ボートを漕いだりした。殊に宵闇の迫る頃には水の上を漕ぎ廻り、彼等を取巻く自然の驚異に眺め入つてゐた。或ひは別荘の美しい庭園で「ダンテの崇高な詩」を讀み合つたりした。リストの「ファンタジア・クワジ・ソナタ」(ダンテの言葉に基く)はまたその成立を斯かる時期に負ふものである。自然は彼等に生活上の色々な厭なことも忘れさせてくれた。リストは此の時代のことを自分でロンショウに宛てた旅の便りの中に歌ふやうにかう記してゐる。

「若し貴方が、二人の愛人の物語るに好都合な場所をお望みでしたら、コモ湖の邊りを選んだらいいでせう。此處

では愛を息づく周囲の青い空氣の中に胸は廣々となり、凡ゆる感覺はそこに居ることの歡喜の中に封じ込まれます。

……人間は、親しき自然の懷の中で自由に呼吸してゐます！ 人間と自然との調和ある交感は、巨大な關係によつて離れるやうなことはありません。人間は思ふ存分愛してよいのだし、凡てを忘れて、思ひのまゝに享樂してよろしいのです！ といふのは、自分が共通な幸福の一部を受け取る權利だけを要求してゐるといふやうに思はれるからです。さうです、友達よ、貴方の夢見る魂の前をある女の姿が通り過ぎ、その天空から出て來るやうな魅力がすこしも感覺を誘惑する標しとならない時、否、魂を祈りの方へとせき立たせるやうな時！ そして貴方が誠ある正しい心で、自然の側に一人の若者を眺める時に、斯ういふ時にこそ、貴方は此のやうな姿を感銘深き愛の物語の中に織りなし、そして自然に對して『コモ湖の邊りにて』といふ題を與へるでせう。」

此の牧歌の中の幸福の最高頂に立つものは、彼にとつて一八三七年のクリスマスの前夜に一人の娘の生れたことだつた。そして此の娘は此の素晴らしい日の想ひ出のためにと、コジマといふ名が付けられた。此の娘は父に非常によく似て居り、ブランディヌとは全く反對に、母の特別なお氣に入りとなつた。

此の隱遁生活から生れた作品には次のやうなものがある。十二の大協奏練習曲、之はチェルニーに捧げられた。グラン・ギアロップ・クロマティック、此の成立はリストが偶然にも指使ひの中に半音階的な進行をやつたことに負ふものである。次にフゲノッテン、幻想曲、之はダグーに捧げられて居り、彼女は終生彼の作品の中で最もよいものだと思つてゐた。

世界とか社會の繁忙からの此の幸福な隱退は、餘りにも急に亂されて了つた。リコルデイはリストがミラノに現はれて輝かしい仕事をするを約束してゐた。そして冬の初めに新聞記事によつて、イタリア、特にミラノの音楽界



に「幸福なるイタリアは世界第一のピアニストを滞めることになつた」といふことをはつきりと書いた。此の瞬間からベルラジオに於ける安息は、當然、終りを告げることになつた。リストは程なくミラノの演奏會の繁忙な仕事に引き込まれた。そこで先づ彼はベルラジオからだん／＼と旅を進めて行つたが、二月の初めに、ミラノに移り住んだ。だが伯爵夫人は子供達とベルラジオに滞つた。

リストは自分でミラノに於て、三回「音樂アカデミー」を行ひ、その他の無数の演奏會に共演した。云ふまでもなく、或ひは恐らく歌の國であるイタリアでは、器樂は從來、從屬的な地位を占めてゐたのにも拘はらず、リストは非常なる喝采を博した。實に彼には聴衆を勿體ぶつた音樂で感激さすといふことは不可能であつた。全くその通りで、嘗て彼の練習曲を弾かうとした時に、或る紳士が一階正面席から彼に呼びかけた。「僕は氣晴らしをするために劇場に來たのだ。勉強を聞くために來たのではない。」だがリストは或る逃げ路を見出した。彼は即興演奏のための主題を聴衆に自由に選ばせた。そして聴衆の娯樂と興味を起すことに成功した。

彼が斯く聴衆の中にあつて「娯樂藝術家」としての勝利を謳歌してゐた時に、此の事を彼は苦々しくも次のやうにラムネーに書き送つてゐる。「私は無慈悲にも、此の道化師とかサロンを樂しませるものとかいふ職業にまで墮落するのでせうか？」彼は非公開の集ひ、特にロッシーニの夜會に於て眞に音樂を理解することの尊重すべきことを知つた。程なく彼はロッシーニに最も正しく讚嘆されるやうになり、その夜會のための音樂やテルの序曲をピアノに編曲した。ミラノでは、彼はまたパリーの友人、フェルディナンド・ヒルラーやピクシスと再會し、彼等はリストの演奏會に共演した。

ロッシーニの他には、リストは主に、ジュリー・サモイロフ伯爵夫人とクララ・マッフェイ伯爵夫人と交際した。彼

女等のサロンは一八三四年から八六年にかけては、正にイタリアに於ける精神生活の中心をなしてゐた。學者、藝術家、宗教家、凡てがそこに現れ、外國人達も彼等に儀禮的訪問を忽せにする人は一人もゐなかつた。その中の著名な人には、バルザック、ジョルジュ・サンド、ダニエル・シュテルンがゐた。後になつてからはマンツォーニとヴェルディとが中心となつた。リストとダグー伯爵夫人は、毎日のやうにその客となり、リストはその家の記念帳の中に次のやうに書いてゐる。

「此處には少しの言葉で多くの思想を表はす人々がある。かと思へば又多くの言葉によつて少しの考へしか表はせない人もある。これは丁度時計の二つの針のやうなものである、即ち一つは非常に速く動いて少ししか記さないが、また一つは自分の道をゆつくりと歩み、時間を記して行く。」

一八三八年三月十六日にリストは、秋のオーストリア皇帝フェルディナンド一世の戴冠式には歸つて來るといふことを約束して、ミラノを後にし、伯爵夫人とヴェニスに赴いた。此處で彼は二回の演奏會を催し、それ等は非常な熱狂を呼び起した。然しそれと同時に彼は此の詩情溢るゝ町の美しさを、樂しい藝術家の心を以て享受した。そしてその美しさから多くの藝術的刺戟を受け取つた。此の時或る新聞記事が彼の詩的な夢を滅茶々々にして了つた。ドナウ地方が猛烈な豪雨によつて氾濫した。そして無数の人々は宿なしとなつて了つた。救ひを求める叫びはハンガリアの國境を越えて入り込んで來た。此の時リストの中には、彼が十五の時よりフランスに生活し續けて以來忘れてしまつてゐた故郷を思ふ氣持が呼び醒まされた。「此の刺戟と感情によつて私には『祖國』といふ言葉の意味が明かになつた。私は突然過去の中へ移つて行つた。そして私の心の中には少年時代の想ひ出の寶物が純粹に、汚れを知らずに、再び現れ、雄大な風景が眼前にあり／＼と浮んで來た。これこそ巖を齧んで流れ落ちるドナウの流れであつた！こ

れこそ平和な家畜が自由に草を喰つてゐた廣々とした草原であつた！ これこそ素晴らしい實り豊かな沃野を持ち、あのやうにも高貴な息子達を産んだハンガリアであつた！ これこそ私の郷里なのだ！ そして貴方がたからは嘲笑されるかも知れないが、愛國心の發作から、私もまた、此の古い、力強い種族に屬して居るのだと今叫ぶのだ！ ……お、私の野生的な、遙か遠くにある祖國よ！ 私の知られざる友よ！ 私の廣々として大きな家庭よ！ お前の惱みの叫び聲は私を呼び返してくれた。そして最も深くその叫び聲に捉へられた。私があんなにも久しい間お前を忘れることが出来たといふことに恥しくて頭の垂れる思ひがする！

リストには躊躇といふやうなものは少しもなかつた。救済しなければならぬやうな場合には、彼は何時も即座に之を行つた。すぐさま彼はウィーンに旅立ち、そこで氾濫に苦しむ人々の爲に一回と、そしてまた自分の無収入の埋め合せの爲に、一回の演奏會を開かうと思つた。が二回の演奏會は十回となつてしまひ、それ等は皆一ヶ月の間に行はれた。「此の事は自分のありつたけの力を盡したのだから、疲勞困憊するに違ひなかつた。といふのは、夫々の演奏會で三度もアンコールされたのだが、聴衆の共感私を非常に力強く、ずつと守つてくれたので、私は少しも疲勞を感じなかつた。此のやうに親切な教養ある聴き手としての態度の前に、私は理解して貰へないといふ危険を決して冒すやうなことはなかつた。ためらふところなく、私はベートーヴェン、ウエーバー、フムメル、モシエレス、ショパンの非常にしつかりした曲、ベルリオツの幻想交響曲からの斷片、スカルラッティとヘンデルのフーゲ、そして最後に可愛らしい練習曲、『スカラ座』の聴衆が非常に驚歎した、熱愛された自作を演奏することが出来た。」

リストがウィーンに現れたのは、彼が十二歳の時、父に連れられて此の地を去つて以來、初めてのことだつた。彼が來るといふ報せは既に感激の嵐を捲き起してゐた。彼は一八三八年四月九日にウィーンに入り、そして十一日に最

初の演奏會を開いた。クララ・ウィークは此のことについて日記に書いてゐる。「私達はリストを聞いた。彼はほんとにどんな演奏家とも比べることは出来ない。——彼は唯一の存在だ。——彼は恐怖と驚きとを惹き起し、而も愛想のよい藝術家である。ピアノを弾く彼の姿は何とも名狀しがたい。——獨創的な演奏家だ。——彼の情熱は限界を知らず、旋律を引きちぎつても美の感情を殆んど傷けるやうなことはない。彼の精神は偉大である。彼の精神に接しては吾々は次のやうに云ふことが出来る。即ち彼の藝術は彼の生命である！」と。

熱狂は舞臺に現れる度毎に昂まつて行つた。歡呼と莊麗の様を、無味乾燥な言葉で表はすことは不可能である。當時の新聞記事には次のやうな文章が載つてゐるが、それは今日の吾々には寓話のやうに響く出來事としか思へない。「諸君よ、非常に瘠せた、肩幅の狭い、すらつとした人、顔から首にかけて垂れかゝつてゐる髪、非常に知的な活動的な、蒼白い、そして非常に人を惹きつける顔立ち、極度に生々とした性格、談話をする時には眼はいろ／＼な表情に輝き、好意ある眼差しをして、そしてひどいなまりのある口調で話す、こんな人を思つて見よ。——そしてリストは普段そんな風なのだ。が彼が樂器に坐ると、耳の後ろへ髪をかきやり、眼差しはじつと坐り、眼は洞となり、上體は動かなくなり、そして彼を把へたり、彼が進んで惹き起さうとしてゐるその時々々の氣分に從つて、頭と顔の表情が動いたり反映したりするのだつた。そして此のことは何時でもうまく行つてゐる。然し此の幻想的な外貌は、燒き付くやうな焰と巨大な岩石のやうな音が噴出されるとでも云つてよいやうな、内面的な火山を覆うてゐるやうなものであつて、それはどう見たつて人を悦ばせるやうな、氣輕なものではなく、恐しく大きな音を立てるものである。そこで吾々は彼の手に就いて考へるのでもなければ、彼の機械的な(技術)について考へるのでもなく、また樂器について考へるのでもない。専ら彼は吾々の魂を豫期しない印象に魅了してしまふ。そして吾々の心を、凡ゆる俗物を

眩惑してしまふやうな、彼の高さにまで力づくで引つぱつて行くのである。換言すれば吾々は此の演奏を唯聴くだけのことを行ななければならない。彼は到着した日にフィッシュホフ教授のところまで自分の作曲した二三の練習曲を弾いた。それから彼は『初見』でシューマンの『幻想曲』を弾いたが、その弾き方は非常に完全なばかりでなく、非常に感動的なものだったので、私は決してこれを忘れるやうなことはないであらう。次に彼は急いで、彼がイタリアでは未だ見たこともなかつたメンデルスゾーンのオルガンの爲の前奏曲とフーゲのやうな作曲に手をかけた。そしてこれをピアノだけでペダルを全部使つて、特に強めたり、音を重複させたりして、全く人間業とも思へぬ程に演奏した。また彼が大部分はまだ知らなかつたショパンの『練習曲』も同様に演奏した。實に——彼は吾々の最も深い本性を揺り動かしたのだ。」

一八三八年の一般音楽新聞の第二十號は、そのいふところに依れば「非常なる報告」を必要とするものだから、「ウインに於けるリスト」といふ特別な論説を掲げた。その中に次のやうなことが書かれてゐる。「ピアノリストの中で此の現象が到来したといふことは實に全く豫期されざるものを惹き起した。そして彼の滞在の繼續は彼の演奏を聴かうといふ望み、彼を讚嘆しようといふ望みを心残りなく充すためには、餘りにも短いものとなつてしまつた。斯くして實に毎日のやうに、否毎時間のやうに、最も身分の高い貴族や最も名譽ある家庭の招待會が次から次へと押し寄せて煩雜を極めた。そして謙遜な控へ目の藝術家、そして人に好感を與へる丁寧な態度が更にみんなから氣に入られ、誰の申出でも少しも拒絶しなかつた藝術家リストは、公けの人の前に出る時には全く息も出来ない位だつた。それだからこそ、時々人から離れて逃げるやうなことが必要になつたのだらう。皇室の出入りの樂譜商トビアス・ハスリンガーの面白い夜會で、粒よりの仲間ばかりの藝術愛好家の前で、リストはマイゼーダーとメルクと共にベートーヴェ

ンの變ロ長調の三重奏曲をいやが上にも美しく演奏した。——原譜に忠實なること下僕のやうに、然し繪畫の金箔のやうに永遠の魅力をだん／＼と浮び出させる枠の中に落ちついて。實にそれは比べもののない程の三位一體であつた。完全に人を魅了してしまひ、そしてみんなの顔つきの中には明らかに斯かる精神的な和音の中に、有名な音の創造を嘗て一度も聴いたことはない！といふやうな様子が讀み取られた。」

サフィールは遂に「フモリスト」の中で次のやうに描寫することを思ひついた。「リストは規則や形式や法則は何も知つてゐない。彼は皆それらを自分で創り出してゐるのだ！演奏會の後では彼は恰も戰場で勝ち誇れる英雄のやうに立つてゐる。打ち從へられたピアノは彼の廻りに横はり、引きちぎられた多くの絃は戦利品のやうに、聴き手を沈黙せしめた降服の旗のやうにひら／＼と翻へつてゐる。そして明るい大空から起つた雷雨の後のやうに、雷鳴と稲妻のあとの花のやうな雨や、美しい雪や淡い光の虹が交つてゐるかのやうに思はれた。——そして彼れプロメトイスは各々の音符から一つの形を創り出し、魔術師は鍵盤から液體を造り出し、彼の愛人たるピアノを或る時には穩かに或る時には暴虐に取り扱ふ妖精とか愛すべき狂暴さは、戀人を愛撫したり、戀人にすねて見たり、また彼女を罵り廻つたり、どなりつけたりする。そしてまただん／＼と彼女は内へ内へと愛の焰を燃え立たせ、歡呼の聲をはり上げて絡みついて来て、彼女と共に急速に大氣を通つて消え去つて了ふ。彼は頭を垂れて立つてゐる。そして悲しさうに、不思議な笑みをたゞへて、聴衆に驚歎を惹き起したことに感謝してゐるかのやうに椅子に凭れかゝつてゐる。」

リストがウインに現れたのは、丁度そこでアドルフ・ヘンセルト、ダールベルグ、クララ・ウィーク等々の優れたピアノリストの連中が演奏した時であつたことを思ひ合せて見ると、斯かる稱讚の聲は益々重要なものである。

皇后や皇太后や、此の時よりずつとリストの忠實な歸依者であつた藝術に對する感受性の豊かな大公妃ソフィーも

リストの第二回の演奏會には出席した。そして彼の演奏はマリアンヌ皇后が彼の音樂を宮廷演奏會で親しく聞きたいといふ御希望を御洩しになつた程の感銘を呼び起した。だが之に反して、彼の人格とか、彼の評判に關しては種々の疑惑が起されて來た。人々は警察の意見を乞はうといふことに決つた。

警保局長のところでのルドウイヒ大公の質問に關しては、次の日に既に希望通りの文書が與へられた。此の文書は次のやうに凡そ珍奇なものである。

「謹んで申し上げます。忝くも昨晚、殿下が吾々のところに來臨されたといふ最も光榮ある布告と共に、昨日から私に分ち與へられた最高の命令にお答へする爲に、私は此の地に到着したピアニスト、リストに關する詳細なる調べを行ふといふことに努力致しました。それは斯ういふことから起つてゐるのです。ハンガリア生れの此の藝術家はまだ子供の時分に、嘗てエステルハツィ侯の官吏であつた父と共にパリーにやつて來て、其處で暫くして彼は父を失ひ、悪い社交界に於て色々と面倒を見てくれるよき指導者がなかつたのです。でも此の悪い社交界は彼の政治的並に道徳的性格を害ふやうなことはありませんでした。斯うしてゐる中に、彼はデドゥヴァン夫人と親密に交はるやうになりました。此の夫人は、ジョルジュ・サンドといふペンネームの下に、悪しき感覺を以て書かれた作品の女流作家として、また惡評あるラムネイ神父の熱心なる讚仰者として、そしてまたラムネイの編輯してゐる雜誌『ル・モンド』の執筆者として知られてゐる人です。確かに此の夫人との關係は、然し全く好意を以て考へてくれる人の場合でも、リストの名聲を傷つけてゐました。然しリスト自身注目的となつた神父や彼の一派の政治的陰謀へ關與してゐるものとは少しも思はれませんでした。同じやうに彼は、外國に居る其の他の革命家達と親密に交つても疑はれなかつたのです。そして彼がフランスにゐる政治的亡命者や追放者のために催された演奏會で數回協演した時に、彼はパリーに

居る大抵の藝術家達と共に第一級といふことになりました。彼は最近パリーで既婚のダグー伯爵夫人と親密な關係を結ぶやうになりました。ダグー伯爵夫人といふのは、彼が昨年の秋にロムバルディへ赴いた時に、その地に數週間生活するために、彼の後を追ひ、そして今でもロムバルディに居ります。彼がミラノに滞在してゐた時にも、彼がウィーンに居つた短い間にも、リストは彼の政治的意志や態度を不利な或ひは更に疑はしい立場に置き得るやうな素振り少しも見えませんでした。寧ろ彼は實に己惚れの、輕率な男、當世流の若いフランス人達の空想的な流儀を氣取つた男、然しそれでも、彼の藝術家としての價値は兎も角、善良な、人目に立たない若者のやうでありました。若し當面の最高の命令が發せられた動機について私の最も忠實なる意見を附加することが許されますならば、私は畏敬の念を以て次のやうな事を云はねばならないと思つて居ります。即ち自分の眞の勝れた藝術の才能を吾が皇后陛下の御前に披露するといふ榮譽は、彼に對して政治的疑念が少しも存せず、そしてハンガリアで氾濫のため不幸となつた人々の爲に、彼が從來既に非常な成果を收めてゐた演奏會を開かうといふ賞讃すべき考へがもとで、今回ウィーンに滞在するやうになりました時に、いやが上にもピアニスト、リストに與へらるべきだと思ひます。更に帝室樂團員といふ稱號を彼に賜ふといふことが問題となつたとすれば、私は上司の意見に従ひまして、少くとも當分は斯かる提案に賛成する氣持はないでせう。

ウィーン、一八三八年四月二十五日

セドルニツキー

リストはそれから宮廷に召され、五月十七日にシュューベルトの「小夜曲」の編曲したものと、自作の「華麗な圓舞曲」を彈いて滿場を恍惚たらしめた。彼の慈善演奏會で、彼によつて收められた、そしてペスト市を救ふ爲に送られ

た義捐金は全額約二萬五千グルデンを算した。そして此の彼の立派な手本は人々を刺戟して熱心に模倣する所となつたので、澤山の寄附金が集まつて來た。然し彼は藝術上の成果と共に、人間としても亦多くの友人を得た。彼に敬意を表する爲に度々饗宴が催された。云ひかへれば、それは間斷なき勝利であつた。リストは又メッテルニヒ侯爵にも紹介された。彼が訪問した時には侯爵夫人しか居なかつた。そして或る貴婦人が訪問して來てゐた。彼女はそれだに彼を招き入れた。案内されて彼は席についた。それから侯爵夫人は、彼に餘り注意せず、尙も其の貴婦人と語り續けてゐた。突然彼女は、彼の方へ向きなほつて、「貴方はイタリアでうまい仕事をなさいましたか」と訊ねた。「私は音楽を作つてゐます。何も仕事はしてゐません。侯爵夫人！」と彼は面白くなささうに答へた。そして會談はそれで終つてしまつた。侯爵夫人はその貴婦人と語り續け、リストは數分の後に立ち上り、そして出て行つた。メッテルニヒ侯爵は彼の演奏會に出席し、彼に會へなかつたことを残念がり、そして微かな笑みさへこめて、自分の妻が輕率な言葉を吐いたことに許しを求めて云つた。「だが貴方は女とはどんなものか、よく御存じでせう。」二人は友人となつて別れた。

ヴェニスに引籠つてゐたダグー伯爵夫人が突然病氣だといふ報せが彼の所に届いた。彼はすぐ旅立つことに決心し次の朝までにかかる告別の大宴會を友人達に預けて、急に五月二十七日早朝郵便車に乗つた。ウィーンへの最初の驛場ノイドルフで嬉しい不意の出來事が彼を待つてゐた。といふのは此處では、内緒で先に來てゐたあの晩の告別會の仲間が皆待つてゐたのである。無數の肖像を畫いてリストを不朽ならしめた畫家クリューフェルは、此の素晴らしい光景を彼の「旅裝せるリスト」といふ素描に描いた。居合せた人々は皆描かれ、そして此の肖像畫は同年にウィーンの宮廷で石版として出版された。

リストがヴェニスに到着した時には、伯爵夫人の容態はすでに恢復してゐた。戶外には夏の氣配が近づいてゐたので、彼等はラグネンの町を後にして、ルガノへ移住した。彼等は此處に其の夏中ずつと滞在した。だが此處での生活振りにはベルラジオに於けるやうな隱遁的なものではなく、上流の仲間と繁く交際し、此の上品な療養地で多くの人々と知り合ひになつた。數日間リストはモデナ侯爵の招待に應じて、パドヴァにある侯爵のカタジヨ別荘にお伴をした。此のカタジヨ別荘の滞在は、丁度その時オーストリア皇室の御家族の方々が其處を訪問されて留つて居られたので、リストにとつて特別に名聲を得る機會となつた。彼はミラノへの今一つの小さい旅行を企てねばならなかつた。此處では新聞紙上で大論戰が突發した。リストは毎日のやうに脅迫狀や匿名の書狀を受け取つた。事の起りは斯うであつた。即ちリストがガゼット・ミュージカルに宛てた「ラ・スカラ」と題する旅の便りの中で、イタリア音楽生活とスカラ座での演劇上演に關する彼の考へを率直に、而も曲飾するところなく述べたといふのである。彼は後年此の論說に續いて「イタリアに於ける音楽の狀況について」といふのを書いたのであるが、此の論說はミラノで煩さい評判を惹き起した。ミラノの人々は彼に、見下げ果てた恩知らず、最もひどい侮辱といふ罰を被せた。そこでリストはミラノ新聞へ書簡を寄せて辯明し、ミラノの社交界を侮辱するといふことは、決して彼の意圖したところではなかつたといふこと、そして必要な説明を要求する人には誰にでも説明する積りであるといふことを述べた。此の目的のために、彼は或る日ただ一人ミラノへ行つたが、誰一人として彼に會ひに來なかつた。匿名の脅迫者は突然元氣を失つて了つた。然しリストがその年の秋、約束通りにミラノで演奏會を開かうとした時に、演奏會を首尾よく行ふといふことは彼には出來なかつた。ミラノの貧しい人々の爲の慈善演奏會さへも不成功に終つて了つた。人々は依然として彼を怨み、傷つた國民的感情はそんなに容易に元へ歸らなかつた。

十月の中頃リストはルガノ伯爵夫人と共に其の地を後にして、他の町々へ向つて行つた。今では彼は公けの席に出ることは殆んど稀であつた。彼等は豊富に蓄へられてゐるイタリアの美を享受するために、藝術の町から藝術の町へと巡禮のやうな旅をした。如何に敏感に、リストの感覺が藝術品の影響を受けたかといふこと、そして又如何に神聖なる、眞剣なる氣持で、彼が藝術品に近寄つて行つたかといふことは、ラファエロの聖チエチリエについて、ポロニアからドルティエグに宛てた彼の便りが雄辯に物語つてゐる。一八三九年の一月初めに、彼等は憧れの目的地ローマに着いた。そこで彼等は聖トリニタ・デイ・モンティ寺院の近くのプリフィカチオーネ街で、大分長い間滞在して居つた。藝術に没頭して過した間に、リストはあんなにも永い間努力してゐた藝術家として、又人間としての最後の内面的な成熟を獲得した。少年時代にあのやうに色々彼の流に流れ込み、そして彼の教養に對する熱心の中に、熱情的に捉へられた精神生活の激流によつて掻き亂された彼の觀方といふものは、今や此の諸大家の作品の影響の下に、全く解決されて來た。此處に於て彼は、永い間悩み續けて來た藝術上の疑問の解決を獲た。凡ゆる藝術、特に音楽と造型藝術との統一といふ彼の理想は、此處に於て確信を得るに至つた。「愛すべき此の地方の美しさは、私には最も純粹な、最も崇高な形に見えた。啞然とした私の目には藝術は全く素晴らしいものに見え、そして私の目には藝術は全く普遍性を持つたもの、全く統一あるものとして現れて來た。日に日に私の中には、感ずることと思案することによつて、創作者の精神の中には、凡ゆる作品の潜伏せる親近性があるといふ意識が固定して來た。ラファエロとミケランジェロは私を救けてモーツアルトとベートーヴェンを理解させてくれた。」

當時作られたリストの二つのピアノ曲、ラファエロの繪によるスポサリチオとミケランジェロのメデイケールの彫像による十一のペンセロソは斯かる藝術觀や考へを具體化したものである。尤も此の二つのピアノ曲は後年に、偉大な

る音畫「異教徒の戦」等の中に加へられた。此の放浪の時代に出來たリストのピアノ曲の凡ては、後に旅のアルバム（後には又「巡禮の曆」と改題された）といふ三巻の曲集として出版された。無數に企てられた登山の成果として出來上つたスキス滞在中の作曲が、大抵偉大なる自然の印象に刺戟されてゐるものとするならば、イタリア時代の諸作は精神的印象（或る藝術作品を讀むとか、見るとかして）に刺戟されたものであつた。彼の藝術的發展のために價値ある教導者及び指導者となつたのは、ローマのフランス・アカデミーの校長である有名なジャン・オーギュスト・ドメニコ・アングレ（一七八一—一八六七）であつた。此の人は熱心なる音楽愛好者であり、眞に心からリストを待遇した。彼の専門的な指導の下に、リストは此の永遠の都ローマの藝術の寶物を知り、そして理解することを習つた。リストは自分で次のやうに云つた。「私の生涯の中で最も幸福なものに數へ擧げたアングレの友情は、凡ゆる藝術相互の關係に對する密接な意義や、藝術の理解及び藝術と學問の中へ深く深く入り込まうといふ私の激しい願ひをも私の中に固定さすのに少からず役立つものである。」アングレは、傍ら優れたヴァイオリニストであつた。そして二人は、夕方永い間眞正の室内樂をやることがあつた。當時の人々や新聞は夢中になつて、次のやうなことを騒ぎ立てたものだつた。即ち、リストは自分の藝術を等閑に附し、何の計畫もなくイタリアを放浪して歩いてゐる。おまけにイタリアは音樂的に少しの寄與もしないといふ。ところが彼は他の如何なる土地が寄與し得たと思はれるよりも多くのものを、この地で、彼の藝術的圓熟のために受取つたのである。彼の内面的發展は問題の外に置いて、時間を決して無駄には過されなかつたのである。勿論後になつて初めて出版された多くの作曲は、丁度此の時に作られたのであつた。演奏法の分野に於ても、彼は大膽な革新を試みて成功したのであつた。ロシアのウイールホルスキー伯爵は、ポリー宮殿で彼の爲に演奏會の仕度をし、その演奏會で彼は初めて他の藝術家や他の樂器と共に演奏せず、全然獨

りてプログラムを埋めた。彼は首尾よく自分の心を込めた獨創的な演奏によつて、かういふ企てには何時もあるやうな單調といふ危険を克服した。此の「音樂の退屈な獨白」の中で、彼は戯れに思ひついて、ルドウィヒ十四世を氣取り、聴衆に「演奏會、これこそ私なのです」と呼びかけようと思つた。此のやうなことを彼はその後屢々繰返し、一八四一年にもパリで行つて成功したのであつた。そこで彼は、他の藝術家と共に統一ある型に嵌つたプログラムをやらねばならない時に何時も起つて来る困難からのがれることが出来たのである。リストは一月の終りにもフランキロンとピクシスとの演奏會に共演し、そしてアルヂェンティノ劇場で演奏會を開いた。

ローマで生活する間に、彼は私的關係や將來の計畫に關しても、はつきりと決心するに至つた。主に子供達の爲に計畫されてゐたトルコ旅行は斷念された。更に一八三九年五月九日に男の子が生れ、ダニエルと名づけられた。「嫌やなこと、フランツは又もや本當に憂鬱になりました。今や三人の子供の父であるといふ考へが彼を不機嫌にしてゐるやうです。」と伯爵夫人はジョルジュ・サンドに云つてゐる。(一八三九年六月九日)。だが此の事實は、本當は

「不機嫌」の理由でなかつたらしい。恐らく彼は今や自分の私生活の關係によつて、自分の活動や藝術家としての發展が負擔をばはされるといふ羈絆を、毎日のやうに敏感に感じてゐたのであつた。伯爵夫人の性格は、彼女に與へられた課題を解決することが出来るやうに形成されてゐなかつた。創作する藝術家の配偶者たることは、實に女に望み得る最も困難な要求である。彼女は夫の氣分や意向を完全に理解して、少しの利己的な目的をも持たず、身も心も獻げるといふことが必要なのである。一步誤れば、獻身的な愛さへも、羈絆のやうに、妨害のやうに感ぜられるものである。自己の課題を完全に克服し、自己の課題から完全に解放された天才といふものは、此のやうな場合、正に吾吾が望み得るやうな人間ではなくして、自分の創作衝動に耽り、人間的感動を知らない者なのである。ダグー伯爵夫

人はかうした役割を果すまでには成長してゐなかつたので、彼女に對しては少しの非難も向けることは出来ない。リストは既に永い間、此の矛盾に悩み續けて來た。だが今尚彼は、彼女との不規則な關係によつて自分の將來の計畫が妨げられるといふ羽目にあつた。解決の道は彼には二つしかなかつた。即ち、本當に心の底から彼が嫌つてゐた名手の道を歩み續けるか、或ひは何處かで管絃樂の先頭に立つて實地の音樂家として、大家の作品を自分の感覺の中に生かして行く他に道はなかつた。指揮者として生きるといふことは、自分の母や三人の子供の面倒を見たり、伯爵夫人の多くの出費を儲ける事は出来ないで、大きな責任となつて彼に押し迫つて來た。彼は根本的に考へて見て、シラーやゲーテの住んだ所として以前から彼が共感を持ち續けたワイマールの樂長の地位を志望するといふことから眼を轉じて、フムメル之死(一八三七年)といふことに思ひついた。そして彼は次の冬の初めに、殆んど全歐に跨るやうな名手としての大旅行を始めようと決心した。だが其の場合伯爵夫人や子供達を絶えず同伴することは出来なかつた。そして彼女等の定住地をパリーの母の所に定め、自分も暫らくそこに居ることにしようとした。リストは決して伯爵夫人と別れる計畫をしたのではなかつた。彼は今や初めて自分に負はされた義務を常に忘れるやうなことはなかつた。そして自分の子供の母に何が負はされてゐたかをよく知つてゐた。此の強制されたもの以外に、もう一つ藝術上のが彼の決心を促した。即ち彼はピアノの演奏を出來得る限りの完全な程度に發展させるといふ目前に置かれた課題を完全に解決してゐなかつたので、今尚それよりも大きな音樂上の課題に目を向けるといふ時期ではないと思つてゐたのである。「ピアノを見捨てることを語るのは、丁度私に悲しみの日の來ることを示すやうに、そして又、私の生涯の最初の部分全部を照し出し、私と同體となつて生長したその光明を私から奪ふやうに、私にとつては大變なことです。私のピアノは私のものだ。水夫にとつて彼の帆走船があるやうに——もつとそれ以上だ! 實にそ

れは今までは私の自我であり、私の言葉であり、私の生命であつたのです。貴方は今、私が劇場に於て管絃樂に於て、輝かしい、響き渡るやうな成功を得んが爲に、それを見捨てるといふことを望むことが出来ますか。おゝいやいや！此のやうな二つのものが若し充分に良く調和してしまつたと假定しても、出来ることは何でも、そして今日私達が到達し得る凡てのものを了つてから、初めてピアノ演奏の勉強と發展を放棄しようと堅く決心してゐたのです。が、この決心は依然として解決しないまゝで残るでせう。」

夏も耐になつた頃、リストは家族と共に、此の永遠の都ローマを後にし、どうしても湯治を必要とした伯爵夫人の爲に、ルツカに赴いた。此處では彼は休養と落付きを見出すことが出来さうであつた。だが彼が有名であつた爲に、非常に急速に引張り込まれた湯治場の賑かな生活の爲に、彼の望みは不可能となつた。その時或る日彼は新聞で、ボンに於けるベートルヴェンの記念碑の建立の爲の資金が非常に僅かしか集まらず、例へば大パリは恥しいことだが、總計四百二十四フランしか集めなかつたといふ記事を読んだ。既に永い間資金調達に努力して居つたリストは、高い藝術家としての誇りを以て憤激し、「凡ての人にとつて何といふ恥辱だ」と彼はベルリオツに宛てて書いた。「吾々にとつて何といふ痛手だらう！かういふ事態は終らねばならない。確かに君は僕に賛成してゐる。こんな苦しい鳴物入りで集めたけちな施しを、吾々がベートルヴェンの靈廟を建てる救けにはしたくないのだ！」彼はそれから記念碑建立委員會に、尙足りない分を彼獨特な方法で埋めようと思ふといふことを、そして彼が記念碑の創作者としてイタリヤ第一の彫刻家フロレンスのバルトリニを選び決めてしまつたと云ふことを唯一の條件として進言した。彼は自分の演奏會の収入で短時日の間にその全額に達し得ると思つた。この事はリストの偉大な精神の眞の行爲であつた。一寸前に氾濫に苦しむ人々の爲にしたやうに、今や又不滅の天才の靈魂に感謝の供物を齎すといつた場合には、

何の躊躇もしなかつた。「出来得る限り善い事をせよ。そして大衆が何をベチャ／＼喋らうと構ひやしない。」といふことが此處でも又彼の格言であつた。多くを語らず、然しなから迅速に行ふといふことは常に彼の慣はしであつた。

伯爵夫人の容態がよくなると直ちに、ルツカの高雅なマキシミアネの別荘から、小さな漁村サン・ロツソールへと逃れた。そして此處では孤獨の平安と、休養を見出すことが出来た。彼は伯爵夫人と海岸から二百歩そこ／＼の所にある小さな掘立小屋の中に住み、殆んど完全に孤獨の生活をした。此處で「彼はイタリヤの土地へ最後の別離の挨拶を捧げた。そしてもう一度最後に、神の愛に包まれた此の土地の何とも云へぬ美しさを享受した。」一八三九年十一月の中頃、彼等はイタリヤに別れを告げた。彼は演奏旅行を始めるためにウィーンに赴き、伯爵夫人は子供達とパリーのリストの母の所へと歸つて行つた。

名手時代 (一八三九年—一八四七年)

一、最初の凱旋 (一八三九年—一八四一年)

リストは一八三九年十一月十六日にウィーン入りをした。演奏會の入場券は既に數週間前に賣り切れた。緊張は又高度に達した。彼が到着した日、彼がケルントナートール劇場に現れた時には突發的な大歓迎を受けた。十一月十八日から十二月四日までにリストは六回のマチネーをやつたが、前年の勝利は尙一層の程度で繰返された。特にシネーベルトの魔王の編曲及びベートーヴェンの交響曲の或る樂章の編曲は感動的な共鳴を見出した。年老いたウィーン人は未だベートーヴェン自身が演奏したのを覚えてゐるのである。——さうしてゐる間に、リストは可成りひどい熱病に罹つたが、そのために神經が弛緩し、先づ演奏會を中止せねばならなかつた。再び恢復した時には、もうクリスマスが近づいてゐたが、この時まで彼はペスト市に行くといふ約束をしてゐた。未だ病床にあつた時、彼はハンガリアの友人レオ・フェステイクス伯爵に宛て、次のやうな手紙を書いた。「十二月の十八日か二十二日に出發して行きませんが、貴方は兎も角先づびつくりなさるでせう。私は幾分年をとつたし、大人になりました。貴方が去年私にお會ひ下さつた時よりも『藝術家として、もつと出來上つてゐる』と御感じになられるでせう。私はその間にイタリアで大

變勉強しましたから。再び故國に赴くことは何といふ喜びであり、何といふ幸福でせう。そして又、有難いことには異國の放浪生活に於て、私が随分と示して來たやうな斯かる高貴な強い同情に、今度は自分が取り巻かれてゐるのを見るのは何と嬉しい、幸福なこととせう。祖國に對する騎士的な、そして素晴らしい故國に對する感情は私の心の内に生々と残つてゐること、そして又私は今までの生活に於て遺憾ながら祖國に對して餘り示すことが出來なかつたとは云へ、如何に私が祖國を愛し、尊敬してゐたかといふこの感情は、少しも變つてゐないことを、貴方はよく御分りになるだらうと思ひます。」

早速公開されたこの手紙の効果が、ハンガリア人の興奮し易い心情に如何なる影響を及ぼしたかは、想像に餘りあるであらう。リストがウィーンの大洪水の爲に義捐演奏會を催した時、彼の名は矢の如く迅速に全ハンガリアに廣まつた。人々は殆ど全く忘れられたこの故國の子のことを喜びを以て想ひ出し、華々しい歓迎をしようとした。當時の訪問はダグー伯爵夫人の病氣の爲實現しなかつた。又もやイタリアの旅先からマッサールト宛の手紙が來、彼がイタリアで貧困な人々に對して寄せた數々の慈善行爲が有名になつたので、感激は益々強まつて行つた。彼がウィーンに來て、彼の到着が迫つたといふフェステイクス宛の博愛的に思はれる手紙が來た時、待ち焦れた氣持は最高度に昂められた。ウィーンにはペスト市からの派遣員が現れ、リストに市の華々しい招待状を持つて來た。リストはそれでウィーンの演奏を打ち切り、十二月十八日にプレスブルグへ旅立つた。話のやうなウィーンでの勝利も、彼を故國で待ち焦れてゐるのに比べれば、弱々しい前奏に過ぎないものであつた。彼は多數の群衆と國會の代表者の歓迎を受け、如何にも凱旋行列のやうにして町に入つた。リストはプレスブルグの古い、大きな舞踏會場で、三回の演奏を催したが、三回目は十二月二十日にカトリックの市民病院と新教の病院の爲に演奏したもので、純益五百二十六グルデンを

擧げた。嘗て九歳の少年の運命を決したこのプレスブルグに於て、彼は故國の土を再び踏んだ最初でもあつたのだ。一八三九年十二月二十四日に、彼はベスト市に入った。今や彼が此處に滞在した間になされたことは藝術史上唯一のことである。斯かる熱狂的な歓迎は、今までどんな公侯にもなされたことのないものであつた。人々は彼を如何にも國民の英雄のやうに盡きざる眞の感激を以て祝つた。リストはフェステイクス伯のところに泊つた。そして彼の爲に、非公開の招待演奏會を催した。晩餐の後、會場の翼扉が開かれると、唱歌隊がショーベルの詩にベスト市の歌劇樂長グレルが作曲した合唱曲を唱つたが、此の詩の最初はかうであつた。

我等月桂樹の飾りもて祝はん

こを汝は騎士の如く贏ち得たるぞ！

汝、偉大なる藝術家よ、高貴なる眞實なる

フランツ・リストよ、汝の國は汝に於て誇りあらん

ベスト市の有力な音樂團によつてなされた多くの演奏會が、引き続き行はれた。その爲數日經つてリストの演奏會が始まつた。彼の演奏の魅惑的な効果に、此處で尙一つの他の契機が加はつた。それは聴衆が彼の音樂から非常に國民的なものと感じたところのハンガリア風の親しげな國民的な旋律である。リストが多くの古典的樂曲の爲に、ハンガリアの旋律を、而も最後にラコツツイー行進曲を演奏した時に、感激は最早盡くるところを知らなかつた。この時からリストはハンガリアの音樂的天才となつた。リストが特にアントン・フォン・アウグスト男爵と本當の友人になつたが、その他のベスト市の貴族達全部が彼を或る日盛大な午餐會に招待した。大理石のリストの胸像の爲の集會が開かれた時、リストは之を拒絶して次のやうに云つた。「若し私の希望を述べさせていたゞくとすれば、段々にハン

ガリアに音樂學校を創立していただきたいと思ひます。そして皆様が私にこの學校の管理を御任せ下さるならば、祖國の爲に盡すことが出来るし、私の生涯の誇りでありませう。」と。一月十一日のリストの演奏會の収益が又直ちにこの考へを實現せんと、リストに決心させたのであるが、この考へは後に實行されることになつた。リストは彼の約束を忠實に履行した。彼は以上三回の演奏會以外に、ベスト市では五回の慈善大演奏會を開催した。即ち一月二日にはベスト音樂協會の爲、四日には國民劇場の爲、八日にはハンガリアのヴァイオリン演奏家の爲、九日にはオーフェンの盲學校の爲、十一日にはハンガリア音樂學校創立の爲に開催した。一月二日に彼が現れた時には、公けに何度も唱はれた歓迎カンタータを以て迎へられた。そしてこのカンタータの最後の和音が鳴り止んだ時には、堂内のどよめく喝采裡に金製の月桂冠を頭にかぶせられた。リストは人氣者となつた。彼が何處に現れても非常な尊敬を以て挨拶された。彼が劇場でフィデリオの上演を見てゐた時にも大變な歓迎を受けた。一月四日の國民劇場に於ける彼の演奏會では華々しい歓迎が最高潮に達した。こゝで最後の音が消えた時、六人のハンガリア貴族が國民的服裝をして壇上に現れ、國民の名に於て、寶石を一杯散りばめた榮譽ある劍を彼に手渡した。この事件に就て或る人々は當時、新聞や漫畫雜誌に笑ふべき事を書いた。そしてリストは「ルヴュー・ド・ドゥー・モンド」誌に手紙で反駁文を載せたけれども、この評判は永い間なかく納まらなかつた。このやうな惡評はハンガリアの國民性の惡意ある無理解と完全なる認識不足から由來したゞけであつたらしい。リストは彼の滞在中ハンガリアの國民服を着てゐたが、然し功勞者とか、貴族の標しである劍は下げなかつた。貴族の最高の譽れを表現する劍を、ハンガリアの爲に彼が貢獻したことに對する感激の標しとして授與されたことは何といふ自然のことではないか。リストがフェステイクス伯の手からこの贈物を受けとつた時、彼は震へる聲で彼の感謝を述べようとした。彼はフランス語で答へた。——彼はその時やつと話せ

る言葉でかう云つた。「私の愛する國の人々よ！……この劔こそは曾て祖國の守りとして強く振り廻されたものである。この劔は、今は弱々しい平和な手に置かれてゐる。それは一つの象徴ではないか？ 數々の戦ひによつて榮譽を贏ち得たハンガリアが、今や平和の友たる藝術や學問によつてこの名聲の新しき解釋をしようと云つてよいではないか？ 知識階級も勞働者も今日、貴い問題、高い使命を果したと云つてもよいではないか？ ハンガリア國家は斯かる榮譽に無關心であつてはゐられない。——國家の英雄の爲に、平和の天才の爲に、諸國民の先頭に立つといふことは正當なことである。」

此の誇らしい言葉の答へは、どよめく名聲を博し、その爲に凡ゆる誤解を取除かねばならないものであつた。演奏會の後、人々（約二萬の人々）は行列を組んで炬火を持つて市を練り歩き、リストの住んでゐる所まで彼を送つた。家に着いてからも、酷寒にも拘らず辛抱してゐる民衆の爲に、何度も何度も實際に顔を出さねばならなかつた。又次の日にはベスト市の名譽市民狀を、代表者がリストに持つて來た。そして侍従は皇帝からリストの爲に貴族の稱號を貰つてくれた。一月十二日に彼は別離の演奏會を催した。熱狂の中には間もなく、別れなければならぬ悲しみが混つてゐた。人々は彼の廻りに押し寄せ、彼の手に接吻をした。彼は滞在中ひっきりなしに請願者や忠告を求める者及び援助を求める者にとり巻かれた。彼は出来るだけ全部の人の云ふことを聞いてやつた。そして彼等の困窮を和らげてやらうとした。其他彼は數へ切れない程の御祝ひや社交に招待され、大御馳走に與かつた。最後の晩はベスト市の婦人連が舞踏會を催して彼を祝福した。遂に別れの時が來た。市の名士達や高位高官の人達は、數千の民衆と行列を作つて、ドナウの河岸まで彼を送つて行つた。彼は友人カシミール・エステルハツィー伯と一緒に、ラープを越えてブレズブルグに赴いたが、其處でリストは一週間この町の客として滞在した。此處で彼は一月二十六日に教會音樂協會

の爲に演奏したが、リストは後にこの協會の名譽會員になつてゐる。この演奏會では七百四十五フランの純益を擧げたが、彼はウィリアム・テルとオベロンの序曲を指揮した。これより先、ベストの音樂學校の爲の演奏會で初めてバトウタを公演したのであつた。

ウィーンに暫時滞在した後、リストはエーデンブルグに赴いたが、それは彼を幼少の頃見たばかりの此の町の人々がもう一度彼に會ひたいといふためであつた。此處で彼は二月の半ばに慈善演奏會を開いた。エーデンブルグも彼に名譽市民の稱號を與へた（一八四〇年二月二十四日）。こゝからライディングの生家に散策をした。人々は彼の意志に反してこの企てを洩してしまつた。そのため華々しい歓迎を受けることになつてしまつた。その日は家族的な祝ひとなつた。彼は少年時代に熱心に跪いてミサにあづかつた教會を訪れ、次いで兩親の家を訪れたが、此處には今農夫が住んでゐた。然し何も變つたところはなかつた。彼は心からこの土地の人々に接し、教會のために新しいオルガンを購入したり、貧民救濟の爲に二百グルデンの寄附をしたのであるが、この土地の人々から大なる祝福を受け乍ら彼は感激して故郷を去り、ウィーンに歸つて來た。このハンガリアの凱旋から得られた結果であり、今尙残つてゐるものは彼のハンガリア風作曲であつたが、その處女作は當時既に出來上つたものである。彼が詩人マルティン・ヴェーレスマルティンによつて「フランツ・リストへ」といふ長詩に表はれた希望を、ハンガリア人が新しい勝利を目指した單歌によつて満すことが出來なかつたとはいへ、彼は祖國に當時知れ渡つてゐた「ハンガリアの國民的旋律」に基づく價値ある音樂的な寶を贈つたのである。そして之は段々と世界的に有名になつた「ハンガリア狂詩曲」にまで擴大したものである。當時又ラコツツイー行進曲の編曲と、ハンガリア風の英雄行進曲が出來上つたが、この英雄行進曲を彼は後になつて彼の交響詩「ハンガリア」に改作してゐる。

ハンガリアから歸つたリストは、約束通りウィーンの演奏會を三晩で切り上げた。それから彼はブラーグに赴いたが、其處に彼は三月の半ばまで滞在し、ドレーズデンとライプツヒに向つた。進歩的なウィーンと違つて、ライプツヒの音樂生活は進歩的な考へを持つてゐたメンデルスゾーンとシューマンの二人の音樂家が住んでゐたにも拘らず、極めて保守的で一面的であつた。特にシューマンは「新音樂雜誌」を創設して、現代的傾向に一つの機關を設けてゐたので、その中で彼は其の時ライプツヒにリストを招待したことを述べさせた。リストはメンデルスゾーンとは既にバリー時代から親しくしてゐたが、シューマンとは親しく會つたことは未だなかつた。シューマンの作品をリストは早くから高く買つてゐた。そしてリストは作曲家を親しく知ることなくして、既に一八三七年に彼の感激を公けに發表してゐた。シューマンはハ長調幻想曲を獻じて之に酬いた。リストはドレーズデンとライプツヒで交る交る演奏會を催した。二つの町で各々三回演奏會を開いた。ドレーズデンでは普通の大成功を収めたが、ライプツヒの事情は違つてゐた。三月十五日のドレーズデンでの第一回演奏會にはシューマンが出席し、此處で兩藝術家は初めて親しく對面することになつた。この演奏會には、當時技術の最高に位してゐたシュレーダー・デヴリエントが共演した。そしてシューマンは、この「莊嚴なる鑑賞」に關して感激的批判を書いた。三月十七日にはリストは次いでライプツヒの聴衆の前に現れた。リストは彼の旅行先でどこでもさうであつたやうに、新聞社に無料入場券を出すことをしなかつたために惹き起した悪意ある新聞記事や、法外に高い入場料や、又は「ライプツヒが受けるべき榮譽」について述べたところのうまくな新聞廣告によつて、初めから既に非常に控へ目な聴衆は、前以てひどく先入觀を植ゑつけられてゐた。リストが壇上に現れた時、誰も拍手を以て迎へる者はなかつた。否、それどころか、嘲弄の聲を發する者さへあつたのだ。彼は第一の曲目として「田園交響曲」を編曲したものを演奏したが、それは失敗であつた。

大膽な樂曲である「ニオベ幻想曲」と彼の「ガロップ・クロマティック」で初めて普通の喝采を博した。それでも新聞は依然として惡評を載せた。シューマンは一八四〇年の三月十八日に彼の許嫁クララに宛て、かう手紙を書いてゐる。「私はリストとまる一日一緒だつた。昨日彼は私に『もう二十年も昔からの知り合ひのやうな氣がする』と云つたが、私にもさういふ氣がする。私共はもうお互に本當に無作法だ。それは彼がウィーンといふ處で全く氣儘にうちやらかしに育つた爲だと思ふ。彼は而も何と素晴らしく演奏することだらう。大膽に、狂暴に、又柔軟に、高雅に、——これを私は今皆書いたのだ。然しクララよ、斯うした世界は最早私のものではないのだ。これは彼のものだと思ふ。お前さんがやつてゐる藝術、この美しい感情を私は然し彼の素晴らしさのために棄て去るものではない。——そして幾らか金ピカ物が其處にはあるのだ。而も餘り澤山これがあり過ぎるかも知れない。——そして三月二十二日の手紙には又かう書いてゐる。「リストは謂はゞ非常に貴族的に染まつて此處へやつて來たのだ。そして何時も化粧部屋や伯爵夫人連や皇女達がゐないのを嘆いてゐる。これは私を大變面白くなくしたものだ。そこで私は彼に、此處は私共の貴族があるのだ。即ち百五十の本屋と五十の出版者と三十の雜誌社があるのだ。これを考へねばならぬと云つてやつた。ところが彼は笑つて、此處の風習などにはどうしても目をくれなかつた。それだからこそ凡ての新聞雜誌等から今ひどく當られてゐるのだ。私のこの貴族と云ふ概念が彼に氣づいたらしいので、つまり人々が彼を罵倒した二日前から、彼は非常によくなつたのだ。リストは毎日々々力強くなつて行くやうに私には思はれる。今日の午前にも、彼はヘルテルで演奏をしたが、私共は震へて喝采したのだ。」

次の日に彼のライプツヒでの第二回目の演奏會が開かれる筈だつたが、リストは怒つて拒絶してしまつた。此の事についてシューマンはクララに三月二十一日附の手紙でかう書いてゐる。「こんなことは本に書いてはなるまいが、

私はお前さんにこのゴタ／＼を全部こゝに述べねばなるまい。第二回の演奏會に彼は未だ行つてゐなかつた。そして床の中に入つてゐたかつたのだ。二時間前になつて、彼は病氣だといふことを知らせた。彼が疲勞してゐたといふことは私もよく分つてゐる。だが其他にこれは一つの政略的な病氣でもあつたのだ。私は彼を一日中寝かして置いたのはよかつたと思ふ。私その他にはメンデルスゾーンとヒルラーとロイスが彼のところに行つただけだ。彼は演奏會で、今まで見たこともないやうなヘルテルの樂器で演奏したといふことをお前さんは信じられますか。こんなに氣に入つたことはない。彼の十本の立派な指は何と云つても素晴らしいものだ。」

メンデルスゾーンは今や彼の友を助けて、この氣分を轉換させようとした。「彼に榮譽を與へ、如何なる藝術であるかを聴衆に認めさせるために、メンデルスゾーンは巧い考へをめぐらした。彼はリストのために明晩ゲワントハウスで管絃樂と一緒に大演奏會をすることにした。そしてこれには少數の人々が招待され、メンデルスゾーンの二三の序曲、シューベルトの交響曲及びバハの三重協奏曲（メンデルスゾーン、リスト及びヒルラー）を演奏するといふことになつたのだ。」（クララに宛てたローベルトの手紙）

リストはこの時、彼の個性とシューベルトの魔王の演奏とによつて、集まつた凡ての人の心を奪つた。そして三月二十四日の彼の第二回目の演奏會では人々の氣分の變動が明らかに感ぜられた。彼は第一番にウェーバーの協奏曲を以て、間もなく完全な勝利を獲得した。魔王とルチアの幻想曲は熱狂を捲き起した。シューマンは三月二十五日にこの事に就てこんなことを述べてゐる。「この頃はすつかり晝も夜も御馳走づくめで、音樂とシャンペン、伯爵と美しい婦人以外に何もものもなかつた。つまり彼は私共の生活をひつくり返したのだ。私共は彼を何處までも愛するのだ。そして昨日彼はまた演奏會を開いた。これは神のやうな演奏ぶりだつた。そして大喝采は名狀し難いものであつた。」

がみ／＼云ふお喋り屋が出て来て、やつとこれを靜めたやうな始末だつた。」

この親切な接待によつて嬉しくなり、リストは間もなくゲワントハウスの管絃樂員達のために、第三回目の演奏會を開かうと宣言した。彼は一日前にドレーズデンで市の貧民のために第三回目の演奏會を開いた後、三月三十日にライプツヒで演奏をしたが、その時には唯彼の友人メンデルスゾーン（ニ短調協奏曲）、シューマン（假面舞踏會）及びヒルラー（練習曲）の作曲と、最後に「ヘクサメロン」だけを演奏した。この晩にはシューマンと呼ばれてクララがベルリンからやつて來た。彼女は三月三十日の日記にこんなことを書いてゐる。「彼の談は精神と生命に充ちてゐる。だが彼は又なか／＼面白いところがある。人々は之をどうしても忘れることは出來ない。彼は非常に寛ろいで話をするので、これを誰でも感じないわけには行かない。然し私は彼のところに永く居ることは出來なかつた。不安、動搖、大變な活潑さ、これらが凡て人をすつかり紡ぎ盡してしまふのですもの。」

次の日リストは旅立つた。新聞はどこまでも彼の勝利に嫌がらせを書いた。特に當時一般に最も重要な音樂雜誌であつた「一般音樂新聞」は最もひどく彼を攻撃した。シューマンの雜誌は未だ讀者の範圍が狭かつたので、彼の輝かしい記事はこの攻撃を効果的に押し潰す程のものではなかつた。多くの國外の新聞に於ても、リストのライプツヒでの演奏會に對しては非常にうまくない記事が載せられた。その大部分はクララ・シューマンの父であるフリードリッヒ・ウィークの筆になるものであつた。ウィークは周知の如く、彼の娘とシューマンの關係を遠ざけようとしてゐた。そしてウィークをウィーンの頃から知つてゐたリストは、ウィークの敵となつてしまつた。と云ふのはリストはこの事件に關して何處までも彼の友人シューマンの味方となつたからである。リストはワヅリエフスキーに宛て、次のやうな手紙を書いてゐる。「ライプツヒに私が初めて滞在した後、ウィークも躊躇することなく、私に充分に復讐した。」

そして彼は私に對する怒りを多くの新聞に書いて氣を晴らした。」と。このやうなライブチツヒのベックメッサーの叫びは將來に對して尙も宿命的な結果となつたものである。だがリストがメンデルスゾーンの家庭で過した楽しい時を想ひ起して、彼はその後間もなくメンデルスゾーンの六つの歌曲の編曲をその妻チェチリエに獻じたのであつた。

ライブチツヒからリストは眞直ぐにパリに赴いたが、そこには親しい關係の人々が居たので、彼の滞在を長引かせた。ダグー伯爵夫人は重い病氣に罹つてゐた。ジョルジュ・サンドが書いてゐるやうに、彼女はひどく身體が衰弱してゐたので、肺病になるのではないかと人々は恐れてゐた。だが間もなく恢復した。この頃リストは伯爵夫人を其の家族の者、特に彼女の兄弟であるドゥ・フラヴィニー伯爵と和解させることが出来た。そして彼女をしてもう一度社交界の地位に就かせるやうにすることが出来た。彼は當時は公開の席で演奏するやうなことはなかつたが、二回エラールの處に招待された客の前で演奏した。ベルリオーツはジュルナル・デ・デバ紙に次のやうなことを書いてゐる。「ピアノリストの王者が現れた！　こんどは残念にも若しパリが彼に敬意を表することが出来ないとしても、世界の藝術の都パリが音楽祭を以て歓迎する榮譽が、將來は彼に與へられるであらう。その時は王者のやうな待遇を受けるだらう。そして誰も入場無料で彼の音楽が聞けるだらう。」一八四〇年四月のこの短いパリ滞在は、その他或る不意の出来事によつて後々に對して高い意義を獲得したのであつた。此處でリストは初めて、リヒャルト・ワーグナーに會つたのであるが、この人を彼は世界に宣傳するやうになつたのである。

當時未だ有名でなかつたこの若い音楽家は、どんな事でもよいから仕事をして、何とかパリで活路を開かうとしてゐた。彼の友人ラウベに元氣づけられて、彼は有名な藝術家リストのホテルを訪れ、彼の助けを求めようとした。自叙傳の中でワーグナーは二人が初めて會つたことを次のやうに記述してゐる。「丁度朝まだ早い頃であつた。私は

部屋へ通された。すると先づサロンには二三の知らない人々がゐた。そこへ暫くして後、リストも不斷着を着たまま、親しげに愛想よく現れて來た。ハンガリアの最後の旅行中のリストの體驗の事を話してゐたフランス語の會話に加はることが出来なかつたので、私は暫くの間、本當に退屈して話を聞いてゐた。するととうとうリストが親しげに『どんな御用で御出ですか』と尋ねてくれた。ラウベが紹介したのだが、彼はラウベを思ひ出せなかつたらしい。私が彼の間に答へることが出来た全部は、今まで全然私を知つてゐなかつたらしい彼と知り合ひになりたいといふことであつた。そして先づ彼の素晴らしく大きなマチネーの入場券をくれるから、忘れないやうに後で云つてくれと私に注意した。何か藝術上の話しをひき出したいといふ私の全部の試みは、リストがシェーベルトの『魔王』をも知つてゐるか、どうかといふ質問にあつた。この質問に對して否といふ返事を貰つたので、この可成り偏狭な試みは斥けられてしまひ、私のこの訪問は私の住所を教へただけで終つてしまつた。私の所には間もなく丁寧な手紙が添へられ、祕書のペロニによつて巨匠自身が獨りで演奏するエラール會館での演奏會の入場券がとゞけられたのだ。」

リストのやうに斯くも數へ切れない請願者に五月蠅く攻め立てられてゐた人を、こんなに違しく訪問したのだからこの會見は何も別に大した効果がなかつたのは云ふまでもないことである。ワーグナーは失望して侮辱されたと思つた。「私はリストをこの一回限りもう訪問しなかつた。そして——彼を知ることもなく、寧ろそれどころか完全に嫌惡の感を以て彼と知り合ひにならうとはせず——彼は私にとつては、根本から關係のない、そして敵對的なものとして見られる人の一人となつてしまつた。」

五月の初めにはリストはロンドンへ旅立つた。彼が父の死後、イギリスに再び出掛けたのは今度が初めてであつた。彼は其處で唯二回だけ演奏會を、即ち六月の九日と二十二日に「ピアノリサイタル」を開いたが、多くの演奏會では

他の人と共演した。その結果は非常なものであつた。何時もならばあんなに冷い形式ばつたイギリス人でも、リストの氣質に反對することは出来なかつた。五月十一日に彼がフィルハーモニー協會で演奏したウェーバーの協奏曲は、又もや大した人氣を惹き起した。リストが當時よく往來してゐたモシエレスは本當の感激を以て「リストの後には、吾々はピアノを閉ぢなければなるまい」と云つた。新聞は此處でも二つの陣に分れた。アテナエウム誌に於ける有名なロンドンの音楽文筆家ヘンリー・チャョーレイの理解ある、そして廣い眼で以て眺めた承認に對して、ライブチヒの一般音楽新聞にも優る非常に侮辱的なミニョジカル・ワールド紙の記事が對立した。ロンドンの演奏會生活の靜かな時を利用して——一八四〇年の七月と八月に——リストはブリュッセルを通つてライン河に沿ふ演奏旅行を企てた。ブリュッセルではリストは、彼のタールベルグとの戦ひの時以前には反對者であつたフェティスと落ち會つた。今やこの時以來フェティスはリストの演奏に感激して、彼の藝術の熱心な味方となつた。リストはそれから到る所で演奏して歩いたが、即ちバーデン・バーデン、ワイースバーデン、フランクフルト・アム・マイン、ボンを旅行した。——ボンでは彼はベートーヴェン協會の委員に、最初の金額として彼のイギリスでの収益から一萬フランを手渡した。——それからエムスにも旅行した（そこで彼はこの土地に保養の爲に、ロシアから來て逗留してゐた皇后の前で演奏し、ベルスブルグを訪問することを約束した）が、九月にまたロンドンに歸つた。ロンドンで彼は何回も演奏會を催した後、彼は十月にハムブルグへ旅行し、六回の演奏會を開いて此の全市を混亂させてしまつた。最初の演奏會の全収入（二萬七千フラン以上）を彼はハムブルグの市立劇場の管絃樂部員に對する年金制度を創設するために寄附した。このやうな慈善的財團は、既に十一月十日に「フランツ・リスト年金協會」といふ名前を生れ、そして多くのよい影響を興へた。彼の四回目の収益を、彼は大部分當市の貧民のために寄附することにした。彼の慈善行爲は限界を知らな

つた程である。彼が一寸でも滞在した町は殆ど何處でも慈善的な事業とか、學校、協會、孤兒院等のために澤山の寄附を受けた。彼が請願者に攻められたのは不思議のないことである。この事情を整理し、彼の好意がつまらぬ事のために搾取されるのを防がうとして、彼は母や友人達の勧めに従ひ、ペロニといふ一人の祕書を雇ふことにしたが、リストはこの人を一八四一年からの旅行にも連れて歩き、大概は彼を旅行先に前もつて遣はし、凡ての仕事をやらせた。ハムブルグでリストは、又若い樂譜出版者のユリウス・シューベルトと親しい關係を結んだが、この人は後になつてリストの多くの作品を出版した。感謝の贈物としてリストはハムブルグに別れを告げる際に一つの金杯を貰つた。ロンドンに歸つてから、曾つて子供の時演奏したやうに、又もウィンゾルの宮殿でダイクトリア女王の前で御前演奏をした。十二月と一月にスコットランドを旅行したが、それで彼の今度のイギリス滞在の幕を閉ぢた。二月の初めに、彼はパリに歸るためにリヴァプールを船出した。非常に荒れた、危険でないこともなかつた航海の後、彼は幸福にもオステンドに上陸し、そこから先づブリュッセルとリュッティヒとに赴いた。

ブリュッセルで偶然にも略々同年輩の若い男と知り合ひになつたが、この男の面白い性格と、似たやうな考へや理想はリストを把へ、間もなく兩人の間には本當の友情關係が起るやうになつたのであるが、この人とはフェリックス・リヒノフスキー侯であつた。この友情關係は一八四八年九月十八日のフランクフルトの暴動に際して、侯が悲惨な最期を遂げるまで續いた。リヒノフスキーは先づリストとパリまで一緒に行つた。そしてその後二年間は殆ど何時も一緒に旅行した。パリでリストは、あの有名なタールベルグとの争ひ（一八三七年）以來、もう公開の席で演奏するやうなことはなかつた。彼はそのために又もや多くの反對者を持たねばならなかつた。就中タールベルグは、その間に何遍もパリで演奏し、例へば貴族の間で益々多くの味方を得たのである。相手の者を外面的な手段、即ち「芝

居」をして打ち負かすことに成功しなくとも、彼の純粹に藝術的な天才がこの事情のために打ち消されてしまふこと
はないと自覺してゐたリストは、どの入場料も二十フランといふ今までにない高い切符で、プログラムも唯ピアノ曲
だけ、而も唯自分の創作だけを演奏したことによつて以前からの聴衆を呆然たらしめた。こんな事はパリでは今ま
で全然なかつたことである。彼は人々を正當に評價してゐた。といふのはこの新しい試みは人々を魅惑し、彼の二回
の演奏會は超満員の盛況を呈し、成功は例外的であつた。特に彼のマゼッパ練習曲、之は前の練習曲を大きな協奏練
習曲（確かシューベルトの魔王に刺戟されたものだが）に改作したもので、後に出來た交響曲の先驅をなすものと一
つの新しい作曲、惡魔のローベルトからの主題に基く幻想曲は大人氣を博した。この他リストは失敗作の歌劇から一
つの幻想曲を作つたが、之は前のものより遙かに優れたものである。これは音樂的にも、劇的にも極めて價値あるも
のである。この素材にあるところの、而もマイヤーベルの場合では外面的なこと以外に出ない惡魔的なものに、リ
ストは人を啞然たらしめるやうな技術的手段のために非常な迫力を齎し、そして例へばベルトラムの詠唱や尼僧の圓
舞曲の如き主題の編曲は對位法的に素晴らしいものであつた。——一八四一年四月三日にリストはベルリオツと一
緒に、音樂學校の講堂にボンのベートーヴェン記念碑を設けるために、ベルリオツの指揮の下に、音樂學校の管絃
樂と共演で、第三回目の演奏會を催した。プログラムは唯ベートーヴェンの作品ばかりであつた。奉納式の序曲で當
夜は始まつた。そして次にデルカニスが作つた大きな祝典の詩に續いて、リストは變ホ長調協奏曲と「アデライデー」
のピアノ編曲を演奏し、マサールと一緒にピアノとヴァイオリンのためのソナタ作品四十七番を演奏した。最後には田
園交響曲が演奏された。當夜リストは、又もや彼にとつては確かにお世辭たつぷりだが、聴衆の趣味としては恥づべ
きこと、即ち「名手」といふものが聴衆によつて間違つて考へられてゐるといふ證據を體驗せねばならなかつた。人

人はこのベートーヴェン祭！に就て彼に「ローベルト幻想曲」を要求したのである！當夜のことに就てリヒアル
ド・ワーグナーの筆になる記録を吾々は所有してゐる。その中でワーグナーが前にうまくない近づきに對するリスト
への個人的な怒りが明らかに讀まれるのである。

「リストとベルリオツは兄弟であり、友人である。二人共ベートーヴェンを知り、ベートーヴェンを尊敬してゐ
る。そして二人共ベートーヴェン記念碑の爲に演奏會を催すよりもよいことをなし得ないと云ふことを知つてゐる。
ところが二人の間には多少の違いがあるのだ。特にリストは費用をかけずに金を得ようとするが、ベルリオツは費
用をかけて何も儲けない。今度リストは彼の入場料の仕事を二つの金の儲かる演奏會の中にうまく處理してしまつた
のであるが、さうして置いて、然し彼は結局尙彼の名聲のことを考へてゐるのだ。彼は貧困な數學の天才とベートー
ヴェン記念碑のために演奏をした。リストは之をすることが出來たのだ。そして有名な人になることは素晴らしいと
いふ逆説的なことが出來たのだ。然し若し人々が彼を有名にしなかつたとしたら、リストはどんなになる事だつたら
う！彼は今や最も惡趣味な聴衆の奴隸となり、聴衆の名手となる代りに、彼は自由な藝術家、小なる神となり得た
のであらう。このやうな聴衆は如何なる犠牲を拂つても彼から驚歎と珍妙な才能を要求する。彼は彼等が欲するもの
を與へ、掌中の玉を愛づるのだ。——ベートーヴェン記念碑のための演奏會に惡魔のローベルトに基く幻想曲を演奏し
た！然しこんな事は憤慨に堪へないことだ。プログラムはベートーヴェンの作曲ばかりであつた筈だ。荒れ狂ふ聴
衆はどなり聲を立て、リストの優れた藝術品である、あの幻想曲を聞かせろと要求して止まなかつた。彼が怒りを含
んだ嫌惡の情を以て『私は大衆の僕である。勿論』と言葉を投げかけ、ピアノに寄りかゝり、そして難なく愛好の曲
を演奏した時には、正に天才的な人に相應しい姿であつた。かくて凡ゆる罪はこの世に於て罰せられるだらう！

つかリストは天國でも、天使達の集まつた聴衆の前で悪魔の幻想曲を演奏しなければならぬであらう。恐らくその時は然し最後だらう！」

このベートーヴェンの夕べを以て、リストは彼のパリーでの凱旋の幕を閉じた。彼は再びイギリスに赴いた。ダグー伯爵夫人は彼の意志に反して一緒について行つた。この滞在は取りわけ幸福だといふわけではなかつた。イギリスの諸地方を旅行することは、演奏會がうまく行かなかつた爲に、斷念されねばならなくなつた。リストは寛大な氣持を以て、彼に約束された収益全部を興行主に免じた。彼はロンドンにだけ居らねばならなかつた。こゝで成る程成功は前年同様であつたが、社交界では具合悪かつた。といふのは人々は彼の伯爵夫人に對する關係を攻撃し、そして大概の藝術家が往き來したが、彼等のひどい社交界の物語りのために餘り香ばしくなかつたブレッシントン夫人のサロンを訪れるといふことを、彼に出來なくしてしまつた。このやうな好ましからぬことは、ロンドン滞在を彼に嫌がらせ、そして彼はその後といふものは、もはや演奏旅行に此處へ來たくなつてしまつた。——一八四一年の七月三日に彼はイギリスを去つて北ドイツ音樂協會の第三回音樂祭のためにハムブルグへ向つた。最初の日はヘンデルのメシア、第三日にはモーツアルトの「ミサ曲」とヨーハン・セバスティアン・バハの「合唱曲」が演奏された。第二日は俗樂で埋められた。リストはベートーヴェンの合唱幻想曲を演奏したが、「人々はこのやうな立派な演奏を今まで聴いたことはなかつた。」そして又「ローベルト幻想曲」をも演奏した。七月九日に彼はもう一度彼の演奏會を開いたが、この時にはベートーヴェンの五重奏曲作品十六番を演奏して人々を魅了した。新聞では彼のベートーヴェンの解釋について論争が起つた。彼が印刷された速さの記號に影響されることなく、寧ろベートーヴェンの精神によつて影響されたのだといふわけであるが、この論争はなかく鎮まらなかつた。

キールを通つて、それからこの藝術家はコペンハーゲンに旅行した。そこで彼は七回も宮廷で演奏し、その他自分の公開演奏會も催した。クリスチアン七世陛下は大の音樂愛好者であり、音樂理解者であつた。「王は私と何遍も古い音樂や現代音樂について話をした。そして驚くべき鋭い感覺を以て偉大なる作曲家の天才の相違點や類似點を指摘した。王のこのやうな問題を取扱つた優れた頭は私を驚歎させた。陛下が私を款待してくれ、私の演奏會でもまた宮廷劇場や市立劇場で取り計らつてくれた非常な好意に對しては大きな感謝の念で一杯だ。」王からリストは多くの贈物を貰つた。そして別れの時にはデムマークの國旗を貰つた。之に對して彼は感謝の餘り、王が特別好きだつたところの「ドン・ファン大幻想曲」を王に獻じた。歸りにリストの船はクックスハーフェンに吹き流され、こゝに十二時間も逗留した。人々は退屈を氣持よく紛らすことを知つてゐた。「吾々は偶々喜劇役者の群が不吉な星に誘はれて漂流し、やる氣がないわけではないが、誰も見物人がゐない爲にすることがなくて困つてゐるといふことを聞いた。直ぐに吾々は申込をした。演劇は始まつた。これは『初舞臺を踏む女優の父』といふのであつた。小歌劇は終つた。——誰も去らない。人々はクックスハーフェンで夜九時半頃まで何處へ行つたらよいのか。ところが管絃樂はシュトラウスの圓舞曲を知つてゐるのだ。素晴らしい考へだ！——人々は踊つた！」かうして時間は速く過ぎて行つた。大概の人には却つて速過ぎたかも知れない。

ハムブルグでリストは一八四一年七月三十一日にもう一度演奏會を催した。ジョージ・ハーウェーの許嫁であるエムマ・ジューグムントはこの演奏會に列席した。そして彼女の夫たるべき人に次のやうな手紙を書いてゐる。「リストは演奏しました。それは私が到底忘れることの出來ない晩でした。といふのは私はこんな演奏を今まで聞いたことがありませんでしたから。タールベルグの演奏が私を驚かせたといふならば、今度のは私の心を奪つてしまつたのです。

リストは成る程技術の素晴らしさを極度に所有してゐますけれども、この完全さは、彼の場合は唯目的に對する手段に過ぎないので。そしてタールベルグの場合のやうに、それだけが偉いといふのではないと人々は感じます。太陽が斯くも愛らしく照り輝き、數千の色彩が戯れてゐる立派な街道のやうに、彼の演奏では天才が彼の火花を一つ一つの音から送り出してゐるので、如何にも小さい星が天空から落ちて来て、内部に入り込んで行かうとするやうに思はれます。リストの出現は何か非常に興味があります。彼は精靈のやうに見えます。それは翼を以て時々もう死の門を叩くこともあります。それが自分の白鳥の歌を唱ふ前にもう暫く鳴り響きます。」

演奏會シーズンの過勞を回復するために、リストは友人リヒノフスキーの勧めに従つて、ローランズエックに向ふラインの島、ノンネンウェルトといふ靜かに、詩的に横はつてゐる場所を選んだ。そこで彼は一八四一年から四三年の夏、ダグー伯爵夫人と一緒に靜かな隱遁生活をしながら、規則的に、眞剣な仕事に従事した。彼はその上、破棄されたる教會領として、最早その小さな演奏會場と修道院の建物とを世俗的な目的のために利用してゐたこの島を買ひ取らうといふ考へがリストに浮んだ。然し結局は、この島の娛樂に原因した高い値段のためにその事を斷念した。ノンネンウェルトから、彼は時々特別な機會に、近所の町に小旅行をした。フリードリッヒ・ウィルヘルム四世陛下によつてケルンの寺院を完成するための基金募集は又改めて盛んとなつた。然し金は餘り思はしく集まらなかつた。その時又もう一度リストは素晴らしい手本として現れた。彼は以前から古い大伽藍を愛してゐた。「そして彼等が今やケルンからやつて来て、彼等の寺院を完成したいと私に言つた時に、私は尻込みすることは出来なかつた。そして次のやうに叫んだ。私も私の砂粒を獻げよう。この場合成る程巨萬の金を見つけることが問題なのだ。——然しともかく直ぐに、私の貧しいながらも藝術家の一文を差し上げませう。」彼は八月の二十三日にケルンで演奏會を催し、一

千百四十グルデンを儲けた。然しその後又も彼は屢々、この同じ目的のために寄附金を送つた。この高貴な援助の氣持はケルンに非常な熱狂を惹き起した。人々はリストを華々しく迎へることを決心した。

「花と旗で華々しく飾られて、三百四十人の樂員を甲板に乗せた蒸汽船が、リストに儀仗兵がそこからケルンまでついて行くために、ノンネンウェルトへ向つて航行した。晝頃彼等は島に近づいた。そして既に遠くの方から岸に立つてゐるリストに、歌と大砲の音と高い叫び聲を以て挨拶した。管樂器を先頭にして彼等は寺院の音樂室に入つて行つた。そこでは力強い、よく訓練された男聲合唱が、彼に何遍も音樂で挨拶した。ローランズエックでは祝ひの御馳走が用意されてゐた。恐らくは唯葡萄で飾られたラインが彼を知る如き朗らかさと熱狂を以て過させた。ところがリストが樂員に對して乾杯の辭を述べた時、熱狂は絶頂に達した。その爲に男聲合唱はひどく感激して『ドイツのリーダーターフェル(聲樂團)、殊にラインのリーダーターフェルの如きものは他の國にはない。』と叫んだ。祝宴の後ノンネンウェルトに歸つた。さうしてゐる間に祝宴音樂によつて導かれ、ラインの住民の數々を乗せた多くの小船が此處に上陸してゐた。そしてこの小さい島の上では人々がわい／＼騒いでゐた。そして人々は、リストの演奏を聞くやうな樂器も會場も其處にないことを慨いてゐた。それをリストが見てとつた時に、彼は自分のグランドピアノを禮拜堂の中に運ばせ、戸を開け放して凡ての人に、何時もならば淋しい殺風景な御堂から、彼の熱狂的な、感激を惹き起す演奏を響かした。七時になると樂員達はリストを中心として動き出し、大砲を打ち鳴しながら色樣々の提灯で飾られた汽船に乗つた。航行する間、樂員達は最もよいドイツの歌や、特にこの目的の爲に作られたリストのカンタータを唱つた。暗くなつて、九時頃ソロ／＼終りに近づいた時に、花火が打ち上げられ、色樣々な花火が天空に飛んだ。そして彩煙が悪魔の如く船をとり巻いた。川岸からは音樂と蕙歳の叫びが聞えた。ケルン全市の者が此處に集まつた。

約一萬五千人の人々はゆつくりと光に輝く街々を通つて、樂員の動いて行く行列に續いて行き、リストのホテルまで隨いて行つた。このホテルの華やかな饗宴には町の官吏達が參加したのであるが、かうして祝典は終りを告げた。

もう一つの小旅行はフランクフルトまでであつた。此處に彼の友人リヒノフスキーが居たので、一八四一年九月十八日にリストはフライマウレルローゲ秘密共済組合(ローゲ・デル・アイニヒカイト)に迎へられたが、之には特別の注意を拂ふ必要がある。

之は彼の今までサン・シモン派に發する内的な考へ、及び既に數年來なされた高貴な人間性の實行と慈善行爲の單に外面的な告白に過ぎなかつたのである。彼がこのフライマウレルの秘密結社を特に愛したといふことは、彼に神祕主義の傾向があるといふので説明されることであり、眞、善、美の原理を彼は凡ゆる宗教と一緒にしてゐたのである。

リストはそれのみならず、更に一段と高い段階に昇つて行つた。彼は一八四二年の二月八日にベルリンで、後にウィルヘルム一世陛下となつたウィルヘルム皇子の出席の下に「ツール・アイントラハト」の組合に入り、この結社の二級に昇せられ、その十四日後には同結社の三級、即ち組合長となつた。一八四五年にリストがチューリヒで演奏會を催してゐた時に、又「モデステイア・クム・リベルターテ」の結社は彼を名譽組合員にしてしまつた。更に一八七〇年にはベスト市で「ローゲ・ツール・アイニヒカイト」からその組合長に擧げられた。——フランクフルトでの彼の演奏會の收入を其處のリーダークランツによつて、その時創設されてゐたモーツァルト財團に寄附したのであるが、それは同年に出來た彼の男聲合唱曲(ラインの酒歌)に對する報酬とも彼は考へた積りである。——又ノンネンウェルトの近くにある町々、コブレンツ、エルバーフェルト、ボンをもリストは訪れることが出來た。ボンでは彼は一八四一年の十月三十一日に演奏した。彼を祝福するために催された宴會の席で、當地の大學の音樂指揮者C・ブライデンシュタインがリストに對して乾杯の辭を述べた。彼はリストの高貴な藝術的奉仕を賞讃し、彼の絶えざる犠牲心に就て

述べた後、次の言葉を以て結んだ。「斯く考へ、斯く行ふ人は善き運命によつて祝福さるべき、より高い贈物と好意を受けるに値するものであることを證明する。そして榮譽の人であり、而も尊敬さるべき人であるといふ事實は、吾を二重に喜ばすのである。私は衷心より叫ぶ。凡ゆる數知れぬ彼を尊敬する者の名に於てかう叫ぶ。そして特にボン市の名に於てかう叫ぶのである『フランク・リスト氏萬歲!!』と。」

リストは又ボンの學生の祝典にも出席した。彼はピアノで即興演奏をなし、若き音樂學生を熱狂的に喜ばせたので彼等は最後の乾杯の後、コップを皆窓から放り投げてしまひ、彼等のこの感激を分たなかつた他の者共も、後ではすつかりその通りになつてしまつた程であつた。

唯時々愛する友人を訪れるために遮られただけのノンネンウェルトの平靜は不滅の實を結んだ。名手の道を進むことから離れて、藝術家リストは何の妨げもなく、曲の氣分と氣持に没頭することが出來た。そして祝典と激情の混亂の中に熟することの出來なかつたものが、今や取り卷かれたる自然の平和と魔力によつて、尙も昂揚されながら、充分に素晴らしく花咲き出たのである。今まで永い間一般にはそれだけの價值あるものとして認められなくて過ぎて來たりリストの多くの歌曲、それは吾々をして屢々創作者の精神生活に深い印象を起さしめるものであるが、これらのものは田園的なこのノンネンウェルトの夏の間に出來上つたものである。

二、偉大なる年(一八四二年)

一八四一年十一月の初めにリストは、此の夏の理想の國を後にして、リヒノフスキーと一緒に、北ドイツへの演奏

旅行へ出かけた。伯爵夫人はパリーのリスト夫人の許に歸つた。最初の演奏會はカッセルで開かれたが、そこで彼はルイス・シュポアと非常に親しく交はるやうになつた。此處ではリストの心情をよく表してゐる幻想曲が演奏された。有名なドイツの文筆家フアニー・レワルドの姉妹はリストに手紙を寄越し、カッセルにはW・フォン・フムボルトの女友達であるシャルロット・デーデといふ年老いた、病氣で常に淋しがつてゐる夫人が住んでゐること、そして「自分はこの年老いた不幸な夫人に大きな幸福を與へてやる」やうにしたいものだ、と、リストに願つた。勝ち誇つた彼の演奏の只中であつて、リストはこの淋しい忘れられた人のところへ赴き、彼女の「みすばらしいピアノ」に向つて弾いてやつたが、「こんなピアノでこんなに氣持よく弾いたことは、未だ嘗てない事であつた。」カッセルからリストは先づワイマールに出かけたが、この地は彼の第二の故郷となつた所である。ワイマールの有名な役者であり、舞臺監督であるエドアルド・ゲナストは或る晩藝術家としての相手シューマンと「ロシヤ宮廷」にゐたことがあるが、その時、高い、細長い體格をした、表情に充ちた顔つきの、長いオールバックの赤髮毛の頭を持つた一人の男が「今晚は、皆さん」と云ひながら、その社交に入つて來た。集まつた人々は異口同音に「リストだ」と叫んだ。リストは十一月二十六日に最も親しい間柄で、この宮廷で演奏會を催した。そして特に當時の大公妃であつたロシヤの大公妃マリア・パウロヴナはフムメルの子で、御自身もなかく優れたピアノニストであり、音樂的に教養が高かつたので、リストの藝術を非常に尊敬するやうになつた。當時のワイマールの大公嗣子カール・フリードリッヒの姫君になられた時、大公の「藝術の誓ひ」の中で妃を藝術の守護者として祝福したことがあり、大公は妃の希望を出来るだけ充てやつた。唯妃の好きな音樂の分野ではこの希望が未だ充されてゐなかつたのだが、その譯はそれに相應しい人物がゐなかつたためである。今や妃はリストに於て一人の藝術家に出會つたのだ。即ち妃の思ふがままの期待に副ひ、藝術

に關する妃の高い見解と、その實現の道に關する妃の意見にピツタリと合つたところの藝術家に出會つたのだ。十一月二十八日にリストはもう一度宮廷の大演奏會で演奏し、二十九日には宮廷劇場で公開演奏會を催した。そして次の日に彼は六百ターレルの豊かな収入を、ワイマールの婦人協會の慈善基金に寄附した。別離に際してフリードリッヒ大公はリストに鷹の勳章を與へ、マリア・パウロヴナはこの「藝術的な靈感の時」を記念するために、高價な金剛石の指環を贈つた。そして彼は間もなく又やつて來る事を約束して此處を去つた。

アカデミー音樂會の幹事をしてゐたカール・ギルレの招待で、リストはイエーナに寄り道をし、それからドレスデンに赴きそこで十二月四日に演奏會を催し、次いで彼はクララ・シューマンに約束したことがあるので、ライプツヒヒに行つたが、此處では彼女のゲワントハウスでの演奏會で十二月六日に共演した。彼は彼女と一緒に、二臺のピアノで「ヘクサメロン」を弾いたが、それは「實際、例外のない歡呼を惹き起した。即ち今まであり來りの喝采の限界は打ち破られ、狂喜と熱狂に場所を譲つた。」當夜のリストの男聲四重唱曲「騎兵の歌」も學生達によつて初めて唱はれたが、之はアンコールされる程の成績であつた。クララ・シューマンはその他リストのルチア幻想曲も演奏した。一般音樂新聞は彼女がこの幻想曲を正に「優れた名技」を以て演奏したと述べたが、又「彼女の優秀なる藝術性から、人々は而も彼女が最も新しいピアノ名技の淺薄な遣り方に反抗することを期待した」と書いてゐる。かうして永い間演奏藝術家を邪魔して來たところの、凡ゆるリストの作曲の組織的な煽動が、リストの作品を公けにすることを始めた。十二月十三日にリストは自分だけの演奏會を催したが、この際は彼の二つの他の男聲四重唱曲、ラインの酒歌と學生歌を發表した。之は初演であつた。然し結果は大したものではなかつた。クララ・シューマンは之に就て酷い批評をしてゐる。「私はこれを厭なもの」と云ふ他ありません。——低いバスのひどく、何時までも續く呟やき、高い音との

一緒になつた不協和音の混沌、退屈な序奏部。」ところがリストが日夜演奏したドン・ファン幻想曲に關しては彼女は次のやうに云つてゐる。「彼のシャンペンの歌の演奏は私にとつて忘れられぬものです。彼が弾いたその豪放、そして快活は、何と云つても唯一のものでした。人々はドン・ファンが全く狂ひ騒いで、シャンペンの栓を飛ばす光景を見た。それはモーツァルトだけが幾分考へることが出来たこととせう。」と。十二月十五日にリストは又もやゲワントハウスの演奏會でベートーヴェンの變ホ長調協奏曲を弾いた。そして彼の男聲合唱曲 *Was ist des Deutschen Vaterland* をも演奏させた。かうした事はライブチッヒのゲワントハウスでリストの死ぬまで一般に、彼の作曲が演奏された珍しい場合の一つであつた。このことは唯メンデルスゾーンの登場に負ふ所があつたのだ。メンデルスゾーンがゲワントハウスの演奏會を指揮しなくなつてからは、此處は永い間、臆病にも、凡て新しい作品を公開しなくなつてしまつた。

一八四一年十二月二十七日にリストはベルリンで彼の最初の演奏會を開いた。こゝで彼は十週間滞在し、十二月二十七日から一八四二年の三月二日までの間に二十一回の公開演奏會を催したが、その中九回は慈善の目的であつた。リストのベルリンの滞在は彼の名手時代の最高頂をなすものである。此處で祝はれた祝宴や彼に與へられた優遇は、今までの誰にも優るものであつて、ブダペストで故國愛によつてなされた時よりも、一層華々しいものであつた。初めの十回の演奏會はジングアカデミーで行はれた。フリードリッヒ・ウィルヘルム四世陛下及びその宮廷が中心であつた。ベルリン第一の社交界は絶えずこの演奏會を訪問した。それからといふものは場所が狭くなつたので、歌劇場に移つた。彼のプログラムは當時の重要なピアノ曲を殆ど全部網羅してゐた。即ち彼はバハのオルガンフーゲをうまくピアノに自分で編曲して演奏したのであるが、このバハから始まり、彼自身の作品に至る凡ての曲を演奏した。八十の作品を彼は公開で演奏したが、この中五十曲は暗譜であつた。批評は擧つて彼を賞讃した。そして大切なことは、批

評が主として空虚な極端なフレーズ等を問題とせず、その代り、この人間の藝術的な意義を擲へたことであつた。一番價值ある批評はルドウイヒ・レルシュタットのものであり、之は又その後で小冊子に簡潔にまとめられて出版された。それにはかう書いてゐる。

「吾々は彼が非常に氣輕な人好きのする友情を以て聴衆の前に現れたのを見る。凡ゆる階級の人々、凡ゆる藝術及び學問の代表者と何處までも拘泥しないリストの接待ぶり、彼が或る集まりで止むなくやらされた演説でも、彼の態度には非常に氣輕なフランス風のものがあるが、かうした場合に而もドイツ的な謙讓とか温厚さを無くすることがない。かうして最も好ましき印象を惹き起しながら、彼は樂器に向ふのだ。今や新しい精神が彼の中に生きてくる。彼は演奏する樂曲そのものの中に生きる。今まで誰か一人々々によつて克服されたやうなものを全部、彼は技巧の驚くべき力を以て敢行し、又其他新しき發見に甚だ富み、今まで全く知らなかつた効果と機械的な結合を吾々の前に展開したので、この上もなく緊張せる期待と要求を、遙かに凌駕したやうに思はれた。そして尙彼がこの驚歎に價する形式に息を吹き入れた最も個性的な精神も依然として存したし、また遙かに魅力ある刺戟的なそして興味深いものが存してゐた。彼の藝術品のかゝる精神的な重要さは、然しながら最も明らかに彼の個性の中に特徴づけられるものである。彼の演奏の感情は彼の熱情的に高く聳える精神の感情となるのであつて、彼の相貌と態度はその偽らない鏡である。彼の藝術的な行爲は同時に内面的なものゝ事實となり、それは彼から離れて存するのではなくして、それを惹き起す精神との強力な結合の中に働くのである。」

リストはプロシアのウィルヘルム王妃(後のアウグスタ女帝)の所にその母君のマリア・パウロヴナに招待されて宮廷とよく交際をした。宮殿では音樂の夜會が催されたが、そこにはベルリンの藝術界や學界の精銳達が招待されたも

のである。かうした夜の輝かしい中心點をなしたのは何時もリストの演奏であつた。

公開の演奏會でリストは自由戦争に倒れた、才能に恵れたルイス・フェルディナンド王子の四重奏曲をも演奏した。ウイヘルム王妃は喜びの餘りパリで出版された侯の作曲全部とフリードリッヒ大王のフルート協奏曲の原譜とをリストに贈つた。リストはその禮として「プロシアのルイス・フェルディナンド王子の動機による悲歌」といふ彼の幻想曲を捧げた。王妃は、後にはバーデン侯妃となつたが、その王女はリストが死ぬまで彼に好意を興へてゐた。

ベルリンでの演奏會の収入はその大部分が慈善の目的に使はれた。その中の九つの演奏會は直ちに一定の事業のために宣言された。一つはケルンの寺院建設のため(リストはその後ケルンの藝術家協會名譽會員にされた)、もう一つは五千三百八十二マルクの収入があつたが、それをベルリンの慈善事業のため、貧しい子供達のために、その他多くの演奏會の収入を必要な藝術家協會のため、最後に又大學の講堂建設のため、三つの演奏會の収入は又大學生のために寄附した。大學の庶務課は一八四二年二月三日に公式の手紙を以て感謝し、演奏後のリストの車から馬を引き離し、大衆が自分で、大聲で叫びながら彼のホテルまで車を引いて行つた。彼の慈善心、就中彼が爲したやうな高尚な仕方、そして彼の魅力ある人格によつて、彼は人心を感動せしめ、それどころかベルリンの全市民は當時祝典に参加した。凡ゆる方面からそして凡ゆる市民階級から彼に興へられた榮譽は殆ど信ぜられぬ程のものであつた。こゝでは唯最も主なことだけが指摘されてよいだらう。二月十二日にリストは文部大臣臨席の下に、總會で、藝術のアカデミー會員に命名され、二月十八日には首都ベルリンで精神的に最も優れた人々がヤゴール會館で、彼のために華々しい祝典を催した。食事に參加した人々は三百人も居つた。リストは宮廷劇場總監レーデルン伯爵と大學總長デーテリチとの間に坐つた。歴史家フェルスターは客としての祝辭を述べたが、之に對して藝術家達は衷心からそして謙讓

の心を以て答へた。そして「ベルリンの藝術と學問の精神的君主」萬歳を叫んで、會は閉ざされた。閉會に際し藝術の凡ゆる部門から選ばれた代表者が贈物としてリストに大きな金のメダルを手渡したが、之の表面にはリストの浮彫の下に、金剛石でベルリンの頭文字Bが彫られ、裏面には次のやうな銘が書かれてゐた。

ガイストゲミニョット
精神と心情を持てる天才藝術家に

信念と人格を持てる榮譽ある人に

最も喜ばしき感激の樂しきひと時を

感激に充ちて想起しつゝ、フランツ・リストに

一八四二年二月十八日　ベルリンの藝術愛好者より

その後數日経つて、リストが泊つてゐたドゥルシー・ホテルに朝方、百人の盛裝した、皆六歳以下の子供達がリストを訪れたが、彼等はリストが兒童院のために寄附した金に對して御禮を述べるためであつた。そして「Lobt froh dem Herrn, ihr jugendlichen Chöre」といふ合唱を唱つた。ベルリン兒童院長プレーウエ少佐によつてこの驚歎も沈められたが、リストは小さい子供達を非常に好きだつたので、特別喜んだのであつた。ベルリンに別れを告げる前に、リストは又男聲合唱アカデミー(D・ウィープレヒト指導)から名譽會長に擧げられ、そしてフリードリッヒ・ウイヘルム四世陛下は Pour le merite　といふ學位を授け、彼を第一のものとして優遇した。本當はこの位階は戦争に關係して授かるものであつたのだが、これ以後は藝術家や學者にも所謂「平和級」として下附されるやうになつた。「單なるピアノリスト」のかうした名譽は、勿論のこと、多くの人々の中に激昂を起したけれども、リスト自身が居合せてゐる間は反感が起らなかつた。嫉妬心や猜疑心も勿論頭を擡げた。リストの友人フェリックス・メンデルズゾーン・バルト

ルデイさへもさうでない風には見えなかつた。少くとも兩人がベルリンで出會つたのも之が最後であり、メンデルスゾーンの方に罪があるのであるが、兩人の間には内面的に面白からざる關係を惹き起したまゝとなつた。——ベルリン市民の洒落もこの時盛んになつたのは不思議のないことである。殊にブレンダスといふ匿名で書いてゐたアドルフ・グラスブレンナーはリストの名で多くの非常に悪い洒落を敢へてした。彼は就中「ライオンランド」誌の編輯者に向けて「ベルリンからのリストの書簡」を送つたが、之をベルリンの社交界はふざけた仕方であしらつたものである。人々はどうも怪しいとは思つたが、それをリストが書いたのだと思つたから、その爲に多くの不愉快な事が起つた。

三月二日にリストは歌劇場で別離の演奏を催し、又次の朝には既に旅装をしたまゝで、彼のホテルの廣場のマチネーをした。大學はリストを見送ることに決した。六頭の白馬に引かれた車は、ホテルの前に彼を待つてゐた。リストが現れた時に、數千の人々が歡呼の聲を擧げて祝つた。大學の年長者達と並んでリストは席をとつた。彼の車には三十臺の四頭立の馬車が續き、それは五十一人の大學の禮装をした騎士達と各學生組合の幹事達によつて統御された。かゝる公けの從者に續いて、數百の市民が彼を祝ふ行列に街々を縫つて隨いて行くために、列をなして行つた。凡ての街々には人々が密集し、轟くやうな高聲は行列の近づくことを知らせる。宮廷の人々もこの歡呼の有様を見物するために、町まで出掛けた。「皇帝と同様なばかりか、寧ろ全く皇帝として彼は民衆に取圍まれて進んだ。變ることなき精神の豊かな皇帝として、彼は進んで行く。彼のベルリン滞在は公的生活の事件であつた。」とレルシュタプはこのことに就いてフォッシッシュ・ツァイトツング紙に書いてゐる。かゝるベルリンの名聲時代はリストに初めて、ドイツ人達及びドイツ精神界の泰斗との密接な接觸を齎した。そして彼の發展に大きな意義を與へることになつた。リストが旅立つた後には、一般に大きな祝典や大騒ぎの後に起るやうな、酷い興奮の状態、言はゞ二日酔ひのやう

なものが起つた。數週間蔭の方でどよめいてゐて明るみに出られなかつた凡てのものが、今や大膽にもその頭を擡げ漫畫や狂文や惡質の洒落の眞の魔女の遊樂が、今や本當の藝術的感激から出たところの熱狂の迸りであつたものを解きほぐし、嘲笑的に吟味し、蹂躪しはじめた。特に立派な人々の感激が馬鹿げたことにされてしまつたといふことは確かであり、例へば次のやうな記事はその極端なものである。「人々は彼を響應した。人々は彼にセレナーデを齎した。或る婦人は彼の前に跪つき、彼の指先に接吻したいと願つた。——他の婦人は演奏會場で、公衆の前で、彼を抱擁した。——別の婦人は彼の茶碗の残りの茶を彼女の香水壺の中に注いだ。——數百の婦人は手袋に彼の肖像を入れた。——多くの者は理性を失つてしまつた。凡ての人は彼を無き者にしようとした。或る藝術品商は彼の肖像を入れたガラス片を作製し、裝飾品として賣つた。數千の人は彼の好意と彼の金を媚び求め、或は乞ひ願つた。——之でも未だ全部ではないのだ。未だ別れるといふことが重大問題として残つてゐる。馬鹿者が之までこんなに大きな勝利を贏ち得たことはなかつた。」こんな事全部に對して藝術家リストは何も答へることをしなかつた。人々は新聞や漫報に於てこのやうな誇張を拾ひ擧げ、大げさにあしらひ、色々な仕方でも惡意を以て挑戦し始めた。ところが結局は何時も立派な事柄に結びつく、かうした面白からざる状態は重要事件として示されるやうになつたので、人々は實際却つて自分の行爲を恥ぢるやうになつた。したがつてリストが翌年再びベルリンにやつて來たときには、気分は冷やかになり、遠慮勝ちとなつてしまつた。人々は二度と世の中に恥を曝すやうなことはしなかつた。

かゝる感奮的興奮の間に演ぜられた管の艶めかしい奇談は數ふるに暇のない程澤山ある。美しいベルリン婦人達の戀愛狂行を描寫するには、記者がどんなにあつても足りない位である。一杯あつた事件の中、特に二つのものが擧げられるであらうが、それはこの暫くの瞬間を過ぎても續いて行つたのである。リストは美貌で有名な女優のシャル

ロット・フォン・ハグンの魅力に捕へられた。彼がベルリンを去つた時、彼女は許しもなくして彼の後をつけ、尙數日間秘かにミュンヒェベルグで彼と共に暮した。

ベッティナ・フォン・アルニムともリストはベルリンで深い交際をした。彼等の取り交はした書簡は之を雄辯に證明してゐる。彼が首都ベルリンを去つた直後、リストは彼女に次のやうな手紙を書き送つてゐる。「私はお前さんを戀し焦れてゐる。——お前さんの最も内面的な心に私は憧れてゐる。私共二人の相引く力が増して行くといふことを私は離れてゐるだけに却つて強く感じます。私はお前さんの手紙のどの點が私を感動させたか云へない。」Der Du von dem Himmel bist といふ詩はリストによつて「ベッティナの想ひ出」として作曲された。後年になつても彼等は尙屢々會つてゐる。ベッティナは彼女の娘と一緒に、永い間、町から町へと彼の後を追うて旅して歩いた。噂によれば彼女はこの輝かしい藝術家を、非常に喜んで自分の養子としたいらしかつた。ワイマールのアルテンブルグにもベッティナは尙屢々訪れてゐる。

ベルリンからリストは彼の旅をケーニヒスベルグへと向けた。こゝで彼は又再び大學のために演奏會を催した。その感謝として哲學科は彼に名譽博士の稱號を與へた。ファルンハーゲン・フォン・エンゼが彼の日記に書いてるやうに、之は愚かな瘡我慢をしてそれを拒んだベルリンの哲學科に對する耳打ちである。

ミタウとリガを通つて、リストは、前に皇后に約束したことを履行するために、ペテルスブルグへと向つた。——彼は宮廷から非常に親切に款待され、そして屢々招待を受けた。次のやうな逸話は當時に起因してゐる。即ちリストが宮殿でピアノを演奏してゐた時、ニコラウス皇帝は侍從達と聲高々と話してゐた。——リストは突然演奏を止めた。すると皇帝は驚いて問ひを發した。「何故あなたは演奏を中止しましたか」と。その時彼は少しも怖れずに「若し皇帝

がお話しになるならば、他の者は皆沈黙せねばならないでせう。」と答へた。——一八四二年四月二十日に彼は大體四千人の聴衆を前に貴族會館の大ホールで最初の演奏會を催した。皇后も侍從の者と一緒に臨席した。フィルハーモニ協會はその後彼を名譽會員にした。この最初の演奏會に引き續いて他の演奏會も催されたが、聴衆の側からも、新聞からも盛んな賞讃を博した。「演奏會の後、最高社交界の婦人達は彼のホテルの階段の所で、花環を以て彼を迎へるのが常であつた。そして彼が旅立つに際しては、貴族の人々は特に合唱隊を乗せた蒸汽船を用意し、この偉大なる藝術家をクロンシュタットまで、そして更にフィンランド灣のレーデまで彼を送つて行つた。」ペテルスブルグではリストはアドルフ・ヘンセルトとの間に最も親しい關係が結ばれたのであるが、この人の作品を彼は既にずつと前から勉強してゐたものである。

ヘンセルトは一八三八年にペテルスブルグにやつて來、自分の演奏會を開いて評判がよかつたので、こゝへ引き移ることに決したのである。彼は宮廷ピアノニストとなり、最高のロシア貴族にだけ教授をした。後に彼はペテルスブルグとモスコの帝室音樂學校の總監とまでなつた。彼はこゝで公開演奏をしたことは少しもなかつたので、ピアノ演奏家として本來はさうである筈の世界の名聲をかち得なかつた。W・フォン・レンツの紹介によつてリストはヘンセルトと相知るやうになり、そして兩人は急速に親しくなつた。ヘンセルトの作品も彼は後になつて非常に高く評價し、一八五〇年彼の「コンチェルトソロ」をヘンセルトのために捧げてゐる。ペテルスブルグでリストは一八四二年五月五日の大火の報せを受けとつた。彼は間もなく五萬五千フランの演奏會の收入を、その救助金としてハムブルグに送つた。その後一年にして彼は青銅の上に鎔した硝子を流し、その上に「ハムブルグは感謝す」と銘を打つた大きなメダルを貰つた。

ペテルスブルグからリストはパリーの自宅へと歸つた。彼はそこからロンドンへ行かうとした。そしてロンドンで彼は或るドイツの歌劇協會の指導の任を引受ける筈であつた。ところが事態はうまく行かなかつた。そして大抵既にパリーで會つた聲樂家達は今や頼るところもなく外國に居なければならなくなつた。そこでリストは彼等のために六月三十日にマチネーを催し、そこで彼等はリストの男聲合唱曲「ラインの酒歌」と「騎兵の歌」を唱つた。収入はなかなか大したもので、凡ての人々は心よく故國に向つて旅立つことが出來た。リストは當時リユー・ブランシュの彼の母の許に住んでゐた。彼はその時W・フォン・レンツとよく交際した。この人の所に彼は屢々フェルディナンド・ヒルラーやヴァイオリニストのエルンストと一緒に音楽するために出掛けたものである。

七月の半ば、彼は作曲家グレットリーの記念碑除幕式に際する祝典に、リユティヒとブリュッセルから招待された。リストはリユティヒでは七月二十日に、ブリュッセルでは二十三日に、公開演奏會で演奏した。レオポルド王は之に對して、彼にベルギーのレオポルド章を與へた。この祝典のことやリストの個性に就て、そして又一八四一年と四二年にベルギーに滞在したことに就て、リストと親しいリユティヒの銀行家シャル・デュボアの回想録の中には次のやうな面白い記事が載せてある。

「非常な騒ぎが、未だ到着しない中に起つてゐたのであるが、一八四〇年四月彼がウィーンから歸つて來た時、リストはパリーで大變動を惹き起した。そこで彼は宛も大砲の彈丸のやうに、計らずもピアノニストの全軍を倒してしまつた。そして彼は『凡てのピアノニストをポケットの中に入れてしまつた』(之はタールベルグの言葉であるが)のである。——彼の名聲、古い寶玉のやうな彼の姿、彼のナポレオンのやうな顔、彼の髪、彼の行動、彼の個性的な話しぶり、之等凡ては一つの型、一つの個性を形作つた。そして之は珍しがり家を極度に興奮させた。彼は時代の獅子とな

り、時代の英雄となつた。人々は彼を得んとして掴み合ひをし、人々は彼の手袋を彼から奪ひ取り、人々は彼の着物を引裂いてしまつた。彼は終にはもう徒歩で出掛けるやうなことをしなかつた。人々が然し車の中に彼を眺めると、人々は馬を車から引離し、自分達でそれを引いて行くのだつた。彼は到る處で狂亂と騒動を捲き起した。然し私のやうな何も稱號のない者が、リストのやうな生れの人に紹介されるといふことは、なか／＼容易な業ではなかつた。そしてリストでも初めはハンガリアやオーストリアの最高階級の紹介狀を貰つて行つたメルリン伯爵家の夫人達やベルゴジョソ侯爵夫人、聖ゲルマンのやうな高貴な世界には、貴族的な態度が必要であつたからである。偉方の貴夫人達のサロンでは何時も、彼は雨か晴かの晴雨計であつた。そしてそこで彼等のために作曲することが懇願された(彼の多くの素晴らしい作品が之を示してゐる)。彼の教養に富む話、彼の精細な心の溢れた應答、そして彼の精神の獨創性は凡ゆる人の心を奪つた。彼は凡ゆる婦人を虜にしたと人は成程云ふかも知れないが、如何に貴族的な雰囲気は自分の周りに繰り擲げたか、そして例へば彼がサロンで演奏をした時に、如何に驚くべきセッションを惹き起したかを、人々は見なければならぬし、又寧ろこれを感じなければならぬのだ。彼のやうに好かれ、敬はれた人は誰もいないが、然し一度も金持になつたこともない。彼は成程巨額の金を儲けたが、然し彼はこれを次の日に再び投げ出してゐる。彼のやうな人を想像しただけでも私は死ぬ位に之を憧れるのだ。私はベルギーの公使に頼んだ、そして遂に或る晚公使の紹介でリストに遭つた。そこにはジュール・ジャンソン、バルザック、アレクサンドル・デューマ、ジョルジュ・サンド、シヨパン等が居つた。モシエレスは丁度その時彼の大きな連弾の變口短調ソナタを公けにした。彼等は出版者のパッチーニの所へ紹介され、そしてリストとシヨパンは二人が宛も多年それを勉強したかのやうに、初見でそれを演奏した。この想ひ出は實に大したものだ。ところがパリーでは凡てが非常に急速に終りを告げた。リス

トはロンドンへ渡つた。それから彼はベルギーへ向つた。フェティスは彼のことを優勢にした人である。曾てブリュッセルで催された最上の演奏會は彼によつてマネーヂされた。私は勿論そこへ出掛けた。私はリストにお願ひして、終りにリュティヒで演奏して貰ふやうにした。偉大なる藝術家リストはブリュッセルの公園に近いホテル・ドゥ・フランドルに泊つた。彼はそこで彼の演奏會後華々しい晩餐會を私達に催してくれた。その時客は約三十人から四十人の間であつた。この中にはデイトリヒシュタイン伯、ファン・ブレット、ロジュール、フェティスが居つたし、又殆ど全部の新聞關係者、その他ブレイエル夫人とかまたは音楽や文藝の偉大な人々が集まつた。彼が私共の町で催した祭の想ひ出を、そこに居合せた凡ゆる人が更に新にした。リストはリュティヒではホテル・ヨーロッパに宿をとり、晝食や夕食を人々と共にし、素晴らしく澤山の金を使つた。彼はB氏を祕書にした。……この人はリストの演奏會の收入を詐り取つた。私はこのことをばらしてよいと思ふ。といふのは私がそれを確めることが出来たから。リストは又（それは彼の變つた行ひの一つであつたが）、従者の偉い奴を有つてゐた。そしてこの従者は彼の鬚を剃り、毎日ネクタイとビンを變へて結んでくれる役を勤めてゐた。彼がリュティヒに滞在中、グレットリーの記念碑の除幕式を行つた。そしてリストはこの祭典の王者となつた。レオポルド一世陛下は彼に十字の勳章を贈つた。

「リストがリュティヒで催した演奏會の數は随分多かつたが、これを皆こゝに取擧げると餘り長くなるから、この中『慈善産院』のためのものと、もう一つのものを述べることに限らう。後者を彼は山の人々のために開いたのであつたが、その時ウルバン氏は彼の特別棧敷から舞臺まで下りて来て、喝采の嵐と花の雨に送られて、彼に貴重な贈物を手渡した。リストは私の兩親とよく交はつてくれた。彼は或る晩のこと私達にどうしてもダンスをさせようとしたのを想ひ出す。彼はピアノに向ひ、活潑なワルツとポルカを即興で演奏した。——だが萬事は終りを告げた。歐洲各國

の首府から彼は呼ばれたので、二、三回ベルギーで演奏旅行をした後、この素晴らしい藝術家は私共を後にして去つた。然しこの最後の演奏旅行も常に彼にとつては勝利の道であり、吾が國の有名な人々は皆彼を送つて行つた（この中には彼について行くために男装した婦人達もゐた）。この素晴らしい人間、この輝く流星、彼は私達に『又會ひませう』とは云つたが、『お別れ』とは云はなかつた。

ベルギーからリストは再び先年のやうに、ノンネンウェルトに赴いた。そこで彼は伯爵夫人と子供達に會つた。靜かに、眞面目に仕事をして——時々小旅行をしたり、またはフリードリッヒ・ウィルヘルム四世陛下のブリュッセル宮殿に出掛けたり、そのために中断されたが——この夏の數ヶ月をこゝで送つた。四つの男聲合唱曲及びヴィクトル・ユーゴーの歌詞に基づくフランスの歌はこの閑暇の時に出來たのである。リストは又この時バイロンによる「マンフレッド」の歌劇を作らうといふ計畫をしたが、之は實現しなかつた。

一八四二年十月、リストは再びワイマールに行つた。それはマリア・パウロヴナの招待で、カール・アレキサンダー大公とネーデルランドの女王ソフィーとの結婚式に参加するため、そこへ急行したのであつた。彼は十月二十三日に宮廷での大演奏會を計畫し、宮廷の人々の望みにより、この冬の大演奏旅行に彼と同行した有名な歌手のルビーニを一緒に連れて行つた。十月二十九日に彼は慈善の目的で第二回の公開演奏會を開催した。彼はソムナンプールの想ひ出ショパンのマヅルカ、清教徒のポロネーズ及び魔王を演奏した。「外國の藝術家は群蜂のやうに彼について來た。そして吾々は彼を通じて多くの音樂的な偉大さを知るに至つた。彼は私には宛も無味乾燥な土地を新鮮な緑や新しい葉で飾るために、その生々した力を凡ゆる側から流出させる豊かな泉のやうに思はれた。」

此度のワイマール滞在中、將來に對して非常に重要な問題が決定された。即ちリストは大公妃の頼みにより、「大

公妃の員外樂長」といふ稱號を與へられた。訓令は一八四二年十一月二日に發せられ、リストは毎年三ヶ月間ワイマールに滞在し、「彼が居る間樂團を彼の仕事のために使はねばなるまい」といふことが書いてあつた。謝禮の問題は毎回適當の額を彼の仕事に對して支拂ふやうに、一切宮廷に任せられるといふことになつた。彼は毎年一千ターレルを貰つた(リストは之を冗談に彼の「煙草錢」と云つた)。そしてリストが後年思ふまゝに、彼の全力を一年中通して、ワイマールの音樂生活に奉仕するやうになつた時にも、宮廷によつて支拂はれた金は同様の額であつた。

三、最初の歐洲大旅行 (一八四三年—一八四四年)

ワイマールからリストはまたも隣のイエーナを訪れた。彼は此處の學生合唱團でベッカーのラインの歌 *Sie sollen ihn nicht haben* を指揮し、大祝宴の中心人物となつたが、その *O. L. B. ウォルフ* 教授は次のやうな乾杯の辭を以て彼を祝福した。

彼の生涯は花にして、

否、不思議なる童話なり。

その心は優しさに充ち溢れ、

宛も樂の音に鳴り響く如く。

地獄の靈も彼に對すれば、

天國の靈の如くに奉仕す。

吾等の騎士、吾等の博士、吾等の巨匠、イエーナの眞實なる友リストに。

イエーナの町は、リストに名譽市民權を與へた。

更に、彼はエルフルト、コーブルグ、ゴータ、フランクフルト、ケルン、アーヘン、アムステルダム、ライデンに赴いた。このライデンでは彼に、その學生聯盟が金製の嗅煙草盒を贈呈した。一八四三年の初めには最後、ベルリンに入つた。宮廷では彼の歓迎が前年と同様に大變なものであつた。彼は澤山の贈物を貰ひ、金の學藝賞を貰つた。彼の當時出來上つた第二のハンガリア行進曲なる、「嵐の行進曲」は皇帝の命令でプロシア軍隊の觀兵式に採用された。リストとベルリンの宮廷との間に行はれた親しみのある關係は、一八四三年二月四日の彼に宛てた次のやうな皇帝の手紙も、之を證據立てるものである。「余は貴下を單に精神に富む作曲家と、天才的な、驚くべき才能に恵まれたる藝術家と思ふのみならず、貴下が絶えず施した慈善的目的に基いて、貴下を特に立派な人間と思ふ。貴下は余が國を旅行せる間、それが聲もなき證據の數々を示してくれた。」と。

リストはベルリンで五回の公開演奏會を催した。そこで彼は成る程聽衆を魅了したことはしたが、拍手喝采や、特に空っぽな書きぶりの背後に何か意味ありげなことを云つてゐたやうな批評は、別に普通の水準以上に出てゐたわけでもなかつた。彼が最後にベルリンに現れた後、熱狂者の上に注ぎ入れられた頓智と皮肉の腐敗した流れは、その効果を誤らなかつた。僅か八ヶ月以前に、帝王のやうに町から凱旋行列で送られたその同じ人が、そして臣下のやうに町の人を殆ど押へつけたその人が、今となつては自分の側に何らの過失もなく、公けの生活では全く忘れられてしまふやうになつた。彼の中に尊敬の念を以て藝術家を見る人は如何に少いか、又彼は本當は唯大衆の氣まぐれな遊びものに過ぎないといふことを、もう一度非常にはつきりと目前に見たところのこの正しくない考へ方は、リストが永

い間からした「名技追求」に對して抱いてゐた反對の意志を再び新しく燃え立たせた。それでも彼は尙二、三年間は
この束縛を忍び持たねばならなかつた。

ベルリンでリストは偶然にも再びリヒャルト・ワーグナーに出會つた。彼のリエントンの成功の後、今やドレスデ
ンの宮廷樂長となつたワーグナーは、宮廷の演奏會で共演することになつてゐたシュレーダー・デヴリエントと一緒に
「さまよへるオランダ人」の上演を交渉する爲に、ベルリンに来てゐた。ワーグナーはその時パリでリストに以前
會つたことを彼女に話してゐる。自叙傳にはこんなことが書かれてゐる。「楮、リストも同様にプロシア王に、その
宮廷の大演奏會に招待されたので、彼と初めて會つた時、彼女はリストに非常な關心を以て『リエントンの結果に
就て尋ねたといふことがあつた。この『リエントンの作曲家がリストにとつては全く知らない人であつたといふこ
とを、彼女がその際分つたので、彼女はリストに對して直ちに特別な惡感情を以て、彼がどうしても爛眼のなかつた
ことを非難した。といふのはリストが今や非常な關心を以て問題にしてゐる作曲家は、彼が一寸前にパリで『あ
んなんにも高慢に拒んだ』あの貧しい音樂家と同じ人だつたからである。彼女はこのことを私に大喜びで話してくれた。
然しこれは私の胸に大變苦しい氣持を抱かせた。といふわけは、私は直ぐ私の以前の話から得た彼女の印象を相當に
訂正せねばならなかつたからである。私共が彼女の部屋で丁度このことに話が及んだとき、隣室で『ドンナ・アンナ』
の仇討の Aria にある低音の有名なパッセージがオクターヴで急速にピアノで演奏された爲に、私共の話は具合よく
突然中斷された。——『リストその人が來ました』と彼女は叫んだ。リストはこの女歌手を演奏會の試演に連れて行く
ために、そこへ入つて來た。非常に苦しかつたことには彼女は私を彼に惡意ある喜びを以て『リエントンの作曲家
として紹介し、リストは前に彼の素晴らしいパリ時代ワーグナーを斥けたのだから、今は彼にどうしてもこの曲

を知らせねばならないと云つて責め立てた。私の保護者たる彼女が——兎も角、唯冗談半分で——私は以前にリスト
を訪れた時のことに關して私が話したことを、態と曲げて考へたのであるといふことを、私が眞面目になつて斷言し
たので、リストは直ぐに私のことをよく分つてくれた。又彼は他の點でこの情熱的な女藝術家とはよくもう結着を見
てゐた爲でもあつた。彼は然し私がパリで訪問したことを覚えてゐないし、又それにもかゝらず誰かゞ非常に惡
く考へたことに就て彼の側から釋明せねばならなかつたのを經驗することは、彼にとつては可笑しいことであり、
驚いたことであるとリストは告白したのだつた。リストがこの誤解に關し私に向つて表明した簡單な言葉の非常に親
切な調子は、私に對する非常に情ある、そして好意ある印象とは反對に、この我儘な婦人に殊の他激昂した惡口をさ
せるやうな事になつた。彼女の容赦ない嘲笑的な攻撃の手を弛めようとした彼の態度の凡ては私にとつては新しい
ものであつた。そして彼の親切と信用すべき人間の比べものない人間性の特質を深く持つてゐることを私は知つた
のだ。……それは心から本當に彼が『リエントンの』を熱心に聞かうといふやうになり、そして兎も角自分に關する一
層よい見解を私に得させようとしたからであり、彼の不運が今まで彼にそれを出来るやうにした時に、今度は私共は
別れてしまつたのだ。——その印象、例へば大まかな、殆ど素朴な單純さ、そして凡ゆる表現や凡ゆる言葉の淳朴さ、
又特に彼が彼女に與へたやうな表現の素朴さは、私に對しては非常にはつきりと次のやうな印象を投げ與へたもの
である。即ちその印象は確かに誰でもが此處に示されたリストの特性から得られるやうな印象であり、そしてその印象
を通して私は初めて彼の魅惑の状態を説明することが出来たのであり、又その印象の中にリストは彼に近づいて來た
凡ての人を移し入れたのである。そして私が今まで間違つた考へを抱いてゐたその原因について、今や私にはよくよ
く明かになつたのである。——

ベルリンからリストはブレスラウに赴いた。そこで彼は一月二十一日から二月七日のあひだに大學で七回の自分の演奏會を開き、劇場では魔笛を指揮した(二月一日)。彼が劇場指揮者として指揮棒をとつたのは、この時が最初であつた。ブレスラウのアカデミー音楽協會のためにも彼は非常に多くの善行をした。そのために名譽會長に推され、學生團は彼のために炬火の行列を行つた。

シユレジアとポーランドを通り、その間に彼の友人フェリックス・フォン・リヒノフスキーとクルツイヤノウィツ宮殿に永い間留つてゐたために中斷されたこの旅行を終へて、彼はワルサウに比較的永く滞在した。シヨパンの祖國に於て、リストは主にシヨパンの名曲を演奏し、名狀すべからざる熱狂を捲き起した。彼の著書「シヨパン」にあるポーランドの感情と國民的性格のリストの描寫によつて、初めてワルサウの状態が明かになり、信すべきものとなつてゐる。ところがポーランドの國民藝術によるポーランドの同情のかうした覺醒に寄與することは、人々が當時やつて見たやうに、非常に馬鹿々々しいことであつた。ロシアの間諜はリストにポーランド人が感激したことゝの怪しげな噂をベテルスブルグに通告した。そのためにリストはニコラウス皇帝の不機嫌を買つてしまつた。ところが皇后と宮廷の皇女達は彼に對する好意を失はなかつた。今やリスト自身がベテルスブルグに入つた時、皇帝は彼の演奏會を全然訪れなかつたし、又彼を宮廷にも招待しなかつたが、然しさうは云つても、之を妨げるやうなことは何もさせなかつた。皇后は之に反して、彼の演奏を聴き、彼を屢々宮殿の自分の夜會に招待した。かうした親切な好遇は確かに、主として生れながらネッセルローデ伯爵夫人と決められ、後にはフォン・マウクハノフ夫人となつたカレルギス夫人の筆になるワルサウの報告によつて刺戟されたものである。シヨパンの女友達であり、彼の音楽をひどく尊敬してゐたこの心ある婦人とリストは、ワルサウでシヨパンの紹介により親しく交はり、その時以來一生涯を通じて友情を展開し

たのである。リストはベテルスブルグで六回の大演奏會を催したが、ロシア人も彼のシヨパン演奏に感激し、そのためにポーランド政策の話をひどく攻撃した。ベテルスブルグの音楽家達と彼は親しく交つた。そして此處でロシア音楽に關する彼の廣い知識と、彼の時代より遠く先んずるロシア音楽に就ての價値評價とが基礎づけられた。モスカウでも彼はこの年(五月)に六回演奏をし、非常な成果を收め、遂にハムブルグで六月二十六日に一回の演奏會を開き、彼の避暑地ノンネンウエルトに歸つて來た。このロシア旅行から艶かしい奇譚に就ての色々な逸話や評判が公けにされてゐる。それに細かく立ち入るには此處にその場所がない。然しリストがベテルスブルグやモスカウのサロンで殊のほか美しい伯爵夫人達や貴族の夫人達の心を奪つたといふことはありさうだ。彼がよく行つたモスカウの遊蕩社會で、彼は又この町の名物であつた、綺麗なので有名なジプシー女と知り合ひになつた。彼の著書「ハンガリアに於けるジプシーとその音楽」の中に、リストは後になつて彼の當時の觀察を實に面白く描寫してゐる。この時から彼が既に幼年時代に非常に好んで聽いてゐたところの、この自然兒の珍らしい憂愁に充ちた、而も激烈な音楽に對する彼の大きな偏愛が始まつてゐる。「前々から、そして何遍も改めて、ジプシー音楽の深い苦惱と大膽さに惹きつけられ、私共が何處を旅行してゐても、何とか出會ふことが出来まいかと、ジプシー藝術家を探さないことはなかつた。」一八四三年の夏は、リストがノンネンウエルトに過した最後であつた。その時出來たものは又も一系列の抒情的作品であり、就中ダグの歌等がある。「ノンネンウエルトの小房」もその一つであるが、その歌詞は彼の友人リヒノフスキー侯が伯爵夫人のために詩作したものである。その他若干の彼の歌曲をピアノだけに編曲したもの及び彼のロシア滞在の想ひ出として、ロシア民謡主題に基く二三の幻想曲がある。

秋にはリストは伯爵夫人と子供達をパリに連れ、そこに暫時私人として滞在し、彼が未だ再度の訪問をしてゐな

かつた南方の地方を通つて演奏旅行をするために、ドイツに歸つて行つた。一八四三年十月十八日、彼はミュンヘンのオデオン座で彼の最初の演奏會を催したが、その時ルドウィヒ一世陛下が臨席した。當時計畫中であつた盲人收容所のために、彼は又彼の演奏會の收入から千五百グルデンを寄附したが、藝術家に對して金を出さない事で知られてゐた王は、リストがその中に金を入れた財布を市廳に渡し「何時までも記念として置くやうに」と指令した。市民は感激の意を示した。即ち合唱團は炬火の下で、彼に夜曲を贈り、「ツワングローゼン」の藝術家協會は彼のために十月二十八日に大祝典を催した。その時カール・フェルナウが作つた挨拶の辭が渡されたが、最後の言葉は次のやうに結ばれてゐる。

彼は吾等の前に幻想もて立てり

吾等の前になべての生命の光もて

彼の魔力ある旋律もて

吾等の涙、吾等の悲しみを捉ふ

繪畫より、大理石の彫刻より

音樂は永續的ならぬにせよ

リストに就ての語らひは

心を揺り動かせし力は永遠に生きん。

外面的な勝利に富んだミュンヘン滞在は、その他リストが此處で多くの當時の有名な藝術家と接觸した關係によつて特別の興味を得た。シュワントラーは彼のメダルを作成した。特に彼を把へた人はウィルヘルム・フォン・カウル

バハであり、この人とはリストは後になつても盛んに藝術家としての交際をしてゐた。——引き続きアウグスブルグ、ニュールンベルグ（此處ではモーツァルト協會と古いデューラー協會が彼をその名譽會員にした。十月十四日）ストットガルト、カールスルーエ、マンハイム、ハイデルベルグ、最後にヘッヒンゲンで演奏會を催したが、ヘッヒンゲンでは音樂を愛好せる、そして彼に對して非常に心を動かされたホーエンツォレルン・ヘッヒンゲンのコンスタンテイン侯爵夫人は彼に宮中顧問官の稱號を與へた。

十二月の半ば、リストは初めてその樂長の任務を果すためにワイマールに赴いた。彼は一八四四年二月十八日まで留り、その間に殆ど全く古典的なプログラムを以て八回の演奏會で指揮をした。彼は十年後に、カールスルーエの音樂祭（一八五三年）の後、彼の正直な書簡の中で「指揮に就て」書き、その中に最も適當な言葉で、即ち「吾々は舵取だ、船頭ではない」と斷言してゐるが、それと全く同じ考へで、その時既に指揮をしたのである。彼が特に問題としたのは、作品の精神と、その内容を表現することであつた。彼の指揮は主として彼の志向を述べるのに關係し、彼が「粗雑」だと考へ、純粹に技術的なものとしてゐた、純粹に機械的な拍子等は不必要だと思つてゐた。ところがワイマールの宮廷樂團は、未だこの「粗雑」なものから出てゐるわけではなかつた。彼等がその舵取りの述べることに隨いて行くことが出来るためには、まだ準備を必要とした。然し間もなく彼はその樂團を訓練したので、彼等は各々彼の目くばせに休みなしに従ふことが出来るやうになつた。當時の記事は皆彼の指揮の才能を賞讃した。リストのことを餘り親切に考へてゐなかつた「一般音樂新聞」さへも次のやうに書いた。

「リストは、今まで彼が演奏會で指揮した作品の凡てに對して深い理解を示した。特に彼はベートーヴェンの交響曲を大體吾々が以前に聞いたよりも緩やかな速さで指揮したが、その効果は驚歎すべきものであつた。——彼は作品

の精神を充分立派に顯はさせる眞の指揮者としての天賦を所有してゐる。凡ゆる精細な味はひを諷刺的な巡回に墮することなく、凡ゆる演奏家に認められるやうに、彼の運命の中に刻印することを知つてゐる。彼の揺れ動く、そして凡ゆる感情を映し出す容貌は、音の喜びと悲しみとを通譯し、彼の精力的に輝く眼は凡ゆる樂員に異常な實行力にまで點火せずに置かない。リストは音樂の魂の權化である。——」

最初の演奏會でリストは又むづかしいフムメルの口短協奏曲を演奏したが、フムメルは前にワイマールの彼の前任者であつた。フムメルの未亡人は、この演奏會に来て居り、終つてからギルレに向つて喜んで「So haots halt do mei' Aker nit gespilt」を叫びた。

この短いワイマール時代は後のワイマールの音樂的黃金時代の價值ある前奏曲であつた。

リストは次いで今度はドレーズデンへの招待に應じ、そこで彼は或る演奏會でオラトリオ作家ナウマンの記念のために共演した。此處で彼はリヒアルド・ワーグナーのリエンツィ上演にも臨んだが、この歌劇は丁度上演曲目の中に入つてゐなかつたので、劇場管理者に特別に願つて上演して貰つたのである。この時彼はテノールのティハチェクの着換へ部屋で唯一寸だけワーグナーに會つた。この時又リストはハンス・フォン・ビューローの母、フランツィスカ・フォン・ビューローと交はつた。そしてビューローの隣家で非公開の夜會があつたとき、リストは小さいハンスの才能に非常に興味を持つてゐたので、少年はもう寝てゐるだらうけれども、何とかしてこゝへ連れて來たら、私は演奏しようと言つたことがあつた。——ベルンブルグ、シュテッティン(三月八日)、デッサウ(リストはこゝでその歌曲に非常に興味を抱いてゐたローベルト・フランツと一緒に散歩した)、ブラウンシュヴァイク、ハンノーヴァーの町々を通つて北ドイツを旅行した後、彼は四月の半ばパリに歸つた。

この旅行中、當時盛んに噂された艶めかしい奇譚があつた。既にミュンヘンで生活する前から評判となつてゐた有名な舞踊家ロラ・モンテツは暫くの間リストと旅行の相手となつた。彼は最早や彼女と別れることが出来なくなつたので、彼は或る日のことホテルの自分の部屋に錠を下ろし、鍵をボーイに手渡し——十二時間たつたら初めて戸を開け、その婦人に靜かに呼鈴を鳴らさせるやうにと頼んだ。彼女はそれでも別に、この仕打ちを悪くは思はなかつた。そして後になつて彼女がバイエルン王の寵愛を受けるやうになつた時にも、リストに非常に愛情を籠めて手紙を寄越し、宮廷で彼の援助をするやう頼んで上げようかと云つて來た。バイエルン王は彼女が何時も南國から寶石が欲しいと云つても、その代りにネーブルの小箱を土産に持つて來るといふやうな人だつたから、彼女は「大の慾深」と呼んでゐたのであるが、この王から彼女はリストに高位の勳章を授けさせるやうなことにした。

四、ダグー伯爵夫人との別離 (一八四四年)

偕、パリに於ける今後の事件を理解することが出来るためには、我々は先づさうしてゐる中に結末を見なければならなくなつたところの一つの事件、即ちリストとダグー伯爵夫人との關係に我々の注意を向けなければならぬ。二人の交渉は一八四〇年以來止むを得ず續けられて來たが、もうその儘にして置くわけには行かなくなつた。こゝで何とかしなければならぬ破目に立ち至つた。即ち唯一つ出来得ることが残されてゐたが、それは完全に別れるといふことであつた。リストが「色々なわけがあつて、もう母の許に置くことが出来なくなつた」と云つてゐる子供達のために、彼女はもう先に片附けられねばならなかつた。一八四〇年、リストが夫人の家族と和解して、彼女を或る

程度まで社交界に復歸させた上に、夫人の母の死によつて多額の財産が彼女の手に入つて以來、彼女は再びパリーに居を構へたが、其のサロンは間もなく以前のやうになり、殊に今度は文士らしく生活しようとし、即ち藝術界及び文藝界の集合場所とし始めたが、非常に自由な道徳觀が行はれ始めてゐた。此の母の家は決して成長期の子供達を留めて置くべき處ではなかつた。而も夫人とリストがこれ以上一緒にゐることは、益々甚だしくなつて行く二人の性格相違——これをリストは「吾々二人の性格の根本的な相異」と名づけてゐる——によつて全然不可能な事であつた。一八四〇年から一八四四年にいたる最後の數年間に行はれた凡ての交渉は、二人にとつて多くの深い悲しみを與へる意見の相異を内に藏し、その當時にあつては、正に一大受難であり、そればかりでなく、屢々悲しむべき結果にすらなつたことがあつた。

リストは三十年後、彼女に對する個人的な憎しみがすっかり消え去つた時、彼女の死亡通知を受取つて、次のやうに書いてゐる。「私がダグー伯爵夫人に就いて懷いてゐる想ひ出は苦惱の祕密である。其の祕密を私は、愛する三人の子供達の母に平和と光明とを與へ給へといふ祈りを込めて、神に打ち明ける。嘗てダニエル・シュテルンはその著『道徳概觀』の中で『寛容は輕蔑の一種に過ぎない。』と書いてゐるが、その言葉は非常に不適であり、間違つたものである。私はダニエル・シュテルンに對して、彼女の死後は最早その生前と異つて、自らを偽らなければ悲しんでやりたくない。といふのはダグー夫人は間違つた事を非常に好む性質、否寧ろ間違つた事を特別好きだつたからである。——憂鬱なる状態の或る瞬間を除けば、だが彼女は後になつてこの事を想ひ出すことはとても出来なかつたのだが。」彼女が社交に餘り慣れてゐなかつた爲に、絶えず起つて来るやうになつた色々な面白くないことにより、不調和はいやが上にもひどくなるばかりであつた。その當時彼女自身、内心では後悔し、不幸な氣持でゐたので、良い友達

忠告は二人にとつて非常に有効であつた。このやうな状態の下に、彼等自身にも氣のつかない事件がこの現状を打開することが出来た。即ち或る事件が間もなく起つたのである。リストがロラ・モンテツツに關係したといふ事に就て伯爵夫人に通知が齎された。夫人はその爲にリストに失禮な手紙を書き、リストが強い言葉で彼女の申出を拒絶すると最後の別離を知らせて來た。それは彼女側からの最後の言葉であつたのである。リストは彼女にその手紙を取消す機會を與へる爲に、暫らくぐづ／＼してゐたが、そんな事が起らなかつたので、眞面目に脅迫状まで送つたのである。伯爵夫人が本當に別離を目論んだといふことは到底信じられないことであるし、又口實とした事柄が確かな事であるなどとは考へられさうもないのである。何故なら、リストに對して夫婦の誠を殆んど果さなかつた彼女は、かうして一人の踊子との馬鹿々々しい遊び事を、このやうな衝突の原因にすることが出来たのであるから。この別離はリストがパリーに到着する少し前に起つた。伯爵夫人は今度は復讐を企てた。彼女の行狀は、リストが當時或ひはその後手紙や口頭で彼女に就て述べた判斷が何の誤りもないといふことを證明してゐる。伯爵夫人がしたやうに、自分がひどくいら／＼して居れば、公衆の中でも非常に低級な手段を取るやうな人間は、人々が今日主張してゐるやうな高貴なものではあり得ない。彼女は批評家達を買収して、その時既にパリー到着が報ぜられてゐたリストの公開演奏會を失敗させようと目論んだ。然しながらこの試みが悲しむべき失敗に終つた時、彼女は女性の名譽のために大いに逆上して、ネリダ（一八四六年刊行）といふ小説を公表したが、此の小説は彼女とリストとの關係を對象とし、失敗に終るまでの凡ての罪を畫家ゲルマン（リスト）に歸して、彼の名譽を傷つけ、他方彼女自身は貴い不幸な女性として同情を得るやうに書いたものであつた。此の醜い辯解の試みは彼女の新しき戀人ドゥ・ロンショーに寄せられたものであつたではないか!! リストに向けて放たれた矢は、彼女自身の上に飛び歸つて來たのである。

リストはパリで、伯爵夫人と手紙で、子供達の教育に關する取り決めをした。即ち二人の女の子はベルナル夫人の上流教育所に送られ、其處に一八四八年の秋まで居ること、ダニエルはパリーの小學校の一つであるリセー・ボナパルト入學まで、續いて祖母の下にゐることであつた。リストは自分一人で教育費を負擔し、以前彼の母がしたやうに、如何なる場合でも子供達は安全であり得るやうに、子供一人々々の名で相當額の金を貯金して置いた。子供達はその國籍に従つてハンガリア人と見做されてゐたので、オーストリアの皇后を通して、彼等のためにも、その「法律上の公認」を得ようと努力した。それでリストはラムネイ神父に次のやうな手紙を書いた。「私の子供達を出来るだけよい立場に置きたい。そして私の若げの過ちの名譽を出来るだけ取りかへしたい。」リストが子供達の教育を彼等の母の危険な影響の下から引離さうと、どんな努力をしても、子供達は尙母を訪ねるのであつた。それで彼は後になつても何時も子供達に父母を敬ふことをさせなくしてしまつた。その當時リストは二人の娘のために、ラマルティエヌの「目覚めたる子供の讚歌」といふ子供の讚歌を作曲した。其後ダグー伯爵夫人ともう一度一寸會つたのであるが、その時のことについては後に述べることにしよう。

パリに於ける公開演奏會として、リストは一八四四年四月十六日と二十五日に、イタリア・オペラ座で催された二回の大演奏會に全力を盡して出演し、其のプログラムは全然彼自身の作曲か編曲で埋められて居り、一萬二千フランに上る收入を擧げた。その結果として今までパリで云はれてゐた凡ての非難は消え去り、一八四二年ベルリンで起つたと同様な感激が起つた。

リストがやつて來た時に、ハインリッヒ・ハイネはその熱狂ぶりについて次のやうに書いてゐる。「リストがドイツに行つた時、ドイツ特にベルリンに、大騒ぎが起つたといふ山師的な事について前に聞かされた時には、幾らか同情的氣持を抱きながら、肩をすくめてこんな風に考へたものだ。いくら安息日のやうに靜かなドイツも、少し位は騒ぐ機會を逸しないことだらう。そんな事はけだるい手足を少し動かせばいふんだらうと、こんな風に私はリスト狂を自分で説明し、リスト狂を政治的に未熟なラインの向ふ岸の状態の特徴だと考へた。然し私は、それでも思ひ誤りをしてゐた。私はそのことを、前の週に、リストが最初の演奏會を開いたイタリア・オペラ座で、その人々が現代社交界の華と名づけ得る聴衆の前で、やつと氣がついた。彼等は決してドイツ的な感情を持つたベルリン風な趣味の聴衆ではなかつた。そしてそれでもなほ……。もう彼が唯やつて來ただけで大變な騒ぎであつたのだ。聴衆が彼に送つた拍手の激しかつたこと！ 何といふ歡呼！ それは本當の熱狂であつて、こんなことは今までの何處を探しても前代未聞のことであつた。」

一八四四年四月二十五日の日附があるこの文書は、特別に重要なものである。ずつと前からもうリストに對して冗談を云ふことを止めてゐたハイネが、リストのことについて書き、そのことが兩人の間の破綻を起させるやうな事になつた最後の文書であつた。此の交際は、リストの側から見れば決して心からのものではなかつた。彼が云つてゐるやうに、ハイネのやうな人間は彼の興味を惹かず、リストはハイネの金を請求するやうなことには何らの趣味もなかつた。そしてハイネはいつも悲惨な態度を示してゐた。演奏會の時に、ハイネはリストに無料入場券を頼み、その後彼に次のやうに手紙を書いてゐた。「最愛の友よ、私は明日二時から三時までの間、私の家で貴方の來訪を待つてゐます。私は既に貴方の第二回の演奏會の前に發表すべき最初の記事を書き上げましたが、その中には多分貴方の氣にいらぬことがあるでせう。ですから私が前以て貴方にお話しすることは全く正しいことです。貴方の友、H・ハイネより。」

リストは此の論説の二三の箇所について意見の衝突を來し、それは終には論争とまでなつた。ハイネが其後リストに送つた大論争を彼が受附けなかつた時、ハイネは彼の辛辣な口調を尙激しくし、惡意に充ちた結論を與へたが、其中でハイネはリストの慈善好きを初めとし、彼の凡ての行爲を、下等な動機を持つたもののやうに書き、凡ての「目覺ましき」を上手な芝居、自分で買つた花環、買收した人々の送る拍手、買收した批評家等によつて説明しようとした。リストの目的を最早自分達の役に立たないものと認めるや否や、最も卑劣な遣り方で中傷し、自分達の性格を却つて怪しげなものにする彼の友人達の中で、ハイネは常に大きな存在であつた。リストは此の時から當然完全に彼を無視した。或る時彼の面前でハイネに關する論争が行はれ、人が彼の否定的な認識に抗辯した時、リストはぶつきら棒に「然し貴方は、それでも尙ハイネといふ詩人の名は不滅の殿堂の中に書き込まれてゐることを信じないのですか？ 否、寧ろ汚辱を以て。」と答へた。

五、再度の歐洲大旅行 (一八四四年—一八四七年)

パリでの生活の後、リストは南部フランス諸州を巡回旅行し、リヨン——此處では町の貴婦人達から金の月桂冠を贈られた——マルセイユ、デューロン、ポルドーで演奏會を開き、次いでピレネー山脈を越えてスペインに赴いた。此の際に彼は再び若き日の戀人カロリーヌ——現ダルティゴ夫人——の住んでゐる小都市パウに滞在した。十六年後に彼等は再び會つたのである。パリでの出來事の直後に於て、この邂逅が彼にどんな感動を與へたか。彼がどんな感情に目覺めたかは容易に推測出来るところである。惱める魂は全く内面的な感情から現れた壓倒的な歌「我行

かん」(ich möchte hingehen (ルウェークの詩に依る))となつた。

今一度若き日の戀が彼等の心の中に復活し、別れに臨んで、彼等は毎日アヴェ・マリアの鐘の鳴る頃にお互のことを想ひ出すやうにと約束した。

此の日以來リストは、愛してゐない人のもとにあつて、靜かな受難に耐へてゐる不幸な夫人と手紙の交換をした。「それでも尙私は心の能ふ限り貴方を愛し、私自身は最早知らない幸福が貴方に與へられることを望んでゐます。私の生活の唯一の望みの星を貴方の中に見せて下さい。貴方のために毎日天にお祈りして居ります。神様、彼に報いて下さい。特に彼の神様への不變の服従に報いて下さい。」と後年彼女は一度彼への手紙の中に書いてゐる。一八七四年彼女の優しき魂の靜かなる死が許された。

リストはパウから更にマドリッドに行つた。彼は此處で一八四四年十月一日から十二月二日まで七回の大演奏會をテアトロ・デル・キルコで開き、各回に二萬レアルの收入を得たといふ事である。この結果は前代未聞のものであつた。南國の情熱的な人々は感激せる感情を最高度に表はした。人々は十一月四日、彼に七寶の月桂冠を金で描き、「マドリッド管絃樂團員、一八四四年」と云ふ銘を入れて彼を讃へた大きな盾を贈つた。彼はスペイン宮廷儀禮に反して、王室會々員に推された後、宮廷でも屢々演奏した。藝術家の地位は罪多きものであることを彼は信じてゐたが、それは正しいことであつた。イサベラ女王はカルロス三世の騎士の勳章を彼に與へ、高價なダイヤのブローチを贈つた。リストはマドリッドからリスボンに直行したが、こゝでも勝利が繰り返された。此處で彼はマリー二世女王からキリストの勳章とダイヤモンドをちりばめた煙草入れを贈られた。それに次いで彼はピレネー半島の首都に赴いた。スペインとポルトガルに滞在中は、同じやうに絶えざる興奮を捲き起した。祝宴は絶間なく行はれた。リストは

情熱を以て享樂生活の大波の中に没頭した。それは彼にとつて一種の自己陶醉であつた。又スペインでは、彼はジブシーと接觸し、彼等の本性とハンガリア・ジブシーの本性との相違を研究した。スペイン狂詩曲は後年この滞在の記念として作られたものである。彼はマルセイユ、リヨン、メーコン——此處では數日間、既に前の旅行の時にも訪ねたことのあるラマルティエヌを訪問し、一八四五年五月末ブレリユードの草案を作つた。——を経てエルザスに赴き、コルマール、ストラスブルグ、ミュールハウゼン、メッツで演奏會を催し、更にドイツ領スキスに寄り道して、チューリヒとバーゼルに留つた。リストがバーゼルで演奏會を始めようとしてゐた時に、其の時はもう會場は賣切れになつて一つの座席も見出されなかつたのに、どうしても入らうとしてゐる若い男が雨の降る外に居るといふことを知らされた。リストは直ぐに出て行つたが、其の時一文の金も持つてゐなかつたから、リストを聴くためにチューリヒからバーゼルまで徒歩でやつて來た若い音樂家ヨアヒム・ラフを見出した。リストは彼を自分の舞臺に坐らせて、更にドイツに連れて行つた。ラフは彼の下にあつて、ボンのベートーヴェン祭の間、祕書の代理をし、後リストは彼にケルンの樂譜商ルフェーブルに就職させた。

リストは八月十二日に行はれるベートーヴェン記念碑の除幕式の最終の準備を監督するために、一八四五年七月の末にボンに到着した。リストが既に一八三九年、彼がバルトリニを推薦した時に、若し彼に彫刻家の選擇が任せられてゐたとしたら、計畫された記念碑に對して未だ足りない處を自分の力で何とかしようと言つたことを、今此處に想ひ出して見よう。委員會は彼の提案を大喜びで取り擧げたが、イタリアの彫刻家を選ぶといふことは、ドイツ藝術家聯盟の中に烈しい不平を呼び起した。又人々は青銅の立像よりも大理石の方がよいと云ひ出した。リストは、それで彼の條件を撤回し、一萬フランを出して損失を補つた。一八四〇年に發表せられた賞金附コンクールに賞を得た

人の中から、ドレーステンの彫刻家エルンスト・ヘーネルが記念碑を作る名譽を贏ち得た。遂に一八四五年に記念碑が完成した。其の除幕式の祭典には、例外として大學の音樂指揮者K・ブライデンシュタイン博士が企てた除幕の合唱と、委員會がリストに作曲を依頼した祝典カンタータのある他は、唯ベートーヴェンの作品のみを演奏すべき三日間に及ぶ音樂祭がボンで計畫せられた。リストがボンに到着した時、祭典のために委員會によつてなされた準備が、全く不充分である事が直ぐ分つた。人々は此の祭典に相應しくない廣間を選んだ。リストが見たところでは、其處には適當な場所が一つもなかつた。彼は直に決心して、祝祭堂を建築せねばならぬと公言し、設立の費用を引受けた。彼は凡ての必要なことを監督したが、實際十日間に、無に近いくところから美しい、凡ての要求に合致した祝祭堂が出來上つた。シュポア、ベルリオーツ、マイヤーペール、モシユレス、フェティス、シントラー、ウエーゲラー、レルシュタッフ、ヤーニン・コーレー等、澤山やつて來る祭の客の宿も用意してなかつた。其上に尙すぐ近くの沼澤地方に滞在してゐた皇帝フリードリッヒ・ウィルヘルム四世が宮廷の人々と共に祭に列席されるといふ通知が到着した時、混亂は最も昂まつた。此處でも亦リストは、何とかうまくやる手段を發見しようとした。八月十一日の祭日の前夜、シュポアの指揮により第九交響曲と莊嚴ミサ曲を以て最初の演奏會が開催された。次の日の十一時半、記念碑の覆ひは除幕の合唱の響の中に落され、この記念碑を贈られたドイツ國民は誰でも、ドイツ人が幼少時代から尊敬してゐた天才の特徴をはつきりと再現してゐる此の記念碑を眺めた時、恍惚とした様子をして、しんみりとした氣持で立つてゐた。「私は人間の顔の中に、この時程高貴で崇高さに充ちた表情が輝いてゐるのを見たことはなかつた」とコーレーは此の光景について書いた。午後になつてリストの指揮のもとに大祝祭演奏會が開催された。リストはハ短調交響曲とフィデリオの終曲を指揮し、更に自身で變ホ長調ピアノ協奏曲を演奏した。打續いた饗宴の席上で、リストの嫉

妬深い同僚、即ちワイマールの宮廷樂長シェーラーが原因となり、羨望と猜疑によつて惹き起された烈しい論争が個々の客とその流派の間に起り、この論争は終には異つた黨派間の公然たる敵對にまで變化し、翌日の最後の演奏會が問題となつた。この氣持は宮廷の人々の到着が後れたことから益々惡化した。此の日の主要演奏曲目は、合唱、獨唱及び管絃樂のためのリストの大祝祭カンタータであつた。樂士達によつて一部分弱く演奏されてゐた作品の最後の音が、宮廷の人々が入つて來た時には殆んど聞えない状態にあつた。リストは冷然として曲を反復せしめ、今度は烈しい表現をして、問題のない大成功を収めた。新聞紙上ではこのカンタータは非常に好評であつた。祝典は兎に角多少の利益を擧げて終り、ボン市では感謝の念を込めて、リストを讃へるために、彼の名を冠した街を作らうとした。然しリストはそれを拒絶した。その後一八七〇年、ベートーヴェンの第百回誕生日に、再び大ベートーヴェン祭が行はれた時に、人々は恥しげもなく、「前進的ナリスト」に凡てを任せないのみならず、リストの對立者ヒルラーの手に指揮を委ねた。それがボン市がリストに何回も誓つたところの感謝の表明であつたのだ。

既にボンの音樂祭の間にリストは不快を感じてゐたが、度々興奮したり激昂したりしたため彼は病氣になつた。彼は膽熱のため永い間ケルンで病床に横はつた。ベートーヴェン祭に出席してゐたカレルギス夫人が彼の看病をした。その後回復期には彼は數週間バーデン・バーデンに移つて、年末を送るために全然社交界に顔を出さなかつた。此の時彼はメーコンで見染め、自分に對する同情を贏ち得たと思つたラマルティヌの姪、伯爵夫人バレンティヌ・セシアートに求愛した。然し尙伯爵夫人は、彼女が世話しなければならぬ伯父を見捨てる決心がつかず、リストの申込を拒絶した。この事は、リストが定つた生活、一定の住ひにどんなに憧れて居り、彼に相應はしい婦人が彼の前に現れるや否や、彼はこの希望を如何に實行しようとしてゐたかが分るのである。

一八四五年十二月から一八四六年二月までリストはワイマールの契約を履行し、三月の初めに其處からウィーンに移つた。彼が六年以前から現れなかつた此の土地で、三月一日から五月十七日に至る間に十回の自分の演奏會を開いたが、その會に於て彼の豊富な藝術性を理解したやうな批評が與へられた。或る日、ロンドン街の彼の宿舎を十五歳のヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒムが訪れた。リストは彼と共にメンデルスゾーンの協奏曲を「特に終樂章を何時も右の手の人差指と中指との間に火のついた葉卷を持ちながら、比類なきやり方で」演奏した。ヨアヒムはリストにとつて非常に感激された人間であると同様に又藝術家であり、彼はリストの旅行に同行して、四月十七日にベルリオーツが彼の劇的交響樂ロメオとジュリエットを指揮したブラーグへ行つた。リストは總練習を彼と共にやり、其後オルミユッツ、ブリュン、マールブルグを訪れ、六月中グレッツにある彼の友人フェリックス・フォン・リヒノフスキーの城に滞在した。彼の滞在を記念するために、友人は庭園の中の彼が最も好んだ席の邊りに、金文字で「リストの席」と銘を入れた花崗石を立てた。其後彼は更にロヒツチ、アグラム（七月十七日）、エーデンプルグ（八月三日）で相續いて演奏會を開いた。エーデンプルグでは、縣の陪審員に任命され、そこから再びライディングに小旅行を行つた。其處で彼は近くにあるジプシー團と接觸しようとした。「吾々は彼等の凡ての中にあつた。彼等と共に凡ゆる處に行つた。星の輝く大空の下で寝た。彼等の子供達と遊んだ。彼等の若い乙女達に贈物をした。大頭領達や酋長達と雑談をし、彼等獨特の焚火の輝きの下で、彼等獨特の聽衆の前で行はれる彼等の演奏を聴いた。其の演奏の出演者はその場で定められるのである。」リストは後年、既に屢々引用した「ハンガリアに於けるジプシーと其の音樂」なる彼の著書の中で、彼がジプシーを屢々訪れて集めたこの自然の子に關する見聞と知識をまとめてゐる。彼がジプシーの許でなした音樂の勉強は、同一八四六年にハンガリア狂詩曲なる表題のもとに、ハンガリア國民旋律の更に五冊の

帳面となつて實を結んだ。

リストは此のオーストリアとハンガリアの色々な町での演奏會の間には、主として彼が何時もの住居を定めてゐたウィーンに歸つた。此處で彼が交際した人々は、主に彼の伯父エドアルド・リスト、樂譜商トビアス・ハスリンガー、銀行家S・レーウィー、出版業者スピナ、メッテルニヒ侯爵などであつた。それ故、人々はリストを完全にウィーンのものにして、ドニゼッティの代りに王立室内樂長の地位に任命しようと思つた。然しその事は實現出来なかつた。リストが既にその頃——即ちウィットゲンシュタイン侯爵夫人を知る前から、彼の名技的演奏をやめて、將來は作曲することに重點を置かうと決心したことが、一八四六年十月六日ワイマル大公に宛てゝ出した以下の手紙から明らかになつた。

「三十五歳になつて、名技といふ、自分の意志を持たない人形のやうな状態を打ち破つて、勿論多少の制限はあつても、私の考へを自由なものにする機會が突然やつて参りました。若し私が何時も言ひ度くて言ひ得なかつた不幸な金銭上の問題が、私が若い時心を奪はれたやうな多くの空想的なものでないとしたら、私は既に四五年前にさうなることが出来たのでせう。然しさて今私は有り難いことには、餘り多くのものをなくしてゐません。榮譽は清淨のまゝであります。私の生活には一つの汚點もありません。私の言はうとする主要な問題は唯普通の男であり度いといふこと、作品と行爲を通じて心の中に、中心となるもの、萌芽となるものを作り度いといふ事であります。この事を可能ならしめるために、私の生活の今までの手段であり、主要な目的であつた旅行を、今此の時に、餘り重要視しないやうにしなければなりません。私は之以上見物しなければならぬ處は一體何處でせう。それは主にイタリアの一部と東洋とスウェーデン地方であり、最後は多分アメリカでありませう。然しそんなことは皆急ぐ必要はなく、一度平靜になつてからでも充分に出来ます。

「今私には、最近六年間に私の個性が藝術家として有名になつたやうに、私の作品を劇場に適合させることが遙かに重要な目的であるやうに思はれます。私は今後數年間に、此の新しい職業の決定的な結果を得てしまふやうに心掛けようと思ひます。そんなことをやつて、私が使つた時間や忍耐に相當するやうな歌劇の脚本を作るやうになるなどとお考へになつてはなりません。何故なら私は二つのイタリア歌劇を同時に書いて、雙兒同士を最初の作品として人の目を驚かせようといふやうな心臓の強さを持つてゐるからです。それまでに別に妨げがありませんでしたら、ケルト・ナートル劇場のイタリア劇團は來る五月、私の作つた旋律を咽喉一ぱいに歌ふこととせう。『幸福!! 苦痛!! 威儀と愛情!!』と。

「私が今ジーベンビュルゲン、ブカレスト、オデッサ、コンスタンチノープルに旅行してゐることは私の幾分困難な藝術的敗北に對して、或る關係で口實を與へることになるでせう。私が平和にワイマルに住み、私の素性を其處で靜かに守ることにすると、何時も殿下の事を思ひ浮べるのであります。だが私は一面に於て、二人の畸形兒をうまく生むことが出来た場合、餘りにも純潔な町のよき安靜を危険に曝すことになりはせぬかと心配しなければならず、又他方、私は今のところ、ずつと金がないので心苦しい感じがします。そして一ペーニヒでも借金を作つてはならぬいと深く決心してゐます。」

今述べたばかりの二つの歌劇の中の一つは「サルダナバル」といつて、ベルジオジョウ侯爵夫人が最大の注意を以て書いた臺本であり、他の方は未だに分らないまゝになつてゐるが、二つとも上演されなかつた。「サルダナバル」は確かにその斷片が保存されており、リストは一八五〇年、シュレージンガーを通じてこの歌劇を上演するやうに、パ

リーのイタリア・オペラ座の支配人に申込んだ。これに反して三つのソナタ、ペトラルカ、二つのソプラノ、テノール、バスのためのアヴェ・マリア、それから四人の男聲のためのパーテル・ノステルが當時のウィーン時代に出来上つた。リストは彼の友人である樂譜出版業者のスピナから其の時、ベートーヴェンの意義深い贈物としてブロードウッド・グランドピアノを贈られた。スピナはベートーヴェンの遺物の中から、そのピアノを百八十グレンでせり落したものであつた。リストが死んでから、それはベスト市の國立博物館の中に納められた。

名技的な行ひを如何に彼が嫌つてゐたかといふことは、モウクハノフ夫人に宛てた次の手紙で明らかに分る。「私は『魔王』といふガタ／＼する曲を演奏する程になりました。この曲は疑ひもなく立派な作品です。然し私は聴衆によつて墮落させられたのです。そして死せるオクターヴの永遠の體操をするやうにまで致命傷を負はされてしまつた名技に従ふといふことに際して、厭ふべき必然性、即ち此の同じ事をく／＼と反覆することは、一體どうしたことなのか。」

ウィーンを去つて、リストはブダベストに永い間滞在した。彼が大眾によつて王者の如く迎へられた後、凡そ彼が最初に滞在した時（一八四〇年）に拂はれたのと同様の尊敬が繰返された。名譽市民の任命、金の月桂冠の授與、高價な贈り物——其の中には彼の肖像を入れた金のメダルがあつた——炬火行列、祝賀の宴會等が行はれた。次いで彼の友人フォン・アウグスツからの招待が来た。それで彼は數日間友人のスツェグスツアルドの別荘を訪ね、彼と共に音樂好きの大僧正フォン・グランやフォン・フィルヘンのヨーハン・フォン・シトフスキーを訪れた。彼は此の時に大僧正に、その寺院のために一つのミサ曲を作曲することを約束したが、其の約束は後になつてから果された。

リストは一八四六年九月にジーベンビュルゲンと南ロシアを旅行して、ギェンツ、ケールチッヒ（九月二十七日）、

テメスヴァル（十月二十七日）、アラード（十一月九日）、クラウゼンブルグ（十一月二十三日）、ブカレストの諸都市に滞在し、最後にキエフへと向つた。彼は此處で一八四七年の殆ど二月一杯を送り、ウィットゲンシュタイン侯爵夫人と相知つた。彼は彼女の宅ヴォロニンスに少しの間留つてから、更に演奏旅行を續け、チエルニー・オストロフとレンベルグ（四月十一日）で演奏を行つた。此の土地を去つて、彼はチエルノヴィッツ（五月二十三日）、ヤッシー・ガラツツからコンスタンチノーブルに赴き、其處に六月の初めに到着し、七月の中頃まで留つた。トルコ王は彼に多數の贈物をした。リストが此の旅行の途中でミルツェスキーにあるバシレ・アレキサンドリスの城に滞在してゐた時、彼はルーマニア・ジブシーの演奏を聴かうと思つた。ジブシーの指揮者バルブ・ラウタールに依つて率ゐられたジャッシー樂團がやつて来た。リストはその演奏を聴いて、全く恍惚となり、「君は、私に君の音樂を全部知らせてくれた。今度は私の音樂をお聴きなさい。」とバルブに言ひ、グランドピアノの前に坐つて、ハンガリア行進曲を即興演奏した。彼は自分から蕩然となつてゐるやうであつた。聴いてゐるバルブも魅了されてゐるやうで、殆ど見もしようとしなかつた。バルブ老人は眼を大きく見開いてリストを見つめて居り、一音も聴き逃すまいとしてゐた。リストが演奏を終り、若者達が我に返つた時バルブは此の旋律の中にリストは何を云つてゐるかを訊ねようと思つた。「先生、あなたの演奏は大變綺麗でした。だから若しそんなことをお許し下さるなら、あなたの演奏なすつた曲を一度やつてみます。」リストは幾分いぶかしさうに笑つた。それでバルブは彼の管絃樂の方に向き直り、ヴァイオリンを頸に當て、ハンガリア行進曲を演奏した。その旋律の中のトリル一つ、アルペジオ一つ缺けてゐる處はなかつた。音から音へと彼は繰返し、樂員は本能的に彼の弓に従ひながら、彼の伴奏をしてゐた。彼等が終つた時に、リストはバルブを抱きしめて云つた。「君は確かに神の恩寵を受けた藝術家だ」と。

リストはコンスタンチノープルからオデッサに赴き（一八四七年七月）、その隣り町エリザベトグラードではリストが非常に熟練した演奏を示した爲に大騒ぎをされた。彼は十回の演奏會を行ひ、又エリザベトグラードだけでも劇場で四回も演奏した（一八四七年九月）。此の演奏會を以て、輝かしき名手としての生涯を突如として打切つてしまつた。これはリストが自分一人の演奏會で、公けに演奏した最後の機會であつた。妨げられることなく眞面目な仕事に専心出来るやうな自由な住居を求めて、ずつと前から日に日に昂まつて來た彼の望みは、外面的な事件——即ちウイットゲンシュタイン侯爵夫人との交渉によつて、突然明確な姿をとつた。——此のエリザベトグラードといふ地點は、私のために、私が今までずつとやつて來たやうな演奏會生活の最後の機會を印した。私は其の間に、時間をもつと有効に利用するやうになることが出来ると思ひ、靜かな環境の中に住むことを期し、そのことを速かに實現しようとした。二目見てすら蕩然たらしめた此の英雄的な大星は、藝術の天空にかゝる彗星の如くに消え去つてしまつたのである。

六、リストの演奏

然し我々がリストの演奏の偉大なる魔術は何處にあるかといふこと、又磁石のやうに、大衆を逆ふべからざる力で見つけて、彼等を狂氣にまで至らしめ、正に「リスト狂」と名づけて憚らないやうにするものは何であるかを探求するならば、要點として次のことが擧げられる。即ち正しくリストは、彼以前の凡ての名人とは異つて、彼の演奏した曲の單に技術的に完成された模倣者ではなく、自己創造者であつた。彼が或る作品を演奏する時には、聴衆は目の前

に一つの作品を書く。一つ一つの感情の強調點が確信的に自から生かされて表現されるので、彼は聴衆を心の最も奥深く包み込み、更に聴衆に無條件に同じ感情を暗示させずには置かなかつた。彼は最早演奏を示すのではない。自己を示すのである。彼にとつて名技主義は單なる手段であり、彼の感じる凡てのものは残りなく表現される。だが決して目的ではない。彼はそれによつて相手を超えて天の高さまで自らを高める。彼は或る時、此の立脚點を非常に適切に次のやうな言葉で表してゐる。「名技とは藝術家が藝術の中に表現される凡てのものを再現することが出来るためにのみ存在する。此處に於てそれは缺くべからざるものであり、充分には行ふことの出来得ないものである。藝術家にとつて名技といふものが單に感情を裝飾する手段ではなく、寧ろその心の一ぱいを、そして言ひ度い事全部を述べようといふ感情の表現手段であるといふことを、藝術家によつて表されてゐるのを見た時に、初めて我々は本當に名技といふものを正しく評價することが出来るのである。」

次にリストの生涯の色々な時代に、自分で直接に彼の演奏を聞いた人々が二三の敘述をしてゐるものがあるが、それを此處に纂録して見よう。これは彼の演奏が色々な聴者に與へた印象をはつきりと述べてゐるものであるから。有名なリスト研究家ハンス・フォン・ブロンズアルト（一八五四年）は次のやうに書いてゐる。（著者への書簡による。）「聴衆は演奏中には、授業を受けて居る時の生徒のやうに、天才の最も驚くべき啓示に直面してゐる。導き方、即ち恰も雛形の如きものは、リストには他の凡ての有名な藝術家の場合と同様に、殆どなかつた。彼は聴衆を此の特性によつて導いて居り、此のことを殆ど確實に知らしめるといふことは、凡ての優れた天才に固有のことである。同時に關節を動かして演奏する場合の技巧に於て、凡ての關節が愉快に、そして何もぎこちなさがないやうに動いた。（勿論謂はば『知らず』の中に）さうすることが出来たのだが。）そこで力も音の美しさも——所謂、綺麗な演奏は——こ

のために出来たのに違ひない。彼は偶々次のやうな反語を云つてゐる。「手といふものは鍵盤にひつついてゐるより、寧ろ空中に漂つてゐなければならぬ」又は「人はベートーヴェンを演奏するためには、弾くことに捉はれてゐてはいけないので、寧ろその技術を捉へなければならぬ」と。

再びリストの永年の友であり、有名な作曲家であるフェリックス・ドラエスケがリストの演奏の印象を特徴づけてゐる。(一八五八年、著者への書簡による。)

「私は他のどんな名手とも彼の演奏を比較することは出来ない。それは最もよく特色づけられてゐるので、或る曲は彼が手がけて初めて曲になり、従つて私には丁度藝術上の即興演奏のやうな効果を何時も與へたものだ。そしてこれは全く容易に行はれたので、同じ曲を別の場合に再び演奏される時には、全く新しい曲のやうな印象を吾々に與へた。彼の演奏は主観的なものであり、又氣分に支配されてゐたが、それでも尙何時も謂はば再現された作曲のやうな風であつて、その作曲が十分に正しく再現されたものといつてよからう。といふのは解釋が常に高貴で、偉大で、人を感動せしめるやうなものであつたから。彼は本質的には特別の名手的効果を行はうと志すやうなことはせず、他方を彼は又ピアノを教へるやうなこともしなかつた。彼のやり方に於ては、何人も彼と比較するものはないだらう。彼が既に技巧を忘れてしまひ、一八六九年にローマで眼鏡越しに彼のトリスタンの變奏曲を私に演奏してくれた時、私は突然魔法をかけられたやうになり、もうピアノには氣がつかず、風琴を聞いてゐるやうに思つた。」

彼の全く有名な門下生であり、彼に相應しき後継者で、非常に若くて死んだカール・タウジツヒはW・フォン・レンツに次のやうに言つてゐる(一八六〇年)。「私は獨りでかう思つてゐます。私はドン・ファン幻想曲をととも弾きこなすことは出来ない。どうしてもむづかしい。唯リストのみがそれを弾きこなす。唯彼のみが。これは彼の與へた印

象の祕密である。世間の人は『彼はピアノのバガニーニである』と云つた。それは本當であり、彼も認めてゐる。然しそれでは不充分である。リストの場合でも、音樂藝術の全領域に亘つて、又最も偉大なる著名な作曲家の全體に亘つて、無條件に支配するといふことが、凡ゆる形式に於て表現されてゐる。この大きな全體から、彼の場合に、名手といふものが出て來るのであり、單に名技主義に止つてゐたバガニーニはその點にまでは到底及ばない。」

更に又リストの女弟子で有名なカンマーヴェルトウオージンの稱號を持つてゐるラウラ・ラポルデー・カール教授が次のやうなはつきりした敘述を行つてゐる。(著者への書簡による)。「私はリストが毎日屢々數時間に亘つて(一八七〇年)、殊にバハとスカルラッティを弾くのを聞きました。ピアノは最初はオルガンのやうに——リストはバハを最早今では誰も聞けない程非常にゆつくりと弾きました。——終りには之に反して丁度一世紀前のスピネットのやうに私には思はれましたのに、それでも尙それはあのベヒシュタインのグランド・ピアノでありました。彼のタッチは凡てそれ々の作曲家によつて異つてゐましたので、みんなは全く異つた樂器を聞いてゐるのだと思ひました。私が最も驚いたのは、リストが或る程度まで、彼の指で樂器を作り、それが主として彼自身の作曲したもので、殊に彼の幻想曲に於て表現されるといふことでありました。幻想曲を演奏する時、彼は驚くべき、そしてその後決して聞かれない色彩の豊かさを示したのであります。彼の演奏は詩であり、天啓でありました。又彼は、彼が各作曲家否一つ一つの曲をすら異つた運指と、その運指に基因するタッチによつて弾いたといふ點で、例へばルビンシュタインのやうな他の大ピアノリスト達と異つてゐました。人々が例へばルビンシュタインの演奏で、いつまでも同じ樂器の音を聞いてゐるのに反して——それは今までも今後も永久に素晴らしいピアノ演奏でありますが、——リストの演奏に際してはピアノを聞きません。人々は彼の人を聞き、彼の弾く音の一つ一つの各作品に新たに自己創造の刻印を押しつける彼の

奔放に壓し進む幻想を辿るのです。」

最後に今一人（一八八〇年）八十臺になつた時のリストの女弟子であるアメリカ人、エミー・フェイがリストに關する彼女の想ひ出を「ドイツでの音楽研究」なる彼女の著書の中に書いてゐるのがある。就中此の中には次のやうに述べてゐる。「凡ての彼の演奏の中には、單に私達が密かに聞くやうな音楽ではなく、私達が自分の目の前で呼吸してゐるのを見るやうな現實の姿を彼が呼び起してゐるかの如くに思はれる生きたものがあります。彼の演奏を聴く度に私は生き／＼とした感動を受けます。私は空中に物の靈魂が住んでゐるやうに思ひます。あゝ！彼は本當の魔法使です！彼を見ることは彼を聞くことと同様に興味深いことです。といふのは彼の容貌は轉調の度に變り、彼は演奏してゐる曲の精神と同じやうな容貌に見えますから。彼の中には全く魅惑的なもの、つまりあちらこちらから私達の上へ降り注いで來る一種の繊細で偶然的な氣持の良いものがあります。彼が此のやうなやり方で演奏する時には、彼の眼光の中に深い／＼魔法にかゝつたやうな表情が現れて來ます。リストが何か悲愴な曲を弾く時には丁度彼が凡てのものから苦難を受けてゐるやうなものが鳴り響いて、凡ての人間は改めて驚きの念を表します。彼が演奏する際には、聴衆と演奏者の二人の人が彼の中にあるのです。」

名手時代はリスト自身の生涯に於ても亦音楽史にとつても一般に低い意義を有するものではなかつた。リストはピアノ演奏を凡ての外的事情、形式的なものから離れて、技術的な點でも精神的な點でも思ひもよらない高さにまで持上げた。彼にとつては技術を演奏によつてマスターすることにより、初めてピアノの能力を完全に利用する事が可能であつた。ピアノは彼の手にかゝれば管絃樂にまでなつた。彼は凡ての聲部を最大に發揮することが出來た。彼の最も著名なピアノ作品を通じて、彼はピアノ文獻に全然新たなる途を打ち開き、多くの點に大改革を齎した。彼以前に

も、彼以後にも彼がやつたやうな音樂的意欲と現實的姿態との調和は齎されなかつたことは確かである。彼がピアノ演奏を可能なる限りの完成の境に導き、それによつて彼の前に浮んでゐる目的に到達してしまつた時、彼は最早自身を凌駕することは出來ないことを充分に知り、名手の道を離れて既に長い間彼の内心で明らかかな姿を探らうとしてゐた他の最も高い問題に向きを変へた。彼は名聲の頂點に於て、凡ての外面的な名譽と勝利を棄てた。完成と集成の時は終つた。そしてより高き建設が始まり得たのである。

リストが演奏旅行中に彼の態度によつて藝術家の社會的地位のために得た高い利得に就ては吾々は既に述べた。これからは時に應じて彼が書いたものの説明をもつと詳しく述べて行かうと思ふ。然しながらこの名手時代は唯單に藝術家リストにとつて大なる勝利を意味するのみでなく、人間リストの勝利をも意味するのである。絶えず勝利を獲得し王侯の如き堅き誓ひを立てれば、弱い性格のものは必ずやこれの犠牲に倒れてしまふものであるが、この勝利と誓ひにも關らず、同情の念と念願の心に對して、これをいつも喜んで受け容れるやうな大きな涙脆い心を持つて居り、彼の態度は凡ての暗黒と妄想から免れてゐた。彼は一般が喜べば自分も喜び、多くの馬鹿々々しい狼藉騒ぎも敢へて厭はなかつた。然し眞面目な要件に於ては、彼は殆ど固苦し過ぎる程の良心を持つた紳士であり、惡の面に屬することとは彼には全然なかつた。「義務を負うた天才」とは彼のモットーであり、彼の規範は、彼が素晴らしい言葉で言つてゐるやうに、

「汝自らに忠實なれ、汝が心中で最善、最重、最正、最純なりと思ふ事に忠實なれ、『何か』あり、『何か』なることを心配する勿れ、されど個人であること、更により以上個人になることに根氣よく熱心に務めよ。」といふ言葉であつた。

ワイマール時代 (一八四八年—一八六一年)

一、カロリーネ・ザイン・ウイットゲンシュタイン侯爵夫人

キエフに於けるリストの慈善演奏會(一八四七年二月)の際に、ある婦人が入場券を手に入れるために、百ルーブルの金を拂つた。リストは直ちに彼の祕書ベロニを彼女の宅に送つて、何時彼女の前で演奏して御覽に入れませうかと問合はせた。しかし、その婦人はキエフの市民ではなく、ホテル住ひをしてゐたので、此の望みは實現されなかつた。リストは感謝の意を表すために彼女を訪問した。その婦人がカロリーネ・ザイン・ウイットゲンシュタイン侯夫人であつたのである。彼女はポーランドの貴族ベートル・フォン・イワノフスキーと、美しいが享樂的なパウリーネ・フォン・ポドスカとの夫婦の間に生れた唯一の子供であつた。カロリーネは彼女の母方の祖父の領地モナステルツィスカ(キエフの行政縣)で、一八一九年二月八日に生れた。彼女は本當の草原の子として自由に何物にも縛られずに生長した。両親は別居生活を営んでゐたので、父が彼女の幼年教育を監督し、彼女をいつまでも子供らしく育てた。彼女は彼から強い論理的悟性を受けつぎ、若い頃、父の農業上の仕事及び父個人の科學研究を父と共同でやらされたので、彼女の精神能力は感情生活の代りに非常に發達してゐた。彼女の十一歳の時から、多くの場合母親が彼

女を教育した。母親はウィーンの社交界の婦人として冬の間ずつと大都市を旅行し、貴族社會で重要な役割を演じて居り、娘を社交界と大都會の享樂に導いた。それ故彼女は既に幼い頃から社交界に慣れ、廣範な教養と世間的な經驗とを身につけた。夏中彼女は父と一緒に仕事をし、社交界の夫人の間では全く思ひもよらないやうな専門知識を得た。例へばラテン語を彼女は完全にマスターした。そこで彼女は屢々夜遅くまで父親に協力したので、疲れと戦ふために若い娘にはたしなまれない強いハバナ葉巻を喫ふ事にも慣れた。彼女は十七歳の時、父の命により父と親しいウイットゲンシュタイン元帥の末子で、七歳年上のニコラス・ザイン・ウイットゲンシュタイン侯爵と、彼の申込を三度拒絶した後で夫婦の縁を結んだ。一八三六年五月七日に結婚式が行はれた。ウイットゲンシュタイン侯爵は美しいが精神的には空虚な若者であり、今まで以上にひどく放蕩をするために、若い妻の豊かな持參金を目當てに結婚したのであつた。結婚は最初から不幸なものであつた。カロリーネが夫の輕浮な近親者の罪をかばふことをきらつた時、公然たる不和が起つた。親類達はそれ以來彼女を極端に憎み、出來るだけ彼女につらく當ることばかり探した。一八三七年二月九日に彼女に授かり、マリーといふ名をつけて貰つてゐた娘が、彼女の唯一の慰めであつた。世間に知られるやうな喧嘩が起きないやうに、夫婦は互に別居をした。カロリーネはポロニスの彼女の莊園に歸り、此處で管理と母としての義務と共に、精神的興味、即ち文學と哲學の研究と彼女自身の著作に身を捧げた。リストが彼女の生活に現れるまでは、そんな事情であつたのである。毎年二月に南ロシアの大地主は取引を締結するためにキエフに集まつたが、ウイットゲンシュタイン侯爵夫人も亦此のためにそこに赴いた。彼女は決して美しくはなかつた。彼女の黒い髪、黒ずんだ瞳、異常に線の鋭い横顔は、東洋人的な、殆どエダヤ人的なものを持つてゐた。而もなほ彼女は充分に魅力を持つて居り、會話の中には何か無條件に人の心を惹くもの、否、人を魅惑するものを持つてゐた。彼女から

告白した。彼女はこの企ての途上に横はつてゐる大きな数々の困難は、機智によつて打ち破り得ると思ひ、又カトリック信者として實際に離婚を遂行することは出来たとしても、尙決して新しい結婚をすることは出来ないといふ故障は、結婚が未青年の時に自分の意志に逆つて取り行はれたものであつた時には、再婚を許すといふ教會の定めの一線を引用することによつて無効に出来るだらうと思つた。それは餘り急いで近づくことによつて計畫を危険ならしめなうために注意深く實行に移されなければならなかつた。リストと夫人とは、夫人がとりあへず彼に非常に好感を寄せ居られたワイマールの大公妃の保護の下に身を置くべきだといふ點で一致したが、大公妃はロシア皇帝の姉妹として彼女の離婚に於ける弟皇帝の同意を得ることを望んで下さるに違ひなかつた。出發はカールスバードの温泉行きといふ名目の下に目立たぬやうに實行される筈であつた。一八四八年一月二十四日にリストはそこで彼の契約の履行の傍ら、次に来るべき事件の準備をするためにポロニンスからワイマールへと旅立つた。其の途中で彼は友人フェリックス・リヒノフスキーをラティボールに訪ねたが、彼は侯爵夫人の逃避のために國境近くの彼のクルチザノウイツの城を彼のために用立てた。

一八四八年二月の初めリストはワイマールに着いたが、リストのゐない間にそこでは大變化が起つてゐた。一八四七年七月一日に今までの劇場管理人フォン・シュピーゲルは辭職し、リストの推薦によつてワイマールつ子で大公嗣の侍従であるツィーゲザール氏がその地位についた。今までの支配人A・H・シェラーの支配下で非常に衰へたワイマール歌劇を再び有名な歌劇舞臺の境にまで持ち上げるといふ試みがなされるべきであつた。この活動の中心人物は、マリア・パウロヴナとカール・アレキサンダーであつたが、その一方に於てカール・フリードリヒ大公（一七八三年—一八五三年）は無味乾燥な性質の人であつたから、寧ろ實際的な事柄に身を捧げようと思つてゐた。大公嗣は

既に夏の間にリストに出した手紙の中で、この事をするために必要な同情と實際的な助力を乞うて居り、この事はあつた長い文章の中に既に明らかになつてゐる。

「ワイマール歌劇を早急に改革し、改良するには、直接に、一、新しい、若い、新進の女流歌手、二、現在は全く駄目な合唱團の進歩とが必要である。劇場の名譽を保持するためには、作品の注意深い練習と上演のための新しい實際の準備と共に、新しい人を契約することが必要である。」

リストは自分の力で計畫し始めた。彼は近き將來に永久的な住居を定める積りのこの町で、自發的に特別な謝禮はとらずに、二三の歌劇の管理を引き受けた。人々は當時相當な力で舞臺監督のEb・ゲナスト、テナリのゲッツェ、女流歌手のアグテとハルレルを支持して居り、更に間もなく、第一バリトンのフェオドル・フォン・ミイルデが現れて來た。リストは一時管理を引受けた。彼は眠りつつあるものを目覚ましめねばならず、彼の精神力の息吹きを以て、古い、病に苦しんでゐる體に新たに活氣を入れ、若返らせねばならなかつた。驚くべき速さで、彼は歌劇指揮の技法を會得し、短期間に彼は靜かな、凡てを達見せる統率者、英雄になつた。彼と並んで當時までの總指揮者の樂長として最初からリストを單なるうぬぼれや戀仇、敵手とのみ考へてゐた無才能でうぬぼれやのフランス人シェラーと有能なる指揮者カール・エーベルワインが現れた。リストの就任上演は一八四八年二月十六日に大公の誕生日を祝つて、かなり價値あるフロトーの「乾酪包紙の歌劇」がなかつたので、マルタをやつた。この月の末にグスタフ・シュミット作の歌劇オイゲン王子とフィデリオが行はれたが、その公演に彼は非常な注意を拂つた。又シューベルト作の歌劇アルフォンゾとエストレラの上演が既にこの年に豫定されてゐた。然しながらこの兩者は一八五四年になつてやつと實行された。リストはその一方宮廷演奏會を整備して、自分でもその演奏會で二度ばかりヘンゼルトの協奏曲を演奏した

が、この協奏曲のためにヘンゼルトは大公妃から鄭重なる感謝状を賜つた。その上彼は宮廷教師としても働かなければならなかつた。大公妃は彼から毎週四回歌の指導をお受けになり、マリア・パウロワナは作曲の稽古を受けられた。一八四八年三月の末にリストのワイマールでの仕事が終わつたので、彼は大公妃のお許しを得て、ウィットゲンシュタイン侯爵夫人に會ひに急いで行つた。この旅行の途中で彼は少しの間ドレーズデンに滞つた。そしてドレーズデンのホテル・ドゥ・ザックス(十七號室)で、彼はリヒャルト・ワーグナーに會つたが、この會見が二人の藝術家の美しい友情の始まりとなつたのである。リストはずつと後になつて、手紙の中でこの時の想ひ出を書いてゐる。「私達が初めて近くまみえたこの部屋の中で、私が貴方の天才をはつきりと認めた時」と。

これに反して、彼がワーグナーと共に、友達であつたローベルト・シューマンを訪ねた時、彼との間に不愉快な事件が起つた。リストは夜になつたらシューマンの三重奏曲を聞かせてくれるやうに頼んだ。それなのにシューマンは約束に遅れて、「彼は私達をたつぷり二時間は待たせた。」それが既に不愉快な事件であつた。三重奏曲演奏中リストは非常に愉快さうな様子をしてゐたが、その次に五重奏曲を演奏した時には、これは「ライブチツヒ風」です、と言つた。シューマンはこの言葉を非常に不愉快に感じた。それから更にリストが「非常に不眞面目で、私がそばで聞いてゐなければならず、直ぐに部屋を出てしまふことが出来ないのを恥かしく思はざるを得なかつた程」(クララの記述による)まづく演奏した時、シューマンは非常に怒つた。どうしてもちよつとした衝突が起らないわけには行かなかつた。それからリストは不注意にもマイヤーベルをメンデルスゾーン以上にほめた。その時シューマンは突然しやべり出した。「マイヤーベルなんかはメンデルスゾーンに比べたら、子供のやうなものだ。メンデルスゾーンは藝術家であり、ライブチツヒだけではない、世界中に藝術家だといふことを證明したんだ。リストなんか黙つてゐた方

がいいんだ」と。彼はリストの肩をつかんで「メンデルスゾーンのやうな音楽家のことをそんな風にいふことが出来る貴方は一體何者ですか。」と叫んで、部屋を出て行つた。リストは仲直りをしようとしたが、駄目だつた。彼は「今彼が私に言つたやうな言葉を私に平然と言つた人は世界中で一人しかなかつた、と御主人に傳へて下さい。」と言つて歸つてしまつた。それははつきりした仲たがひであつた。「ローベルトは何時まで忘れることの出来ない程深い傷を受けた。私は永遠に彼と仲たがひした。」とクララは書いてゐる。

リストはドレーズデンからリヒノフスキーの城クルチザノウィツに赴き、こゝで侯爵夫人を待つことになつてゐた。こゝで彼は苦痛に満ちた十四日間、不安の中に彼女の到着を待ち受けた。夫人は丁度その間にキエフで數箇所の莊園を賣り拂ひ、持參金と略々同額の一萬ルーブルの現金を作り、出發の準備をすつかり整へた。彼女は夫に一通の手紙を出して自分の決心を知らせ、更に別な手紙で役所に訴訟を提出した。幸ひにも偶然に彼女は娘と家庭教師のアンダーソン嬢を同伴して、ヨーロッパに突發した革命のために既に閉鎖されてゐたロシアの國境を越えて來た。そこでリストの侍僕が彼女達を待つて居り、何の故障もなくリストの處へ伴つて來た。彼等は尙數日その城に滞在し、更に十四日間リヒノフスキー侯爵夫人の城グレッツの客となつた。夫人がリストの子供時代を過した重要な土地として直接に見物して知りたいと思つてゐたアイゼンシュタットとライディングに寄り道をした上で、ウィーンへ旅行する計畫は、そこでも革命の恐怖に捲き込まれてゐたので、突然中止され、ワイマールへ歸ることになり、一八四八年七月初旬に二人はそこに到着した。夫人はワイマール近くのイルムの向ふ側にある丘アルテンブルグの別莊を借りた。その別莊はその後間もなく大公妃の買上げ給ふところとなり、全く夫人の自由に任せられるやうになつた。大公妃はしつかりと彼女の保護をなし、離婚を決定するために、弟ニコラウス大帝の許に玉歩を運ばれた。然し大帝はウィットゲ

ンシュタイン侯爵やその近親者達の彼女がポーランドの女革命家であるとの証言に動かされて、彼女の願ひを承諾しなかつた。それ以來離婚事務が幾度も延期になつたので、その時まで「エルプブリッツ」に住んでゐたリストはアルテンブルグに引越しをした。宮廷の人々も社交界の人々も共にこの關係の不愉快さを、不法にも強制せられたためだとして第一に認容し、二人を喜んで仲間に入れた。リストへの招待はその後専らアルテンブルグではなく、「エルプブリッツ」に送られた。

アルテンブルグはイエーナへの國道、或は有名な木立の中の三十三段の階段を上つて行つたワイマールの美しい景色を見下ろす、大きな三階建の素晴らしい建物であつた。建物は侯爵夫人とマリー姫の居間と、一般の人のための社交室とを含んだ大きな前屋と、リストの専用になつてゐる木立に包まれた翼屋と、例へばビューローとかラッフ、タウジヒ、コルネリウス等のやうな弟子達のためにいつもの居間が用意してある後屋とから出来上つてゐた。

リストがこの小ワイマールに於て、その藝術を愛する侯爵夫人の家は、彼に彼の偉大な藝術的計畫を實行に移すことが出来、可能性を一番美しく映し出したのであるが、最終に故郷を定めるためにあんなに、急に彼の名技生活を止めてしまつた時、何人といへども今度は藝術の天に如何なる朝焼が色を染め始めるかといふことを想像し得なかつた。ワイマールは短期間にドイツの音樂的中心地になつた。それは殆んどアルテンブルグの樂殿に客として滞在し、多種多様の計畫を持つて來た有名な一音樂家が與へたものであつた。リストが演奏するのを聞かうと思ふ人は何人でも、ワイマールに巡禮しなければならず、アルテンブルグで行はれる日曜日のマチネは間もなく世界の聽衆を引つけるやうになつた。尙音樂家だけではなく、美術界と學術界の有名な人々がリストと意見を交換するために、そこへやつて來た。殊に侯爵夫人が親しく交際をしてゐる畫家とか文學者とかは、そこへ敬意を表しにうやくやくやつて

來た。リストは訪問はいつもアルテンブルグの前屋で受けた。一階には小さな所謂主人の間に並んだ小さなサロンがあり、ペーゼンドルフのグランドピアノ、ペートーヴェンのデスマスクの原型の下に、有名な音樂家の畫像などが飾つてあつた。この部屋の一方には所謂武器室があり、凡て王侯や高位高官の人々からの贈り物である高價な武器と笛の蒐集が收めてあつた。この部屋にある唯一の繪はフェリックス・フォン・リヒノフスキーの、等身大の肖像であつた。二階には夫人とマリー姫とが家庭教師と共に住んでゐた。誰でも近より易い性質を具へた此處は、何よりも先づ當時に於ける個人の蒐集としては大きな圖書館であつた。エテールのグランドピアノとペートーヴェンの使つたことのある高價なブロードウツドのピアノが音樂的な享受に役立つた。それに隣つて簡単な裝飾を施された食堂を通り抜ける時、夫人がリスト博物館にした緑色の小部屋があつた。この部屋の四方の壁や戸棚の中には、リストの名手時代から熱心に集めて整理された凡ての故人の遺物や贈り物が置いてあつた。幼時以來の畫像や胸像はこの藝術家の生長過程を目の前に示し、高價な寶石や金銀細工品、さては澤山の賞状や勳章は彼の勝利の證據を示してゐた。リストの所有にかゝる珍しい草稿や樂譜は大きなガラス戸棚の中に一杯にあつた。リヒアルド・ワーグナーの總譜原譜は後年聖物を飾つてあるやうな特別な壁龕に入れられた。緑色の小部屋を出ると更に長い廊下がアルテンブルグの翼屋に導いて行き、そこにはリストの居間があり、庭から上がるもう一つの特別な階段室がついてゐた。大變單調な寢室とリストと侯爵夫人の二つの祈禱椅子だけしかない小さな祈禱室の外側に、リストの仕事部屋、所謂青の間があつた。その中にはグランドピアノとリストの大きな仕事用の書物机とそれから、たつた一つ裝飾畫としてアルブレヒト・デューラーの銅版畫「メラノコリー」があつた。もう一つの小さな書物机は侯爵夫人がリストと一緒に文筆的な仕事をする時に用ひられるのであつた。三階に二三の客室の他には唯一一つ大きな音樂室があるだけであり、そこでマチネや音

樂の催しが行はれた。二つのエラールのグランドピアノが何時も使はれてゐた。それからもう一つその横にパリーのアレクサンドルがリストの指示に従つて製作し、オルガンとピアノを複合するために努力したオルガンピアノとモーツァルトが若い間に用ひたスピネットがあつた。このアルテンブルグの家はこれに續く十年間、外面的には光輝に満ちてゐるやうに思へた藝術活動が行はれた梓であつた。このアルテンブルグの家政は仲々素晴らしいものであつて、ロシアにある侯爵夫人の財産が没收され、かなり自由を束縛されてゐたものではあつたが、それでもびくともしないものであつた。夜ともなれば屢々アルテンブルグの明るく燈のついた窓が、驚きに満ちてゐるワイマールの人々に夜會が行はれてゐることを知らせた。リストは主人役を行つた。御馳走は普通覆ひをかけて運んで来て、小さな机の傍らに整へられ、食事が終ると直ぐ、靜かに片づけられた。それからリストはピアノの横に立つて藝術の享受が始まること、そここに來てゐる藝術家は何人でも自分流に今夜の成功に力を盡して頂き度い旨を申し述べた。

然しながら之等のお祭り騒ぎと喜びのヴェールの後では、ぞつとする心の悲劇と、身も心もすり減らす魂の戦ひが行はれたのである。吾々は二人が同棲生活を續けて行くのに直面しなければならなかつた權力と陰謀に對する侯爵夫人とリストとの絶望に満ちた戦ひ——二人はその際にいつも忠誠の側に立つたのであるが——の二三のエピソードをもう一度考へて見なければならぬであらう。夫人に對するその當時のリストの戀がどんなに眞實で、心からのものであつたかといふことは、彼女に宛てた彼の手紙が明らかに示してゐる。「おゝもう、すぐ貴女に再びお會ひ出来るとは、私が心と魂、信仰と希望にかけて持つてゐるものは皆、唯、貴女の中に、貴女を通して、貴女と共に持つてゐるだけです。神の御使が貴女と共にあらんことをお祈り致します。貴女、私に導きの光を下さる曉の星、貴女と共にあらんことを。」(一八四八年四月二日)或ひは「私は貴女を通じて、貴女の中で、貴女と共に愛について考へます。

この戀なくしては、私にとつては天も地も憧れに値しません。私の心と魂の凡ゆる聲は、崇高な愛の歌を歌つてゐます。貴女もこの事を夢に御覽になることでせう。それですからどうか私を貴女の許にゐさせて下さい。貴女の許は私にとつて最も自由な所です。本當に、貴女以外の事は私にとつてはみんなつまらない、空しい事ばかりです。」(一八五三年三月十一日)

二、ワイマール歌劇の勃興 (一八四九年——一八五八年)

リスト自身が、その間に非常に纖弱の中に圓熟した、彼一流の創作を持つて登場する以前に、彼は活潑な改革的、宣傳的活動を展開したのである。彼の第一の活動は、ワイマールの小規模な資金で管絃樂合唱を改革し、再組織し、それを大きな使命に役立つやうにする事であつた。この事が或る程度まで出來上り、古典音樂家の記念的代表作曲がしつかり再演されるやうになつた時に、今度は同時代の作品をそれ相應に認めて行くことを、リストは凡ゆる藝術の施設の義務であると思ふやうになつた。

「現在生存し、華々しく活動してゐる者に對して、神の如き讚仰を要求するなどといふのではなく、吾々は彼等に對して藝術の領域に於ける彼等の功績に適つた全部の市民性を回収するだけである。——絶えざる追放命令のない市民權、永遠の呪逐のない市民權、それを彼等は、自分達に先んずる巨匠の隠れたる、或ひは公然たる敵として、危険な放火者として、換言すれば、民族的復讐が藝術の衰微に對して責任あるものとして交附する。その理由は唯、單に彼等が先進の巨匠とは違つたやうなことをし、他の方向をとつて理想に向つて努力し、又巨匠となるからである」と

リストは云つた。彼は眞の藝術實踐から、次のことを要求してゐる。

「一、前時代の傑作に對する一層知的な、一層誠實な畏敬の念、この畏敬の念から出發して、凡ゆる變化、凡ゆる一層新しき、一層よき翻譯、精細精微なる改善の追求、——不當な災ひにより忘れられてしまつた傑作の演奏——前時代の有名な歌劇を計畫的に上演實行すること、——その再現に當つて粗漏のないこと、面倒な義務から逸れようとしないこと、著名な巨匠の記憶を實踐の前に傷けないやうにすること、——主として、然し充分なるメンバーを用ひないで、或ひはパートを満足に割り當てずに再現してはならない。

二、現在、愛好を以て鑑賞されてゐる作品の研究を勤勉に、絶えず、良心的に行ふこと、このことから次のやうなことが要求される。イタリア、フランス及びドイツの巨匠の最も良き作品を計畫的に、黨派心なく交代すること、それには一つのジャンルに對する偏愛なく、或る一つの樂派を除くといふことをなくすること、——研究に最も緊張せる努力を拂ふ、かうした演奏を藝術的な、美の決定的な生起によつて特徴づけるところの熱心な努力は、かゝる作品を、それが唯流行してゐるからとか、収入があるからだとか、或ひは人々が唯、容易によく注文するやうな劇場廣告を出せば、満足するからといふやうな理由で、プログラムに入れるやうな、劇場で起るよりも一層高尚な刻印を、それらの作品に與へることになる。——新作が現れたら、直ぐにそれを敏捷に手にとつて見ること、それは到る處で既に出世が終つた時になつて、古い珍奇なものとして持ち出すやうなことのいやうに。ミイラを準備するやうな、かかる無意味なやり方は、それに關係する劇場を外部に向つて不信用にする結果を有つに過ぎない。

三、未出版の作品に對しては廣い、束縛ない顧客を作ること、吾々はその將來を信じ、注目すべき特性を認めたらういので、作者が有名だとか、有名でないとかはどうでもよく、或はまた、それが南、北、東或は西ドイツに屬

してゐるとか、吾々の國の人、他國の人だとかは問題でない。——藝術がその前で赤面せざるを得ないやうな、單に見る快感に訴へる如き物は、一切嚴しく禁じ、追放すべきである。本當に才能に恵まれた藝術家さへも賤しまないやうな、凡ゆる民間の作品に、頑固に、根本的に閉め出しを食はせるならば、寧ろ喝采を強要し、その價値の下にある長所を追求すべきである。」

この今日に於ても尙、確かに注目し得る問題を、リストはワイマールで出来るだけ探究しようとした。それでも尙、彼は歌劇の行政上の管理には殆ど關與してゐなかつた。彼は唯、専ら自身上演し度いと思ふやうな二三の作品を上演する季節の始まりを定め、その練習を引受けた。劇場監督が、彼の目的に理解を持つて居り、彼を支持してゐたので、凡てのことが彼の希望通りに進行した。ワイマールに於ては大公妃の誕生日のお祝に際して、いつも今まではこの場合にはフランス、或はイタリアの作曲が選ばれてゐた。新しい歌劇を上演して祝典を行ふといふ習慣があつた。リストの眼は新しい作品と共に、ドイツ音樂の探究に向けられたので、彼はドイツの宮廷劇場、特に古都ワイマールは先づ以てドイツ藝術を育てるべきであり、この光榮ある義務が充された後、初めて外國のものに關心を向けるべきであると考へた。その時、偶然にもリヒャルト・ワーグナーが一八四八年八月末に、以前から困つてゐた金銭上の問題に就いてリストと相談するために、數日間彼の宅へお客としてやつて來た。この機會にリストは彼が未だ聞いた事のないタンホイザーがドレーズデンで上演される時、一度出席し度いといふ彼の希望を述べた。然しその機會は決してやつて來なかつた。タンホイザーは既に一八四三年、ワーグナーの指揮の下にドレーズデンで上演されたが通り一遍の結果にしか至らなかつた。二年後に行はれた新しい練習でも同様の運命に立ち至り、この歌劇の發表は、失敗のために殆ど完全に放棄されてしまつた。侯爵夫人は唯一度、ドレーズデンに於けるタンホイザーの上演に出席

し、この作品から深い感銘を受けてゐた。リストはそれ故、大公妃の誕生日に上演すべき歌劇として、ワイマールにタンホイザーを推薦し、この推薦は宮廷によつて許可せられた。恰も彼はそのための準備として、彼が自分の指揮に委されてゐた第一回宮廷演奏會で、一八四八年十一月十二日、タンホイザー序曲を演奏した。いつやつても人氣の悪いタンホイザーの上演が、唯この度だけ、その企てを發表しただけで大センセーションを捲き起したといふやうなことは今日では殆ど考へられない。世人はこの上演を全然馬鹿げたことだと思つてゐた。この上演はワイマール全體に於て激しく議論され、非難された。或る夜、一人の侍従がリストの前で次のやうなことを云つた。「どうしてパリーで上演された歌劇を上演してはいけないのですか。ドイツの歌劇を取り上げるなんて馬鹿げたことですね」と。「何、馬鹿げたことですか」とリストは叫んだ。「右にも左にも馬鹿者ばかりだ。俺は自分の道を歩きます。この歌劇をやりますよ。」彼はそれによつて、大衆の侮辱に一矢を報いたが、何の問題も起らなかつた。リストは非常な熱心さで練習を指導したが、ワイマールの人々がタンホイザーのやうな、稀にしか上演されない困難な曲を上演するといふことが、實際的にどんな意義を持つて居り、やらうとしさへすれば思ひ通りに出来るかといふことに氣がつきさへすれば、リストの仕事も決して小さなものではなかつた。而も尙作品の美しさと、共同で仕事をやるための感激とは、凡ゆる不愉快な出來事を補つた。さういふ時に、突然上演の六日前になつて、主役の背信といふ事件が起つた。ゲッツェが非常に疲れてゐるので唱ふことが出来ないといふのである。その時ゲナストはゲッツェのパートを唱ふドレーズデンの歌手、第一テナーのヨーゼフ・ティヒャチェックを出演させる許可を劇場監督リュティヒャウから得るために、直ちに自分でドレーズデンに赴き、非常に苦勞してやつとその仕事を仕上げた。それで一八四八年二月十六日にその作品はティヒャチェックを使つて上演され、非常に立派な結果を得た。ワグナーは非常に驚いて「この歌劇は、

凡てが新しく、凡てが思ひもよらないものであつた。この度の上演では、私が大藝術家の友情の面影で氣づくことが出來た素晴らしい經過、否筋がある。尙殊にリストは親切に充ちた手紙の中で、來る五月『タンホイザー』の第三回の上演に際して數日間ワイマールを訪れることを決めてくれた。」この友人達の再會は、永く待たれるべきものではなかつた。殊にその會見は二人が豫期してゐたのと全然別な結果を齎した。ワイマールに於けるタンホイザーの上演後間もなくドレーズデンに革命が突發し、彼の藝術上の進歩的な考へのために宮廷から革命家だと思はれてゐたワグナーは、亡命しなければならなかつた。五月十三日日曜日、彼は突然當時尙リストが住んでゐたワイマールのエルププリンツ・ホテルで、リストの眼の前に現れた。ワグナーは眞先にリストに、彼の不安な問題を打ち明けることはしないで、五月十九日までアルテンブルグの城に——リストが侯爵夫人に彼を紹介したからであるが——滞在した。こゝでは屢々藝術の問題に關する熱心な談話が行はれ、侯爵夫人の反對の意見——その意見が後で、非常に大きな影響を與へたといふことであるが——によつて、屢々活潑な議論にまでなつた。又その一方、リストの指揮によるタンホイザーの練習にワグナーも出席した。

「この指揮によつて、彼の中に第二の私を再認識して私は驚いた。私がこの音楽を作曲する時に感じたことを、彼はそれを演奏する時に感じてゐた。私がそれを書き下す時に云ひたかつたことを、彼は演奏する時に云つてゐた。實に驚くべきことだ。凡ゆる友人になか／＼稀な、この愛情によつて、私は故郷がなくなつた瞬間に、本當に永い間撞れてゐたところの、間違つた場所では到るところ求めても見出されなかつた私の藝術に對する故郷を得たのである。私が遠方へ迷ひ歩いた時に、こゝを私の故郷とするために、この徧ひ人は或る小さい場所にいつも歸つて來たのだ。援助が必要となれば、いつも私のことを心配してくれ、いつも速かにしつかりと助けてくれ、凡ゆる私の望みに對し

て廣く開かれた心を以て、私の全部に對して獻身的な愛を捧げてくれたのは、リストであつた。こんな人は今まで見出したことはない。而もそれは充分に私共を取り巻く彼にのみ、それを理解するといふ程のもです。」

かれこれするうちに、自分が高く評價してゐるタンホイザーの作者に、是非親しく會ひたいと思つて居られた大公妃マリア・パウロヴナがリストの紹介で、ワグナーとお會ひになつた。晩年になつて、彼は手紙の中で屢々、この瞬間と「かの大公妃が、彼に示し給うた温い同情によつて、彼に與へた素晴らしい印象」について書いてゐる。こゝに書くことの出来ない二三の義務に強制せられて、リストは丁度この時三日間旅行しなければならなかつた。ワグナーはアルテンブルグの城に滞在してゐた。この友人の不在がワグナーにとつて不幸を齎さうとは!! ドレーズデンに於て彼の逮捕状が發せられ、遅くとも三日の中には、公布される筈であること、それ故、彼に速かに逃亡すべきことを勧めたところの妻からの三通の手紙がやつて來た。そこで彼女は、彼の住居ではなしに、リストのところへ報知した。この手紙によつて、初めて本當の事情を知つたリストが歸つて來た時には、既に猶豫期限が経過して居り、逃亡は非常に危険となつてゐた。だが、すつかり準備を調べてしまふまで、ワグナーをどこか安全な隠れ場所に送るといふことが肝要であつた。リストと仲のよいイエーナからやつて來たジーベルト博士の世話によつて、ワイマールから程遠からぬ御料地マダラの管理人で、リストの友人であるウエルンスドルフの所に、當分の避難所を見つけたとが出來た。こゝでワグナーは五月十九日から二十四日まで送つた。彼の誕生日の前夜、彼の妻ミンナが彼と別れをするために二日間やつて來た。その間リストは安全に逃亡出来るやうにするために、非常に氣を使つた。五月二十四日にワグナーはリストから手紙で、リストと彼の友人イエーナ高等學校教師O.L.B.ウォルフが待ち受けてゐるイエーナに呼ばれた。二人は彼を世話することになり合つてゐた。それからワグナーは、ウィルドマン博士を訪

ねて、リストが探し出した道を旅行し、チューリヒを通つて無事にパリに着いた。ワグナーのドレーズデンに於ける態度を、ワイマールの友、即ちウィットゲンシュタイン侯爵夫人は快く思つてゐなかつた。ワグナーをワイマール宮廷にとりなしてから、彼女は次のやうなことを書く氣持になつてゐた。「破れた戸は叩かないものだ。」尚チューリヒで、ワグナーはタンホイザーに關してリストの書いた論説を受取つたが、その論説は間もなくフランス語でジュルナル・デ・デバに發表せられたものであつた。リストはこの論説中に於て、作品の藝術的分析をしようと試みたが、この藝術的方向の新しさと價值は、聽衆の理解を容易ならしめた。彼の試みが如何に成功に充ちてゐたかといふことを、ワグナーの真心の溢れた感謝の言葉が示してゐる。

「貴君は、あの論説でどんなことをしましたか。貴君は大眾に私の歌劇を解説しようとし、我が歌劇自身の代りに本當の藝術作品を作り上げました。丁度貴君がこの歌劇を指揮するやうに、今度はあの歌劇に貴君獨特の新しい、全く新しい解説をしてくれました。私はその論説を讀み終へるや否や、先づ次のやうに考へました。この素晴らしい男は、眞心から自分自身を表すことなくしては何事もなし得ない。彼は何時も單に再現するだけでは濟まされなく、純粹な再現以外のことは何も出來ないのだ。凡てのことは、彼の中から絶對的な、純粹な製品となつて迸り出る。それであるのに、彼は彼の意力を一大作品なる新製品に紡がうとしないのであらうか。彼は完成せる個人として利己主義なところが餘りにないではないか。あゝ! 愛する友よ! 貴君を思ふ私の心は尙も熱狂してゐる。今尙、私は貴君の友情を非常に利用してゐる。それ故私の心は、全く無意に感歎に耽り得るのみである。」

リストは、その年の夏タンホイザーの他に尙オーベルの歌劇ハイデー——之は全然つまらなかつた——コーブルグのエルンスト二世公の作品「トニー」等を初演し、今や彼は八月中、再び偉大なる企てのために準備を行つた。ゲー

テ誕生百年記念日に、祝典が行はれることになつてゐた。ドイツの輿論は革命のために萎縮し、祝典には同意してゐなかつた。ワイマール、否これに拍車をかけられて全ドイツが、その名譽を望んでこの祝典のために立上がつたといふことは、リストの大なる精力によるものであつた。ワイマールでは大演奏會と祝典上演が劇場で企てられた。リストはローベルト・シューマンに「ワイマールのために、ファウストの作を使はせて貰へるかどうか」と問合せた。シューマンは總譜を送り、それに前年の不愉快な突發事故を考慮して次のやうに書いた。「然し、愛する友よ！ 貴方にとつてこの作曲は多分、餘りにライブチック風ではないでせうか。私の作曲したものを非常に澤山知つていらつしやる貴方からは、普通のやうな一人の藝術家の全生活に就いて下される判断とは異つたものを、私は眞面目になつて想像してゐたのです。實際はさうでなかつたのです。といふのは、貴方の意見は不當であり、私を怒らせたものから。」この手紙はシューマンが、あの事故のことで尙リストに恨みを持つてゐることを云ひ變へたものである。然しながら、シューマンは丁度リストを必要としてゐたので、氣を取り直した。この戦は將來ずつとシューマンとリストとの間に續けられた。この手紙の中で彼はライブチックで間もなく行はれる「ゲノフェファ」の上演に出席するやうリストを招待し、リストはその招待に對して町重に、次のやうに返事してゐる。「特に、貴方にお許し願ひ度いことは、貴方は一體永い間私のことをどう考ふべきであつたか、即ち貴方は私のやうなつまらないものでも、それ以上正直に尊敬し、驚歎する者は誰もゐないのだといふことを繰返して申し度いと思ひます。ゲノフェファの上演に私は『太鼓持ち』をしますと御通知申上げます。」

シューマンは、この悪意のない冗談を、既に何遍も個人的な侮辱であると思つてゐた。——リストは自身で百年祭のために、ゲーテ祝典行進曲と數箇の合唱曲とを作曲したが、これらは一つの祝典アルバムの中にまとめられては居り

ながら、行進曲を例外にすれば、他の祝典作曲の水準以上には殆ど出てゐなかつた。祝典演奏會は八月二十七日に、リストの行進曲を以て開始され、今まで述べた作曲以外には、その中では例へば男聲大合唱曲「光より光へ」が大喝采を博したが、シューマンの淨化とベートーヴェンの第九交響樂のワイマール初演とが行はれた。記念日はゲーテのタッソーの上演で祝はれたが、タッソーはリストが祝典の直前に完成してそれ以來、當日までに發表してゐなかつた交響詩に序曲と同様な標題を附けたものであつた。このゲーテ祭には六月中、十四日間リストの所にやつて來てゐた當時十八歳のハンス・フォン・ビューローが父と共に出席してゐた。彼の手紙の文章によれば、リストは大抵午前中はアルテンブルグで仕事をし、午後はそこでいつも音樂をし、夜はテーブルに向つて ترامプをして遊んでゐた。「リストが私に打ち開けたところによりますと、彼が何か大作品に着手したとか、數箇の管絃樂伴奏附ピアノ協奏曲を完成してゐるとか、バイロンの詩によるイタリア歌劇『サルダナバル』を殆ど完成したとかいふ世間の噂は正しいとのことです。」

リストは八月の末、祝典が終ると、侯爵夫人と令嬢とを伴つて、骨休めにヘルゴランドに行き、そこで文筆家仲間のアドルフ・シュタールとフアン・レワルド、ユリウス・フレールベルス、就中フランツ・ディンゲルシュテットと有名な女流歌手であつたその妻イェニー・ルツツェル等と愉快な數週間を過した。當時ストットガルト司書官で演出家であつたディンゲルシュテットは、これより先一八四五年に、リストに對しワイマールの司書官長に推薦してくれるやうに頼んでゐた。「私の計畫は一、若し可能なればワイマールを終へてベルリンに至るか、二、若しくはワイマールで貴方と共にそこで、(a)ワイマールの傳統とホーエンツォーレルン家の金で『ホーレン』とか、『メルクル』の詩を立派なドイツ風のレヴューに組立て、貰ふこと、(b)私の妻の助力を得て、貴方の音樂上の計畫をそこで完成する

こと、(4)一度その劇場を貴方と共に引受けることであります。この企ては小さいものではありませんが、それを基礎としたならば、どんな偉大な事業でも充分に出来ます。」

今や、この二人の間の友情関係は再び結ばれ、リストは彼にワイマールで、彼のことをよろしくとりなすことを約束した。彼はその約束を忠實に果たした。そのことに關してディングエルシュテットが、どんなにリストに感謝したかといふことに就いては後で述べよう。

九月末にリストは、かねて侯爵夫人が湯治をし度く思つてゐたビュッケブルグの近くにあるアイルゼン温泉に赴いた。こゝでマリイ姫が病氣になり、そのためワイマールへ歸るのが一八五〇年一月の初めまで遅れた。

十二月一日にヨアヒム・ラッフがアイルゼンに立寄つた。彼は數年前ケルンでリストに世話して貰つた地位を止めて、それ以來貧困の生活を送つてゐたのであつた。この時彼は再びリストの勧めに従つて、「宿泊所で年六百ターレル」で、彼の秘書となつた。彼はリストに代つて手紙を書き、例へば「ゲート財團に就いて」といふやうな、リストがフランス語で書いた論文をドイツ語に翻譯し、更にリストが作曲の仕事をする際には價値の多い助力者であり、忠告者であつた。リストの二三の管絃樂曲の編曲はラッフの手になつてゐる。二人の關係は全く友情的なものであり、彼等の仕事に於ては互に助け合ひ、補ひ合つた。アイルゼンでリストは、ひどい憂鬱症に悩んだ。彼の友人であるハンガリアの大蔵大臣パティアニ伯爵が、十月六日に多くの同志と共に死刑になつたことは、彼に非常な打撃を與へた。彼のハンガリア國民的な作品「葬送曲」の中で、彼はこの事件に對して深刻な死者哀悼の意をこめて泣いてゐる。

アイルゼンに滞在中の主なる仕事として、彼は文筆上の仕事をした。即ち、ゲート百年祭を機會に、「國民の道徳的進歩に對して、彼に與へる影響を増大する點に於て、ドイツの藝術制作に、進歩と活氣を與へた」ゲートを記念す

るために、當時設立する筈であつた或る施設の創立に際して、ベルリンから當時ドイツ精神界の有名な人々の署名のある指令がやつて來た。そして又「藝術のために學校か、美術館か、學士院か、さもなければそのやうな施設を建設すべきかどうか」を決定すべき委員會が任命された。一八四九年十月末に提出されたこの委員會の決定報告には、この問題に對する明確な解答は全然現れてゐなかつた。この時に當り、リストはワイマール大公に提出された「ワイマールに於けるゲート財團」なる論文を以て登場して來た。リストは單なる音樂家ではなく、藝術家であり、藝術の各領域に對する理解と興味と指導精神とを持つてゐた。彼にとつては、もとく音樂、繪畫、文學、……と分化した藝術はなく、唯凡てを包括する一つの藝術、即ち総合的な藝術があるだけであつた。彼の計畫は、この高遠なる見解に基いて凡ての藝術を統一し、より廣い意味に於けるギリシアのオリムピアのやうなものに導かうとするものであり、更に彼はその中でゲートの名に關係の深いワイマールを、凡ゆる藝術の教育所、ドイツの精神的な中心點、即ち「藝術の都」に再び高めようと思つてゐた。凡ゆる藝術——詩歌、繪畫、彫刻、音樂——の對立は年々變化して、こゝで最高の力に發展する筈であつた。そしてこの年々の行事から毎年記念物を得るために、博物館に飾るための賞金をかけた彫刻と、圖書館に收めるための文學的及び音樂的競争とが創められる筈であつた。これら凡てのものはワイマールで始められる豫定であり、さうすればワイマールはそれによつて藝術の殿堂となつたことであらう。然しながら、この計畫は世の中で行はれるためには餘りにも理想に過ぎ、餘りにも美し過ぎた。ワーグナーはそれに對して、個々の藝術は凡ゆるもの上位に据ゑられるべきものであるとの意見を述べたが、それは正しいことであると云ふべく、彼はそれ故自分の慾求を音樂劇の領域にのみ限定した。シューベルは又繪畫をのみ知らうと欲した。最初の中はワイマールの宮廷は、この計畫に非常に感心し、それは實行に移された。人々は先づ第一に、有名な文筆家達をワイマールに

呼ぼうと試みた。彼等は先づオットー・ルードウィヒやゲルビヌスを呼ぼうとして失敗してから、ホフマン・フォン・ファレルスレーベンとオスカー・シャーデ（一八五四年）を招くことに成功し、この二人はワイマール年報を發行することになった。そして又ずつと前から、アドルフ・シュタールがワイマールに移住し度いと交渉してゐた。彼はワイマールでゲーテ財團のために、一つの圖書發行機關を設立し、經營し度いとのことであつた。彼は又、それに關する計畫書を大公に提出したが、ワイマールではなかく實行に移されなかつた。そのことは遂には、砂中に葬り去られてしまつた。ゲーテ財團はリストが後年大公に書き送つてゐるやうに、「葬られてしまつた。」凡ての計畫は結局金の問題で失敗に終つた。實際大公はいつもリストの考への中の二三の小さな點だけをとり上げて、例へばゲーテとシラーの二重立像のやうな多くの小さな點だけはやり始めるけれども、計畫の全體の主要問題になつてゐる本當に大きな問題は、その際に忘れられてしまつた。彼等は全體をなすやうな手段を一度にとることを恐れ、雨垂れの垂れるやうに少しづつやつて行くのだ。このやうに色々な制度を設立する計畫は、それ自體では全く存続することもその意義を有することも出來ず、そして全計畫は實行されずにしまつた。それでも、リストにはいつもくきつと心の奥底から色々な藝術的な計畫、即ち音樂を他に比類のないものに持ち上げようとする計畫が湧き起つて來るのであつた。

リストがワイマールに歸つてから（一八五〇年二月）大公妃の誕生日のお祝ひとして、ワーグナーの編曲によるグルックのイフィゲニー・イン・アウリスが上演された。リストはいつもく金に困つてゐる友人に、この上演によつて報酬を得させることが出来るやうに、この上演曲目の選擇には抑々の初めから、その任に當つてゐた。ワーグナーはその頃ワイマールからパリに赴き——彼はそこでリストの計畫に従つて、新しい歌劇を上演して相當な成果を得たとのことであつた。——更に、リストから相當な金額の補助を受けて、チューリヒの靜かな環境の下で作品を完成出

來るためにチューリヒに移つた。

尙、彼はワイマールからその時ドレーズデンに歸つてゐた妻に、ずつと以前に完成してゐたローエングリンの總譜をリストに届けるやうに依頼した。然し彼女は、彼がワイマールを離れた後になつて、やつとその依頼を果した。リストは非常に熱心に研究をなし、この作品に對する彼の驚歎の念は日に日に高くなつた。唯彼は上演する際には「その作品の中に確固に保たれてゐる非常に高い理想の色彩が理解され難いことを恐れた」。彼はチューリヒにゐるワーグナーに總譜を再び送り返し、次のやうに書き加へた。「私は貴方のローエングリンを聞いて涙を流すことは困難です。私がこの作品の根本理念とその巧みな表現に深くひたればひたる程、この異常な作品に對する感激も昂ります。それに尙、私がこの作品をこの儘の姿で上演することに、二の足を踏むとしましたら、どうか私の偏狹な疑ひ深さをお許し下さい。」

一八五〇年一月にワーグナーは、結局リストの希望により、彼の事件を現場で争ふために再び急いでパリに赴いたが、彼が色々と骨折つたにも拘らず、以前考へてゐたやうに萬事無駄であつた。そこで、彼が「病氣になり、金はなく、失望し、一人でくよくよしてゐる時に、彼はその時まですっかり忘れ去つてゐたローエングリンの總譜に思ひをいたした。彼はこの青白い紙に書かれた音譜は、今後も決して實際の音となることはないだらうと悲しく思つた。」——「愛する友よ」、彼はリストへの手紙にかう書いてゐる。「今私はローエングリンの總譜の一部を讀みました。——私は自分の作つたものを讀むやうなことは殆どありませんのに。この作品を上演したいといふ驚くべき希望が、私の中で燃え上がりました。お願ひですから、これに力を藉して戴けませんでせうか。私のローエングリンを上演して下さい!! 貴方は私がお願ひを申すことの出来る唯一人です。貴方以外の人には、誰にもこの歌劇の初演を願ひま